

富士宮市文化財調査報告書 第13集

渋沢遺跡

富士宮市立富丘小学校運動場拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書 第13集

渋沢遺跡

富士宮市立富丘小学校運動場拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

富士宮市教育委員会

序

富士宮市は富士山より南西、および西方にかけて緩やかな裾野の傾斜地にひろがる地であり、恵まれた気候、風土は遠く原始の時代より人々の生活が営まれ、市内の随所にはそれら先人の足跡として、貴重な文化財が数多く残されております。

これらの文化財につきましては文化財保護法に基づき、積極的な保護、保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めておりますが、近年における地域開発の進展は文化財、とりわけ埋蔵文化財に対して少なからず影響を与えつつあります。現在、この埋蔵文化財の取り扱いがもっとも大きな問題となっており、開発事業等の土地本来の利用との調整段階では、できる限り現状保存の方針で対処しておりますが、事業内容等により現状保存できないものに対しましては発掘調査を実施して、記録保存の措置をとっております。

今回、調査報告書が刊行されます富士宮市立富丘小学校運動場拡張事業に伴う渋沢遺跡埋蔵文化財発掘調査につきましても、関係諸機関との慎重な協議が重ねられ、昭和57年10月から58年12月までの間、延べ日数にしまして50日余を費やしたものであります。そして、その成果は別記に報告のとおり、単に富士宮市の歴史を探る手がかりだけでなく、広く周辺地域の原始、古代史解明への貴重な幾多の新資料を提供してくれました。

人類文明の曙についての経過は今だ定かでなく、この問題の解明には発掘調査という地味な成果を徐々に積み重ねる以外に方法はありません。こうして遅々ではありますが明らかにされつつある郷土の歴史は単に学術的意義のみならず、今後の市民生活のなかに根付いた文化行政として大切に生かされて行くべきであろうことに大きな意義を持たなければならないと思います。

ここに富士宮市文化財調査報告書第13集、渋沢遺跡を刊行して、多くの方々のご批判とご指導を承るとともに、最後になりましたが、本書の刊行にあたり、埋蔵文化財の意義を理解され、格段のご配慮を賜りました地元関係者の皆様、また調査の完遂にご指導いただきました静岡県教育委員会のご尽力に対しまして深く感謝の意を表します。

平成元年3月

富士宮市教育長 田口 哲

例　　言

1. 本書は富士宮市立富丘小学校の運動場拡張事業に伴い発掘調査を実施した、静岡県富士宮市淀師字渋沢501-1番地外に所在する渋沢遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は富士宮市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は昭和57年10月～12月に第1次調査、昭和58年7月に第2次調査、同年11・12月に第3次調査をそれぞれ実施した。
4. 発掘調査は富士宮市教育委員会社会教育課主査・渡井一信、同学芸員・伊藤昌光があたり同主査・馬飼野行雄が補佐した。
5. 発掘調査資料の整理は渡井と、富士宮市教育委員会嘱託・山上英譽が主体として実施し、馬飼野及び、整理作業員の協力を得た。
6. 本書の執筆は渡井と山上があたった。その分担は、各文末に記す。
7. 遺構関係の図は主に渡井が作成した。土器の実測・清書は山上があたり、土器拓影、断面実測は山上が整理作業員の協力を得て実施した。石器の実測・清書は整理作業員の協力を得て渡井があたった。
8. 遺構の写真撮影には、渡井・伊藤があたり、出土遺物の写真撮影については、土器を山上、石器を馬飼野があたった。なお、航空写真は富士宮市弓沢町397番地・望月最敏氏及び、富士宮市市民都市民生活係長・後藤章氏より提供されたものである。
9. 地形図・遺構図に記す高度は全て海拔高度をもって示している。
10. 第1、4、7図に用いた地形図は、第1図が昭和60年1月、第4図が昭和45年2月、第7図が昭和51年10月に、それぞれ建設省国土地理院長の承認を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。
11. 土器実測図は縮尺4分の1、土器拓影図は縮尺3分の1で掲載されており、図中に縮尺が示される。石器もその法量が多岐にわたるため、3分の2、4分の1、8分の1と、それぞれの図中に縮尺を示している。
12. 土器観察表に記される胎土の略語は以下のとおりである。
粗…粗粒 細…細粒 多…多量 少…少量 微…微量 砂…角閃石・輝石・かんらん石等を混えるもの 砂礫…粒度が粗くなる。
13. 土器観察表に記される色調は、破片面積の最も広い範囲を専有する色合いである。新版標準土色帖 農林水産省農林水産技術会議事務局監修で補って判断している。
14. 印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。
15. 発掘調査に関する全ての資料は富士宮市教育委員会で保管している。

16. 調査及び、報告書の作成にあたって、次の方々から協力をいただいた、記して感謝する次第である。〈敬称略〉
萩原哲、植松章八、野村昭光、中野国雄、加納俊介、平野吾郎、小野真一、福垣甲子男、若月正己、石黒立人、佐藤由起男、滝沢 売、林原利明
17. 発掘調査現場作業員、整理作業員は以下のとおりである。
望月秀雄、杉沢正敏、佐野秋男、勝亦英雄、小林七造、友野勝、塙川浩正、依田孝郷、佐野 一、高木 均、土井満里子、渡辺房子、渡辺直美、大原初江、望月あき子、望月 安子、芦川美智子、勝又麻里、北川みゆき、赤池由香子、佐野知穂、川合美枝子、渡井啓子

※本調査の現場作業に従事され、多大なるご労苦、ご協力をいただいた、今は亡き小林、大原両氏のご冥福を心よりお祈り申しあげます。

目 次

I	発掘調査の経緯と経過	1
1	経緯	1
2	経過	3
3	荻氏表探資料について	5
II	環境	7
1	遺跡の位置と環境	7
2	土層	8
3	周辺の遺跡	10
III	遺構	11
1	A地区	11
2	B地区	12
3	C地区	12
4	B地区調査区域外	15
5	富士宮市史掲載資料について	18
IV	遺物	22
1	土器	22
2	石器	50
3	その他	58
V	調査総括	59
1	渋沢遺跡の土器について	59
2	土器棺墓について	60
3	石器について	62
4	おわりに	64
付 編		65
1	荻氏表探資料について	65
2	別所遺跡の資料について	65
3	押出遺跡の資料について	66

挿 図 目 次

- 第1図 位置図
第2図 発掘調査区域図
第3図 A地区全体図
第4図 周辺地形図
第5図 地形断面図
第6図 土層図
第7図 周辺の遺跡
第8図 調査区全体図
第9図 遺構実測図
第10図 土器棺墓実測図
第11図 C12号遺物集中区遺物出土状況図①
第12図 C12号遺物集中区遺物出土状況図②
第13図 C7号土器棺墓出土土器
第14図 C8号土器棺墓出土土器
第15図 Z-7グリッド調査区域外出出土土器
第16図 富士宮市史掲載資料①
第17図 富士宮市史掲載資料②
第18図 器種分類図
第19図 富士川町山王遺跡出土土器
第20図 波状文の分類図
第21図 土壙出土土器
第22図 C12号遺物集中区出土土器①
第23図 C12号遺物集中区出土土器②
第24図 C12号遺物集中区出土土器③
第25図 C12号遺物集中区出土土器④
第26図 A地区出土土器①
第27図 A地区出土土器②
第28図 A地区出土土器③
第29図 A地区・B地区出土土器
第30図 C地区出土土器
第31図 石器実測図①
第32図 石器実測図②
第33図 石器実測図③
第34図 石器実測図④
第35図 その他の遺物
第36図 渋沢遺跡周辺の土器棺墓
第37図 萩氏表採土器①
第38図 萩氏表採土器②
第39図 萩氏表採土器③
第40図 別所遺跡表採土器
第41図 押出遺跡表採土器

挿 表 目 次

- 第1表 発掘調査経過表
第2表 遺構計測表
第3表 土壙出土土器観察表
第4表 C12号遺物集中区出土土器観察表
第5表 A地区出土土器観察表
第6表 B地区出土土器観察表
第7表 C地区出土土器観察表
第8表 石器組成表
第9表 石器計測表①
第10表 石器計測表②
第11表 萩氏表採土器観察表
第12表 別所遺跡・押出遺跡表採土器観察表

図版目次

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 図版 1 航空写真 | 図版 16 A 地区出土土器② |
| 図版 2 調査概要① | 図版 17 A 地区出土土器③ |
| 図版 3 調査概要② | 図版 18 A 地区出土土器④ |
| 図版 4 調査概要③ | 図版 19 A 地区・B 地区出土土器 |
| 図版 5 調査概要④ | 図版 20 B 地区出土土器 |
| 図版 6 出土土器・富士宮市史掲載資料① | 図版 21 B 地区・C 地区出土土器 |
| 図版 7 富士宮市史掲載資料② | 図版 22 出土遺物 |
| 図版 8 土壙出土土器① | 図版 23 出土石器① |
| 図版 9 土壙出土土器② | 図版 24 出土石器② |
| 図版 10 C 12号遺物集中区出土土器① | 図版 25 出土石器③ |
| 図版 11 C 12号遺物集中区出土土器② | 図版 26 萩氏表採土器① |
| 図版 12 C 12号遺物集中区出土土器③ | 図版 27 萩氏表採土器② |
| 図版 13 C 12号遺物集中区出土土器④ | 図版 28 萩氏表採土器③ |
| 図版 14 C 12号遺物集中区出土土器⑤ | 図版 29 萩氏表採土器④ |
| 図版 15 A 地区出土土器① | 図版 30 表採土器 |

I 発掘調査の経緯と経過

1 経緯

浅沢遺跡は富士宮市淀師、市立富丘小学校南側及び、東側に位置する農業・荻精吾氏の宅地並びにその周辺の畠地で東西90~100m、南北60~90mが包蔵範囲と認められる。

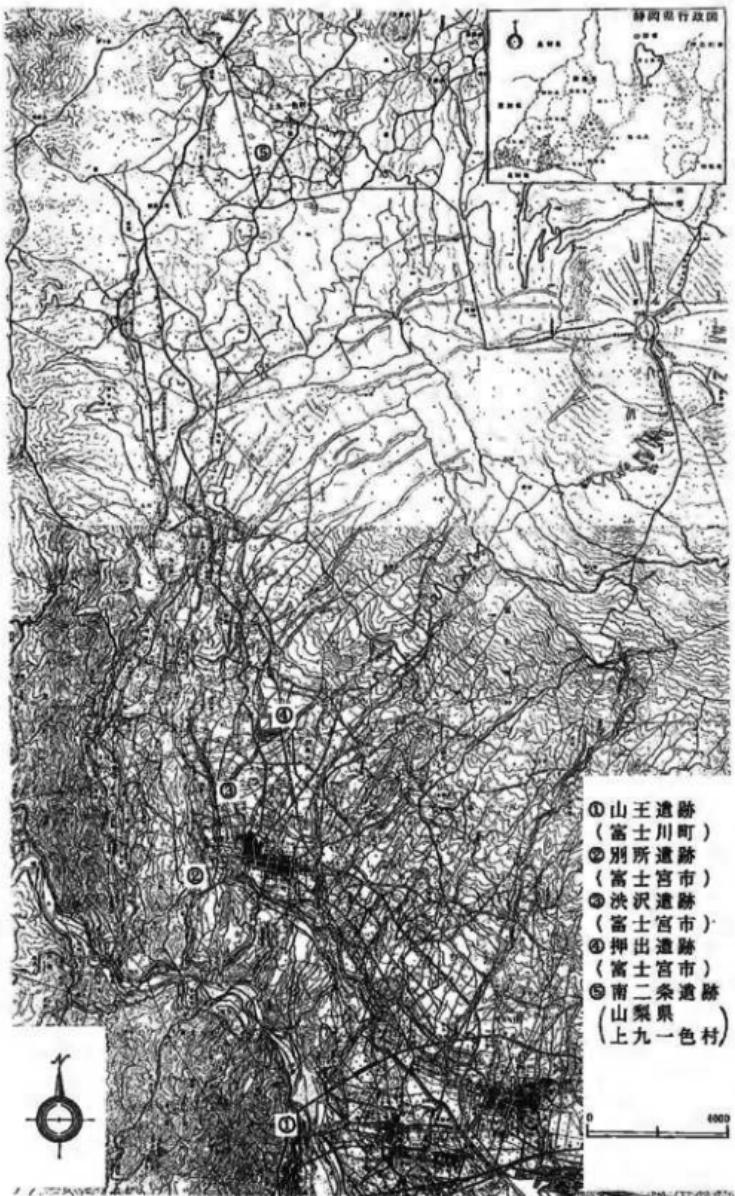
同地においては、戦前より耕作中に多数の遺物を出土し、壺がたくさん並んで出土した状況もみられたが、破壊されたという。戦後も、壺や甕がいくつかかたまって出土し、荻氏によって保存されたという（植松1971）から、地元ではかなりはやくから遺跡として捉えられていたと考えられる。しかし、昭和初期の『静岡県史第1巻』（静岡県1930）や、本地域を対象にした『吉原周辺の原始時代（第2報）』『吉原市史研究資料第2号』（中野1954）、『静岡県東部古代文化総覧』（小野1957）等の文献にその名はなく、文献に最初に現れるのは、『静岡県遺跡地名表』（静岡県教育委員会1961）からで、弥生時代後期（坂田式）の遺跡として把握されている。

それを改めて弥生時代中期初頭の遺跡として紹介したのが『駿豆考古第6号』（小野他1962）の「富士宮市浅沢遺跡出土の弥生土器」一丸子式土器の新資料一であり、丸子式土器に相当する壺形土器6点や甕形土器1点などとともに打製石包丁、環状石斧を含む石器類等が報告されている。その後、『弥生式土器集成編2』（小林・杉原1968）において、前述の壺形土器の6点、甕形土器1点を再実測して掲載している。さらに、『富士宮市史上巻』（植松1971）においてその後の発見となった磨製石包丁や大型の砥石等を加えた紹介がなされ、本遺跡出土の遺物は、いよいよ丸子式期の最優秀資料としての評価を受けるに至ったのである。

さてそうした中、昭和57年度になり富士宮市教育委員会庶務課より市立富丘小学校の運動場拡張計画が提示された。学校敷地南端に沿って通じる県道白糸・富士宮線を南側に移動して運動場を拡張しようというもので、昭和57年度に付け替え道路建設工事、58年度に運動場造成工事を実施するという計画であった。埋蔵文化財の取扱いについては、記録保存の措置を講ずる方向で調整が進み、昭和57年10月より調査を開始し、昭和58年12月までに終了することで合意をみた。ここに浅沢遺跡における初の発掘調査が実施される運びとなった。

第1表 発掘調査経過表

第1次調査 (昭和57年)	試掘調査 本 調 査	10月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
		11月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
		12月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
第2次調査 (昭和58年)	本 調 査	7月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
		11月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
		12月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31



第1図 位置図

2 経過

発掘調査は、第1表の発掘調査経過表に示すとおり、第1次調査から第3次調査までの延べ53日間で実施された。以下各次の調査経過についての詳細を記すことにするが、まず各次における調査区の範囲を簡単に記しておく。

第1次調査区…… 付け替えのため新たに道路敷となる部分及び、現況の道路敷とに抉まれた部分で、調査区中央やや東寄りを南下する道路を境に東側をA地区、西側をD地区と呼称した。対象地の面積はA地区が約150 m²、D地区が約2,200 m²である。

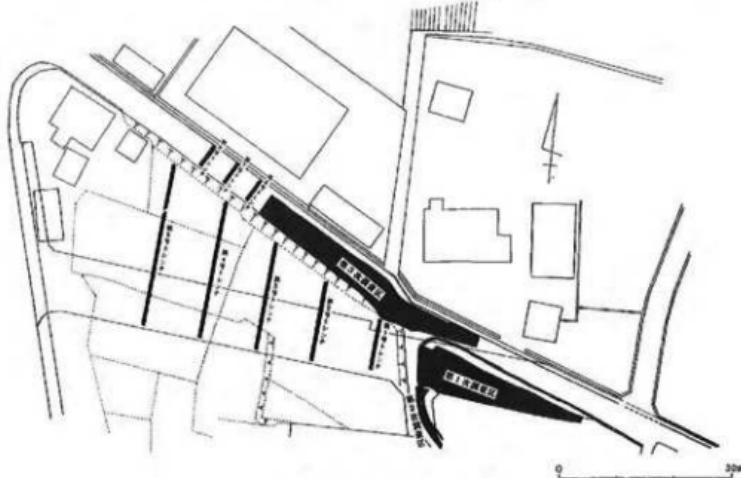
第2次調査区…… 付け替え道路の進入路整備に伴うもので、前述の調査区中央やや東寄りを南下する道路の拡幅部分で、面積は約50m²である。B地区と呼称した。

第3次調査区…… 現況の道路敷部分で、面積は約800 m²である。C地区と呼称した。

① 第1次調査区発掘調査経過

D地区（昭和57年10月21・22日）

本地区はその大部分が畠地であるが、A・B・C地区に比して1 m程、段をなして低くなっている状況であった。荻氏によれば、過去において畠地→水田→畠地という土地利用があり、転地返し（マサヌキ）や、土砂の移動が何度か行われたという指摘を受け、包含層の有無を確認するため、トレーンによる試掘調査を実施した。トレーンは付け替え道路に対し直角方向に1 mで10 m置きに5箇所を設定した。その結果、区域西寄りの第4・5号トレーンにおいて



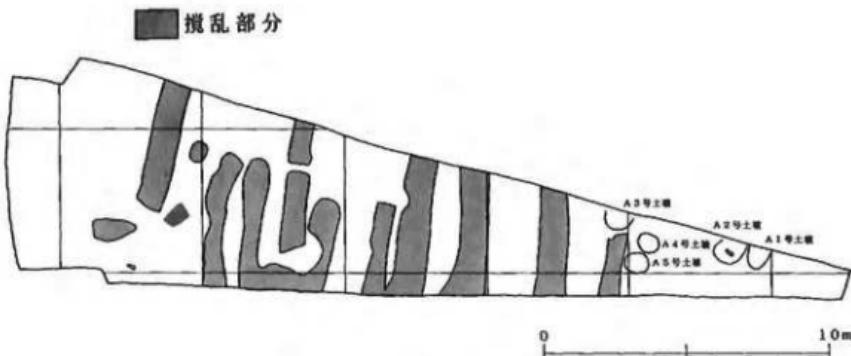
第2図 発掘調査区域図

は、表土層（約30cm）直下に砂礫層がひろがり、以下粘土層が幾重にも堆積し、沖積砂礫層特有の堆積状況を持つもので、包含層は確認されなかった。また、第1～3号トレントにおいても、前述の指摘どおり包含層が消滅若しくは擾乱されており、トレント内での遺物の検出は皆無に等しい状況であった。

A地区（昭和57年11月8日～12月15日）

本地区も畠地であるが、付け替え道路の起点にあたる部分で二等辺三角形状の区画が調査区となった。初めに調査区南辺を基軸として5mのグリッドを設定して（第8図）調査を進めることとし、その呼称は南から北へ A・B・C のアルファベット、東から西へ 1・2・3 の数字列とした。したがって、具体的には A-1・A-2 グリッドと呼称し、それは B・C 地区にも踏襲することとした。

調査は表土・耕作土（第I層）の除去作業より開始し、地表面より1m程の深さにまで及ぶことが確認された。さらに、第II～V層中においては、ほぼ1m置きに地表面よりの擾乱が確認された（第3図）。これは、篤農家である荻氏が生姜の貯蔵穴として掘られたもので地表面より2mにも及ぶものであった。結果的に遺物包含層は第III・IV層、遺構確認面は第V層であったことから調査区の約1/3は擾乱をうけていることが判明した。したがって、発見された遺構と遺物は擾乱を免れた部分からのもので、遺構としては A-1・2・3 グリッドより土壤 5 基を検出した。遺物としては土器、石器などの破片資料に混じって、大型の打製石斧（石鋤）2点を検出した。



第3図 A地区全体図

② 第2次調査区発掘調査経過

B地区（昭和58年7月18日～22日）

本地区はA地区とD地区的間を南下する道路を付け替え道路の進入路として拡幅するのに伴うもので、Z-6・7、Y-6グリッド内に位置する。A地区と同様地表面より1m程の表土下より第Ⅱ層以下本遺跡の基本層序が確認された。

調査はまず、区域南半のY-6グリッド内の第Ⅱ層上面より掘り込まれた、近代（明治～昭和）の溝を確認した。地元古考等によれば、本地区北側を流れる風祭川の水を、当所より南東方向の淀師地区に運んでいた用水路跡で、上新堀（うわしんばり）と呼ばれていたものであるという。弥生時代の遺構として土壤1基を確認した。遺物としてはB6号土壤上部出土の磨石以外は破片資料であったが、調査終了後に区域外において、水道管移設工事に際し、頸部以上を欠く壺形土器1個体を採集した。発見時の状況は曖昧であるが土器棺墓と捉えるのが妥当であろう。

③ 第3次調査区発掘調査経過

C地区（昭和58年11月15日～12月16日）

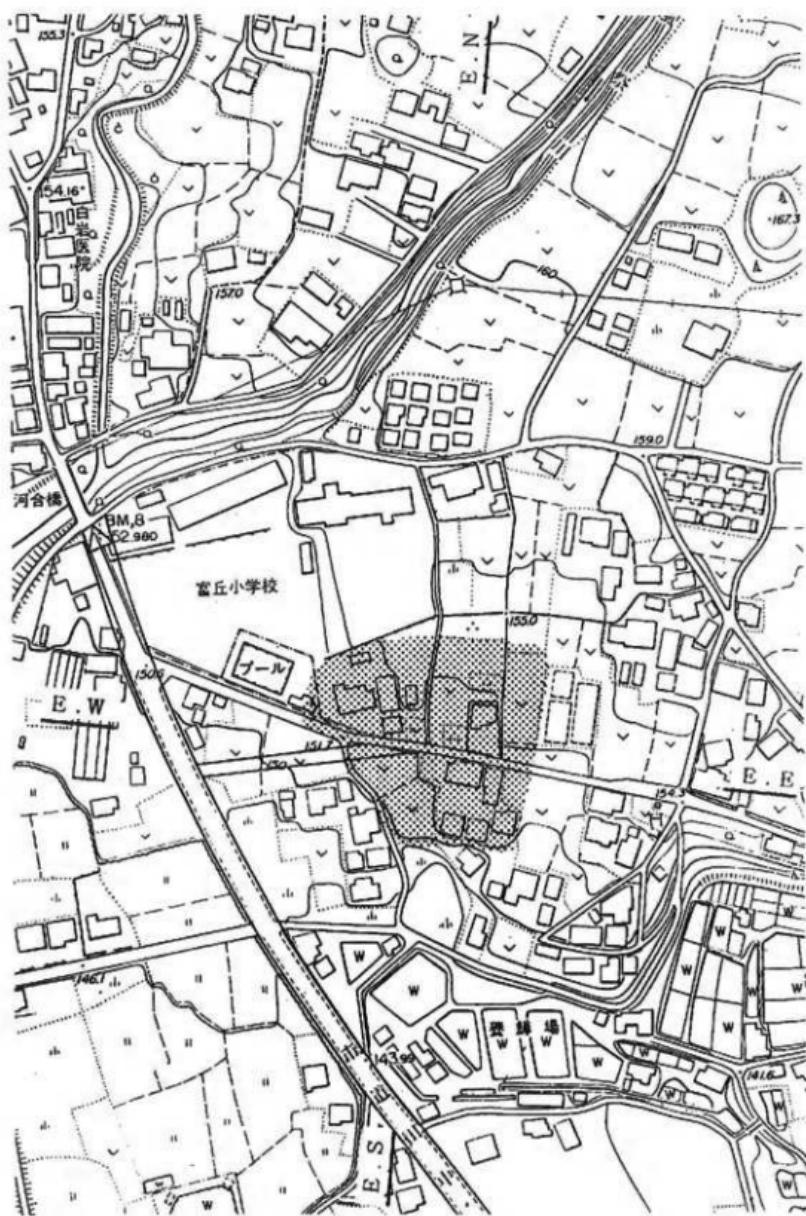
本地区は県道白糸・富士宮線が付け替えられた後の道路敷部分にあたり、東西約90mの範囲に及ぶ。その西側部分では、D地区での経験からトレーナによる試掘調査を実施した。その結果、調査区東端より50m程でD地区同様の沖積砂礫層を確認した。したがって、調査はB-5グリッドからF-13グリッドの範囲で実施された。

本地区においても最初に確認されたのは上新堀跡であった。C-8グリッド中央では南北方向に巾、深さとも約1mを測った。弥生時代の遺構としては、土壤5基と遺物集中区1箇所が確認された。このうち、C7号とC8号は土器棺墓と認められた。また、B-5・6、C-5・6グリッドで検出されたC12号遺物集中区については遺物が確認された他、掘り込み等は確認できなかった。遺物としては、C7号土器棺墓から壺形土器と甕形土器のセット、C8号土器棺墓の甕形土器やC12号遺物集中区からは、数個体の土器が出土した。

3 荻氏表採資料について

富士宮市教育委員会では、本調査終了後、荻精吾氏と協議の結果、氏のご厚意により耕作中に表採された土器・石器類全資料を預かり保管することになった。土器は整理用コンテナ5箱分、石器は220点余りであった。いずれも発掘調査による出土数に匹敵するものである。これらのうちには、『駿豆考古第6号』（小野他1982）や、『弥生式土器集成本編2』（小林・杉原1968）あるいは、『富士宮市史上巻』（植松1971）等に掲載された資料も含まれているが、それ以外は未発表資料であることから、土器の一部分については付録で、石器については本編において扱うこととした。

（渡井）



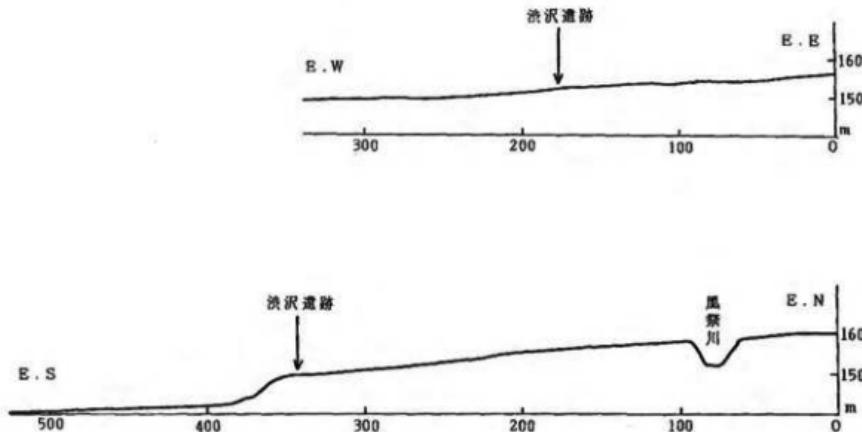
第4図 周辺地形図

II 環 境

1 遺跡の位置と環境

浜沢遺跡は、富士宮市淀師字浜沢501-1番地外に所在する。JR身延線富士宮駅より、北北西へ直線距離にして約3kmの地点である。遺跡のすぐ前方には、豊富な湧水を利用した養鯉場や、水田がひろがるが、のどかな田園地帯であったこの辺りにも近年、急激な市街化の波が押し寄せている。

本遺跡を地形的にみると、山梨県境の富士宮市根原より天守山地、羽鶴丘陵に対峙する北高南低の富士山西麓緩斜面（富士裾野）の末端部にあり、すぐ南の低段地とは約5mの比高をもつ、所謂舌状台地の先端部分である。基盤的に古富士集塊質泥流の上にのる大宮熔岩、万野風穴熔岩等の新富士火山噴出物層の末端部にあたる。このことは、不透水層である古富士泥流上を流れる地下水脈（農玉川）が露出する結果となり、豊富な湧水の因となっている。また、遺跡の西側約200mの地点で潤井川と風祭川が合流しており、富士山の放射谷である風祭川がつくり出す扇状地と潤井川沖積地の接点となっている。潤井川沖積地は1~1.5kmのひろがりをもち、真南に流路をとり、大中里付近で東に転じ大宮断層崖下に通じ、富士裾野の末端部を区割する。この辺りから潤井川の右岸側には黒田・星山地区の、左岸側には富士根地区的富士宮市内有数の埋蔵文化財包蔵地が密集する地域となっている。



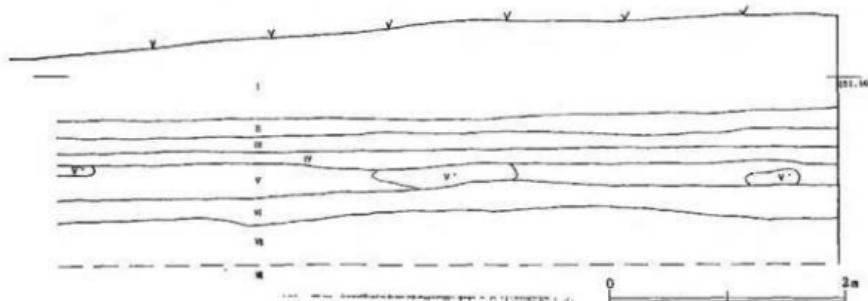
第5図 地形断面図

2 土層

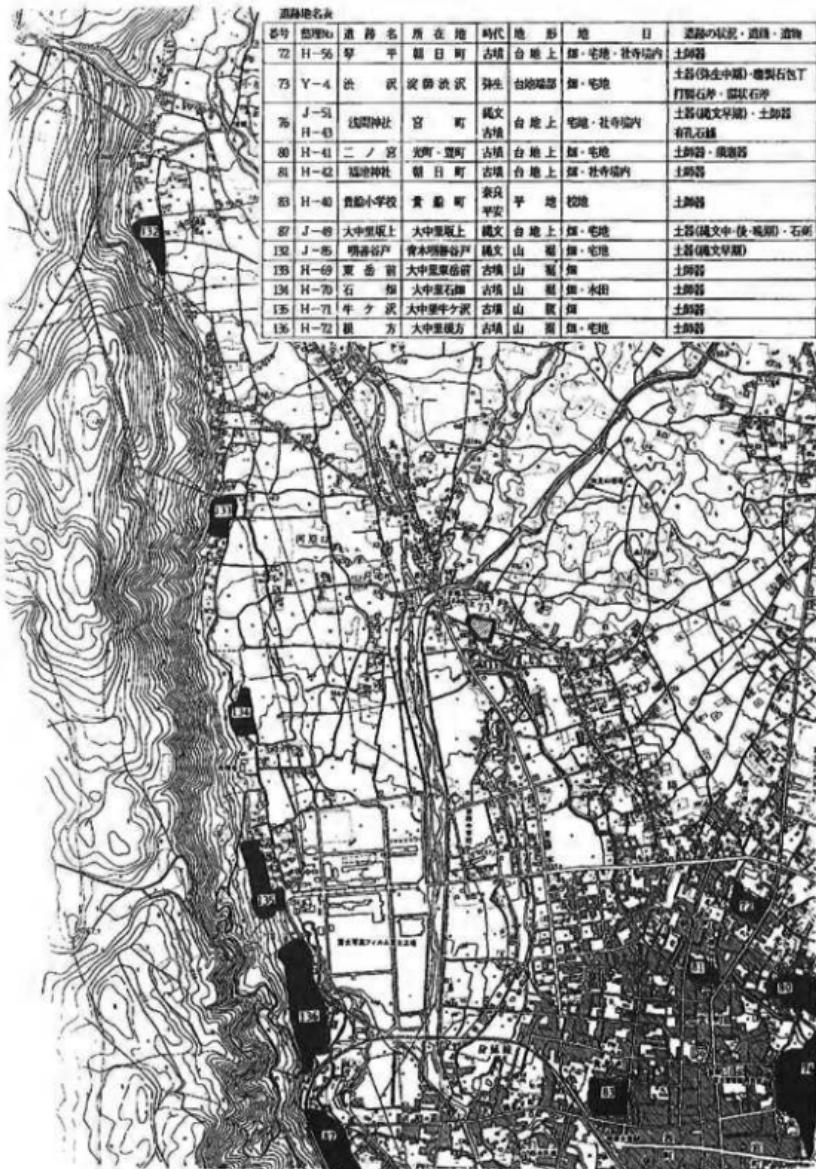
本遺跡の発掘調査対象地内における、基本的な土層堆積の様相はつぎのとおりである。

- I 黒色土層…… 黒色有機質土からなる表土層で耕作土である。
- II 黒褐色土層…… 黒色を呈するスコリア質土層で、III・IV層が流失してI層と混じたものとみなしえる。軟質で細かなスコリア粒子を若干含む。
- III 褐色土層…… 本遺跡における遺物包含層である。スコリア粒子含有の密、粗でIV層とは、あえて細分したが、明確な相違は看取され得なかった。若干しまって、細かなスコリア粒子を多量に含む。
- IV 暗褐色土層…… III層とともに遺物包含層である。III層に比べ若干スコリア粒子の含有が少ない。本層以上での遺構検出は極めて困難であった。細かなスコリア粒子をかなり多く含む。
- V 暗茶褐色土層…… 比較的よくしまり、大粒のスコリア粒子をかなり多く含む。本層の上面が遺構検出面となった。
- V' 暗黄褐色土層…… 粘性が強く黄褐色土を混入する。風倒木痕の様相を呈し、V層内において、対象地内各所でみられた。
- VI 茶褐色土層…… 大、小、不規則のスコリア粒子を多量に含む。地元でアリマサ、あるいはアリンドマサとよばれているもので、サラサラでしまりがない。遺構の中で本層にまで及ぶものもあった。
- VII 青灰色土層…… 砂質で若干の粘性をおびる。
- VIII 暗黄褐色砂疊層…… 火山性砂疊層である。

以上が本遺跡における基本的層序であるが、本地域（富士山西南麓）に普遍的な、表土層→大沢ラビリ層→黒褐色土層→栗色土層→富士黒土層→黄色ローム層という層序は全くみられず富士山裾野の末端部の潤井川と風祭川の合流する扇状沖積地の様相を強く示す。第6図はC地区東端南壁の土層堆積状況である。



第6図 土層図(C地区)



第7図 周辺の遺跡

3 周辺の遺跡

①近接の遺跡 (第7図)

富士宮市の遺跡分布を大観すると、潤井川中流域と沢川流域に遺跡は集中している。前者は、主として星山丘陵上に位置し、後者は富士山麓末端部の涌水地点に一致している。沢川遺跡は、潤井川中流域の上端にあたり、南から東に向かってひろがる潤井川沖積地をのぞむ位置にある。この沖積地は右岸を羽駒丘陵、星山丘陵に、左岸を富士山麓状地末端地形によってせりだされている。このため細長い構造をとらざるを得ず、一種の割れ谷的性格を形成し、現在にいたるまで何度も洪水が繰り返えされている。こうした要因からか沖積地内部の低湿地においては未だ遺跡が確認されず、その周囲の微高地にかぎられている。このことは本遺跡に近接する地域内にも言えて、琴平、浅間大社、二ノ宮、福地神社、貴船小学校の各遺跡、羽駒丘陵裾部に大中里坂上、明善谷戸、東岳前、石畑、牛ヶ沢、根方の各遺跡が存在する(富士宮市教育委員会1979、補足1986)。※各遺跡の詳細は第7図内遺跡地名表参照

②近似の遺跡 (第1図)

沢川遺跡周辺において、条痕文系土器が確認される遺跡としては、富士川町山王遺跡、富士宮市別所遺跡、押出遺跡、山梨県上九一色村南二条遺跡がある。以下に概要を示す。

山王遺跡 (富士川町岩淵字南吉野)

沢川遺跡の南方約9kmに位置し、現東名高速道路富士川サービスエリアにあたる。平野部をのぞむ低丘陵の先端に立地する。縄文早・前・晚、弥生後期、古墳時代等の遺構、遺物が検出されている。縄文晩期末の土器群は水I式系が主体であるが、条痕文系土器(水神平式)もかなりの量出土する他、遠賀川式土器の壺と壺の破片が各1片ずつ出土する。石器の出土は、打製石斧、石錐、石匙、磨製石斧、石棒、石剣、石錘等である。(樋垣他1975)

別所遺跡 (富士宮市安居山字別所)

沢川遺跡の南方約2km、潤井川右岸の羽駒丘陵裾部の標高約180m程の低丘陵上に立地する。二十片余りの土器が採集されており、このうちの十数片が条痕文系土器である。他に水I式系土器2点が含まれる。(付録2参照)

押出遺跡 (富士宮市外神字押出)

昭和63年に発見された遺跡で、沢川遺跡の北方約3km、風祭川右岸の国指定天然記念物、万野風穴の入り口周辺である。標高245~250m程の富士山麓緩斜面に位置する。数十片の土器片が採集されており、その殆どが条痕文系土器である。(付録3参照)

南二条遺跡 (山梨県上九一色村富士ヶ嶺南二条)

沢川遺跡の北方約18kmの標高960mの尾根の緩斜面に位置し、遺跡の南方には谷が東西に走る。弥生時代後半の壺型土器が畑の耕作中に出土したとされるとともに、同尾根からは弥生時代中期初頭の条痕文土器の散布が認められている(中山1985)。

(渡井)

III 遺構

1 A地区

本地区からは、土壙5基が調査区東端に集中して検出された。中央部にひろがる耕作の擾乱により影響が考えられる。

A 1号土壙 (第9図 図版2)

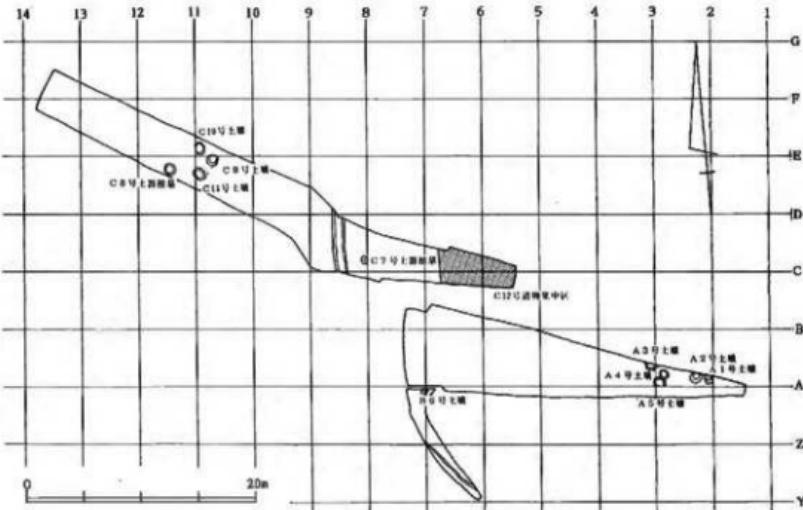
A-1、A-2グリッドにまたがり検出された。北半部は道路下に入り、調査不可能であった。長軸約1mの長楕円形の土壙と思われる。底面は起伏をもち、断面は袋状を呈する。基本層序の第V層上面より掘り込まれ、第VI層にまで及ぶ。境内遺物として土器破片25点と石器(石錐1、礫削片4)5点が出土した。

A 2号土壙 (第9図、図版2・3)

A-2グリッドで検出された。北側の一部が道路下に入り、調査不可能であった。不整楕円形で、底面はほぼ平坦で、断面は袋状を呈する。基本層序の第V層上面より掘り込まれ、第VI層にまで及ぶ。境内遺物として土器破片22点、石器(礫削片)9点の他、直上の第IV層中より大型の打製石斧(石錐)が出土したが、本土壙との共伴関係はつかめなかった。

A 3号土壙 (第9図、図版2)

A-2、A-3グリッドにまたがり検出された。北半部は道路下に入り、調査不可能であった。直径約75cmの円形の土壙と思われる。底面はほぼ平坦で、断面は袋状を呈する。基本層序



第8図 調査区全体図

第2表 遺構計測表

遺構名	出土地点 (グリッド)	形状	兵機方位	規格(cm)		出土遺物(点)			特徴・備考
				兵機長	兵機員	深さ	上石器	下石器	
A 1号土壙	A-1~A-2	真円形?	N-34°10' - E	{5.9}	6.2	3.3	2.5	5	偏状を呈す。北半部は區域外
A 2号土壙	A-2	平底円形?	N-27°19' - W	9.1	7.2	4.3	2.2	9	偏状を呈す。北一部は區域外
A 3号土壙	A-2~A-3	円形?	—	—	7.5	(?)	3.6	1.7	4
A 4号土壙	A-2	円形	N-16°50' - W	7.0	6.5	1.3	1.8	—	—
A 5号土壙	A-2~A-3	複円形	N-30°00' - W	8.2	6.5	2.8	1.6	2	偏状を呈す
B 6号土壙	Z-7	円形	N-65°00' - W	7.0	(6.0)	2.6	—	3	—
C 7号土器棺墓	C-B	円形	N-40°00' - E	4.5	3.9	2.6	—	4	東(上) - 西(下)の組合せ
C 8号土器棺墓	D-11	円形	N-30°20' - E	4.2	4.0	2.5	1	—	東單孔
C 9号土壙	D-10~E-10	円形	N-76°60' - W	1.18	1.09	4.1	9	—	偏状を呈す
C 10号土壙	E-11	長椭円形	N-10°50' - E	1.00	5.9	2.1	7	1	偏状を呈す
C 11号土壙	D-10~11	兵機円形	N-54°50' - W	1.04	5.8	5.7	4	—	偏状を呈す
C 12号遺物集中区	B-5-6, C-5-6	—	—	—	—	—	8.2	2.7	—

の第V層上面より掘り込まれ、第VI層にまで及ぶ。境内遺物として土器破片17点、石器(礫片)4点が出土した。

A 4号土壙 (第9図、図版2)

A-2グリッドで検出された。直径約70cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁面はなだらかな立ち上がりをもち、基本層序の第V層上面で確認された。境内遺物として土器破片18点が出土した。

A 5号土壙 (第9図、図版2・3)

A-2、A-3グリッドにまたがり検出された。梢円形で、底面はやや起伏をもち、断面は袋状を呈する。基本層序の第V層上面より掘り込まれている。境内遺物として土器破片16点、石器(石斧1、礫片1)2点が出土した。

2 B地区

本地区からは、土壙1基が検出された。

B 6号土壙 (第9図、図版3)

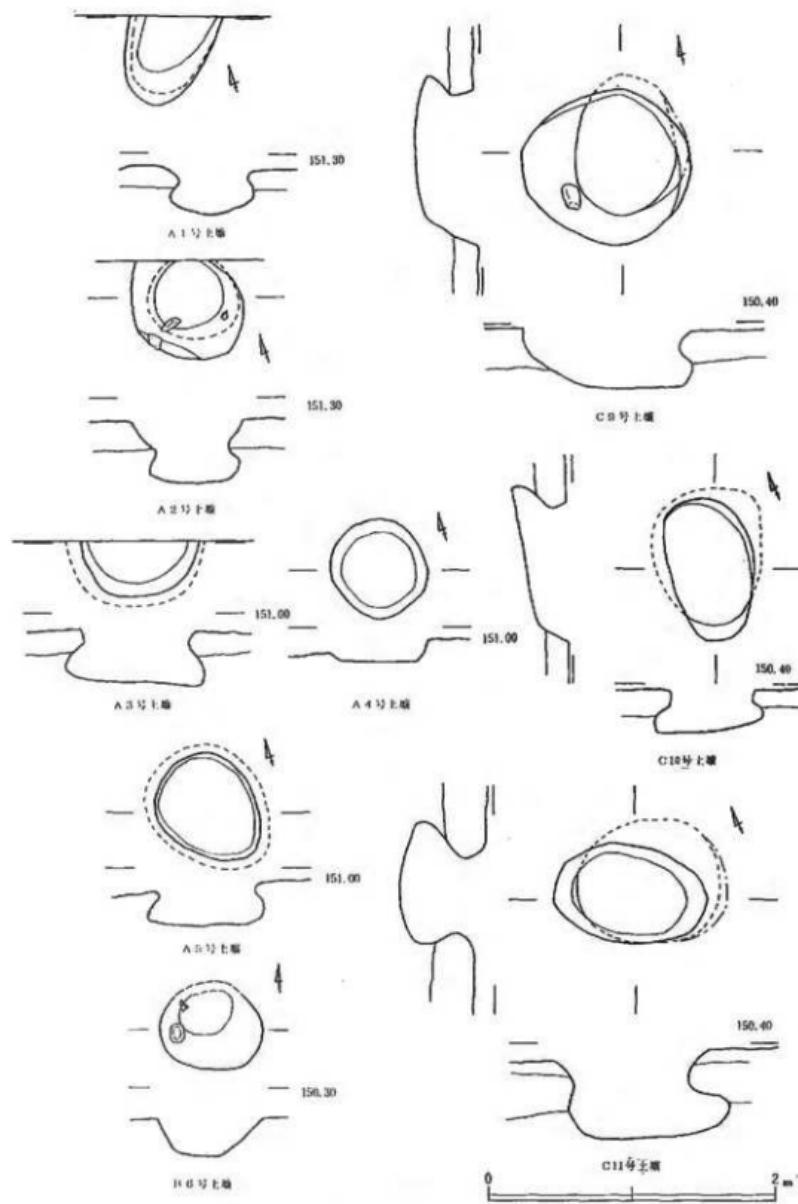
Z-7グリッドで検出された、北側の一部を搔亂により欠くもので、直径約70cmの円形土壙と思われる。底面はほぼ平坦で、壁面はなだらかに立ち上がる。基本層序第V層上面より掘り込まれている。境内遺物として、第V層直上で磨石、覆土内より石器(礫片)2点が出土した。

3 C地区

本地区からは、土器棺墓2基、土壙3基、遺物集中区1箇所が検出された。

C 7号土器棺墓 (第10・13図、図版4・6)

C-8グリッドで検出された。上半部を欠損した壺形土器の(第13図-1)を身とし、兜形



第9図 造構実測図

土器（第13図-2）を破碎して蓋としている。

1は球形の胴部を呈する壺形土器の下半部で、底径6.3cm、残存高20.3cm、残存部における胴部最大径28.1cmを計る。内面の器肌の荒れが目立つが、外面は上位を横位の条痕で整形し、下位～底部をヨコナデによって整形している。色調は黄橙色～橙色を呈し、胎土には石英、長石の混入が顯著で、少量の金雲母の混入がみられる。

2は小さめの平底の底部から内縁気味に広がり、屈曲の弱い頸部を形成しながら大きな口縁を作る器形を呈する。外面は横位と斜位の条痕によって整形され、内面はヨコ方向を主体としたナデによって整形されている。また口唇部には貝殻腹縁による押圧文（押引文）が施され、底部には木葉痕が施されている。外面の胴部より上部にはススの付着が全体に亘ってみられ、元々煮沸に使われていたものが二次的に棺として転用されたものであることが察取できる。色調は外面が赤褐色～黄橙色（黒褐色）、内面が赤褐色～黒褐色を呈し、胎土は若干粗めで長石の混入が目立つもので、少量の金雲母を包含し、焼成は普通である。法量は、口径36.0cm、器高36.6cm、底径7.3cmを計る。他に石器（礫片を含む）4点を出土した。

C8号土器棺墓（第10・14図、図版4・6）

D-11グリッドで、口縁部を下にし、拳大の石と共に検出された。土器は壺形土器で下半部を人為的に欠損させたもので、口径30.2cm、胴部最大径30.2cm、残存高19.6cmを計る。外面は口縁部、頸部に部分的に乱れの見られる縱位羽状文を施し、その後に、胴部に横位の条痕を施している。また内面は、上位をヨコ、下位を不定方向のナデによって整形している。内外面ともススの付着がみられ、煮沸機能から転用して使用されたものである。口唇部は指頭によるヨコナデし尖らせる。ヨコナデは全周せず意識的に肥厚する箇所を等間隔に残すもので、本資料においては15、その箇所がみられる。色調は黄橙色～暗褐色、胎土は長石、金雲母の混入が目立ち、きめが細かく、焼成良好である。他に石器（礫片）2点を出土した。

C9号土壙（第9図、図版5）

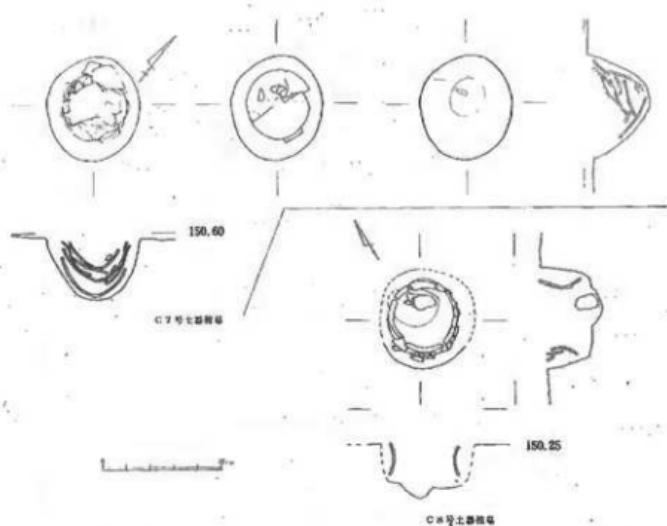
D-10、E-10グリッドで検出された。直径110～120cmの円形で、底部はほぼ平坦で、壁面は南側で、なだらかに立ち上がり、北側は内壁して袋状となる。基本層序第V層上面より掘り込まれ、第VI層にまで及ぶ。壙内遺物として土器破片9点を出土した。

C10号土壙（第9図、図版5）

E-11グリッドで検出された。長椭円形で、底面は西側に傾斜しており、断面は袋状を呈する。基本層序の第V層上面より掘り込まれ、第VI層にまで及ぶ。壙内遺物として、土器破片7点、石器（礫片）1点を出土した。

C11号土壙（第9図、図版5）

D-10、11グリッドで検出された。長椭円形で、底面はほぼ平坦で、壁面は東側でつよく、西側で緩やかな袋状を呈する。第IV層中より掘り込まれ、第VI層にまで及ぶ。壙内遺物として土器破片4点を出土した。



第10図 土器棺墓実測図

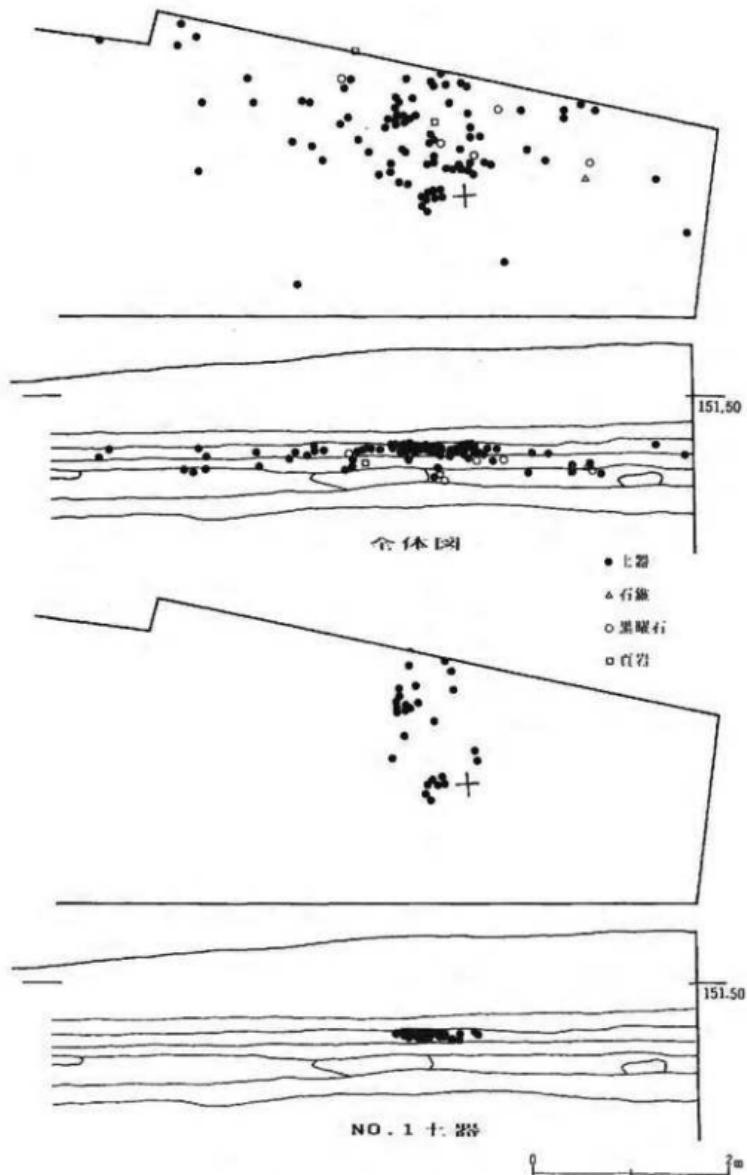
C12号遺物集中区 (第11・12・22~24図、図版10~14)

B-5・6、C-5・6グリッドで検出された。第11・12図に示すとおり、基本層序第Ⅲ・Ⅳ層中において遺物が集中的に出土した。土器は82点、石器（礫剥片を含む）27点を数える。比較的にまとまった資料として3個体がある。No 1の土器（第22図）は、変形土器の口縁部～底部にかけての1/4程になる。推定口径34.7cm、推定器高36.3cm、底径7.7cmを計る。外面は横位の条痕の後、頸部に縱位の条痕を施す。色調は外面が赤褐色、内面が褐色、胎土は石英、長石の混入が目立ち、焼成は普通である。No 2の土器（第23図）は、変形土器の腹部である。外面は横位の条痕の後、縱位羽状文を粗く施す。色調は外面がにぶい黄褐色、内面は褐色、胎土は石英、長石の混入が目立ち、焼成は普通である。No 3の土器（第24図）は、壺形土器の肩部である。外面には磨消繩文（L R）を作り変形工字文がみられ、文様帶以外は横位の条痕を施す。色調は外面が明褐色、内面が褐色、胎土は石英の混入が顕著で、少量の金雲母を包含し、焼成はやや悪い。

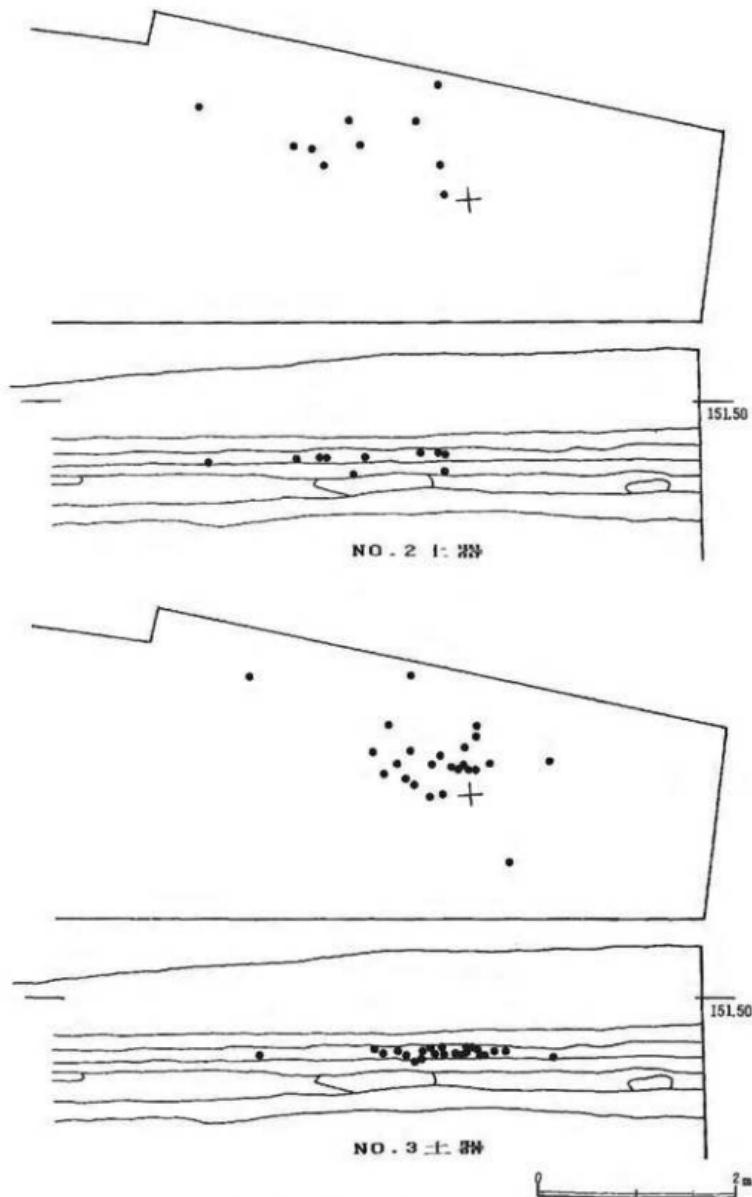
(渡井)

4 B地区調査区域外

Z-7グリッド調査区域外出土土器 (第15図、図版6)

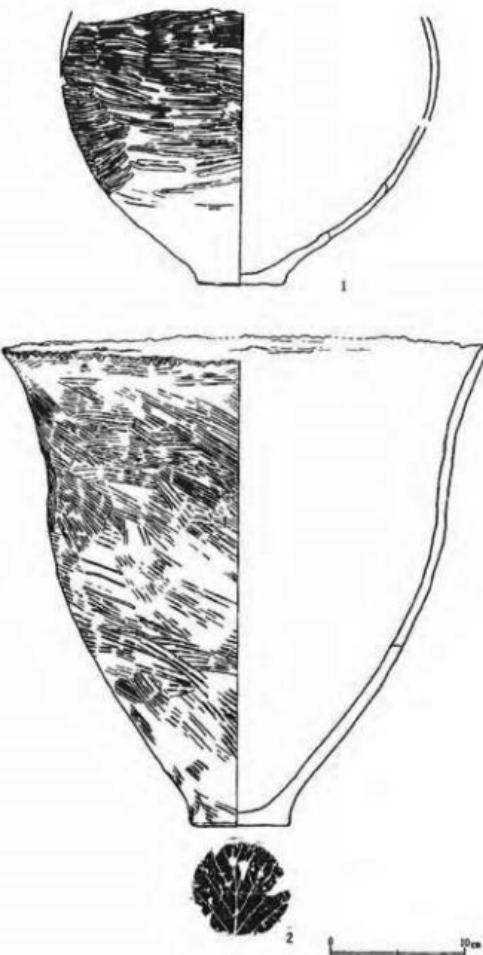


第11図 C12号遺物集中区遺物出土状況図①



第12図 C12号遺物集中区遺物出土状況図(2)

本資料は、底径 6.8cm
残存高 28.6cm、胴部最大
径 27.6cmで、頸部以
上を欠いている。長胴形
の壺形土器で器高の割に
胴径の小さな形態を示す
ものである。文様帶は胴
部下位まで及んでおり、
縦線文とそれを区画する
横線文の組合せで構成
されている。文様帶以外
は、横位→斜位の条痕に
より調整されている。底
部は表面の摩耗が著しく
調整方法は不明であるが
安定の悪い小さな平底を
呈する。内面は全体的に
ヨコナデにより仕上げら
れ、上部を中心に巻き上
げ痕を残す。頸部以上は
人為的に破壊され、転用
された様相を示している。
色調は外面が黄橙色、内
面が灰オリーブ色を呈し、
胎土はきめが細かく、石
英の混入が目立ち、焼成
はややあまい。



第13図 C-7号土器棺墓出土土器

5 富士宮市史掲載資料について (第16. 17図、図版7)

この富士宮市史(植松1971)掲載資料は、荻原吉氏により耕作中に出土したもので、駿豆考古第6号(小野他1962)において発表された後、水田耕作に絡む歴史的位置づけが考察され、弥生時代中期前葉の標識的な資料として捉えられる端緒となったものである。

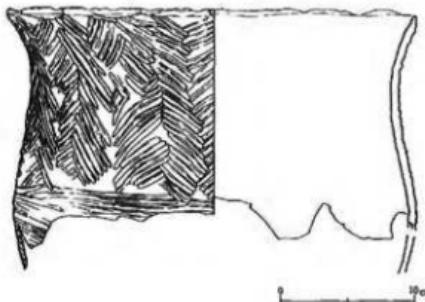
今回、発掘調査で検出された資料は、器形を知り得るものが少なく、全体の器種構成を考え

る上で、再度この発表資料を掲載することにした。各個々の詳細や観察データは過去の文献を参照することにし、簡単に紹介すると以下のようになる。なお、文章中で器種分類、口縁形態にふれているのでⅣ章Ⅰを参照されたい。

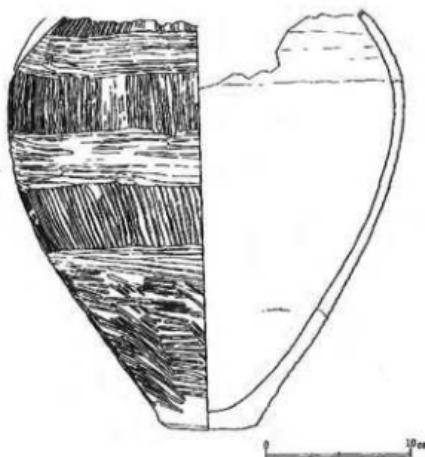
1は壺A₁で意図的に頸部以上を破壊している。2、3は壺A₂で、2も意図的に頸部～胴部にかけてを破壊している。3は、頸部以上及び胴部の1/3あまりを欠損している。5は壺Bで、頸部～胴部を意図的に破壊しているもので、頸部から胴部にかけての粗い横位の条痕が施され、簡略化した形態を示すものである。表面の摩耗が著しく残存状況は悪い。4は壺C₁で長胴気味の胴部を呈する。これも意図的に頸部以上を破壊しているようであり、また胴部の2/5あまりを欠損している。6は壺Dで繩文系の壺形土器である。底部及び胴部の2/3あまり、口縁部を欠損している。文様はL Rの磨消繩文を沈線区画しているものである。8は壺D₁、富士宮市史掲載資料の中で唯一全体の器形が看取できるものである。口縁の形態は壺口縁I～2を示す。7は壺D₂で、1/5程度の破片資料である。口縁の形態は壺口縁I～2を示す。

富士宮市史掲載資料は器形に多くのバラエティーが認められ、また壺形土器は全て頸部（胴部）以上の意図的な破壊が看取されるもので、何らかの機能の転用がおこなわれた様相を示している。

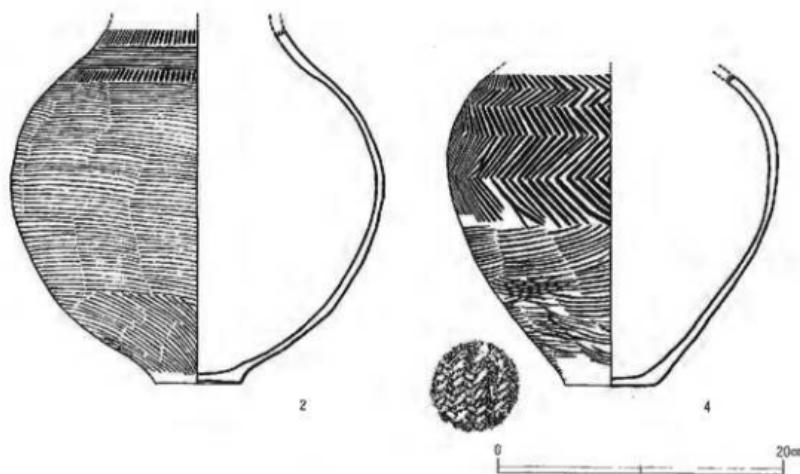
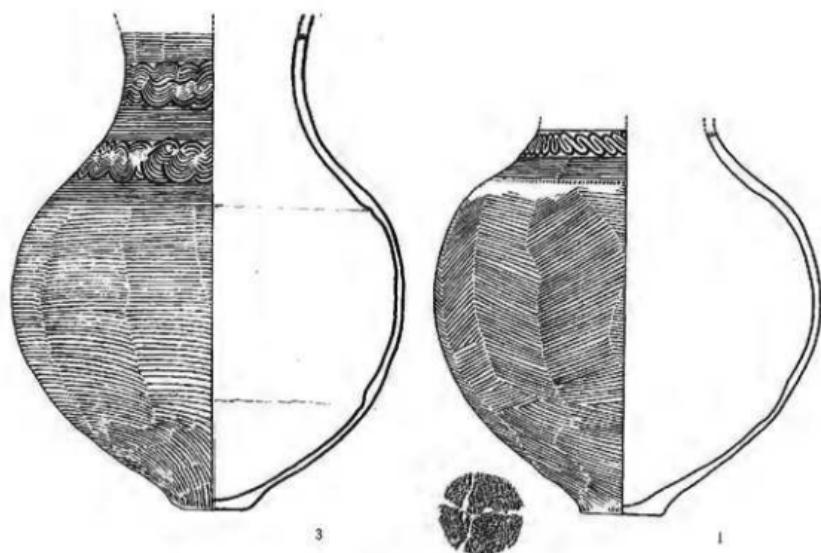
(山上)



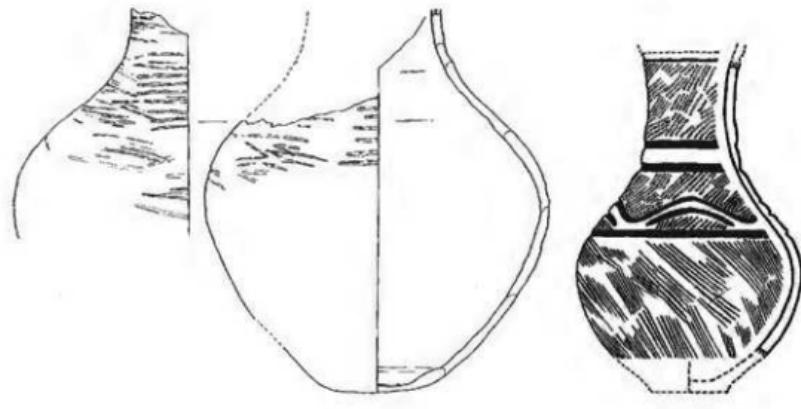
第14図 C-8号土器棺墓出土土器



第15図 Z-7グリット調査区域外出土土器

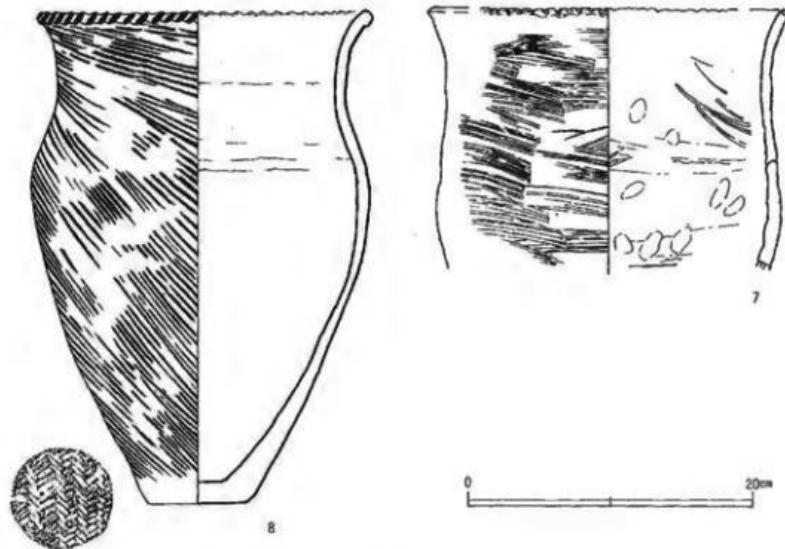


第16図 富士宮市史掲載資料①



5

6



8

0 20cm

第17図 富士宮市史掲載資料②

IV 遺 物

1 土 器

① 分類の方法

浜沢遺跡出土の土器は、総数1630点を数え、遠賀川式系土器、条痕文土器、繩文土器が認められる。ほとんどが破片資料のため第13~15図の資料以外は、口縁の形態と頸部~胴部の文様の関係、全体の器形など把握できない。

第Ⅰ群 遠賀川系土器（第21図-1・第26図-1、図版8・15）

同一個体と思われる壺の頸部破片が2点出土している。縦位のハケメを施した後横位のヘラ書き沈線文を施すもので、胎土にかんらん石の混入が目立ち特異な様子を示している。

第Ⅱ群 条痕文土器1

本遺跡の出土資料の中では最も数量が多く全体の約98%を占める。それぞれの資料を各部位によって、口縁部形態、頸部文様、胴部文様でそれぞれ分類を行う。壺の口縁部は、押圧文を施した凸帯をもつ壺口縁Ⅰ、凸帯をもたない壺口縁Ⅱに分けられる。

壺口縁Ⅰ a 口唇部外面に凸帯を付し、棒状工具による押圧文を施す。口唇は丸みを帯びる。これは、更に凸帯の形態で口縁Ⅰ a-1と口縁Ⅰ a-2に細分される。

壺口縁Ⅰ a-1 凸帯の断面が三角形を呈する。

壺口縁Ⅰ a-2 凸帯の断面が丸みを帯びる。

壺口縁Ⅰ b 口唇部外面下位に凸帯を付し、凸帯上に押圧文を施す。これは、更に凸帯などの形態で、口縁Ⅰ b-1 口縁Ⅰ b-2 に細分される。

壺口縁Ⅰ b-1 凸帯上に棒状（板状）工具による押圧文を施す。凸帯の断面の形によって更に細分が可能であるが明確な差がない。

壺口縁Ⅰ b-2 凸帯上に指頭による押圧文を施す。口唇部は指頭によるヨコナデを尖る。

壺口縁Ⅰ c 口唇部外面下位に凸帯を付し、凸帯上と口唇部に押圧文を施す。これは、押圧文の施し方によって口縁Ⅰ c-1と口縁Ⅰ c-2に細分される。

壺口縁Ⅰ c-1 凸帯上と口唇部に棒状（板状）工具による押圧を施す。また、これは口唇部を面取りし平坦面を作るものと丸く仕上げるものに細分される。

壺口縁Ⅰ c-2 形態としてはⅠ a-2に類似し、口唇部外面に凸帯を付し、凸帯上に棒状（板状）工具による押圧文を施し、面取りした口唇上に押圧文を施す。

壺口縁Ⅱ a 単純口縁で口唇部を面取りする。

壺口縁Ⅱ b 単純口縁で口唇部を肥厚させ、巾広の平坦面を作り押引の烈点文を施す。

壺口縁Ⅱ c 単純口縁で口唇部を肥厚させ、巾広の平坦面を作り横位の条痕を施す。

壺口縁Ⅱ c-1 面取りした口唇部に横位の条痕を施す。

壺口縁Ⅱ c-2 面取りした口唇部に横位の条痕を施し、部分的に口唇部を指頭でつまみ上げる。

壺口縁Ⅱ c-3 面取りした口唇部に横位の条痕を施し、口唇部外面に棒状（板状）工具

による押圧文を施す。

壺口縁Ⅱ d 口唇部に横位の条痕が施されない単純口縁で口唇部外面に棒状（板状）工具による押圧文を施す。押圧文の施す方法によってさらに口縁Ⅱ d-1、口縁Ⅱ d-2 に細分される。

壺口縁Ⅱ d-1 面取りした口唇部に押圧文を施す。

壺口縁Ⅱ d-2 口唇部外面に押圧文を施す。

甕は、頸部の外反するものをそれとして扱う。口縁部の形態は口唇部に押圧文を施す甕口縁Ⅰ と施さない甕口縁Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ に大きく分けられる。

甕口縁Ⅰ 口縁部外面に押圧文を施すもの。押圧文の施文具によって甕口縁Ⅰ-1、甕口縁Ⅰ-2、甕口縁Ⅰ-3 に細分される。

甕口縁Ⅰ-1 口唇部に指頭による押圧文を施す。

甕口縁Ⅰ-2 口唇部、口唇部外面に棒状（板状）工具による押圧文を施す。面取りした口唇部に押圧文を施すものを甕口縁Ⅰ-2 a、口唇部外面に押圧文を施すものを甕口縁Ⅰ-2 b とする。

甕口縁Ⅰ-3 口唇部、口唇部外面に貝殻腹縁による押圧文を施す（押引文）。甕口縁Ⅰ-2 と同様に、甕口縁Ⅰ-3 a、甕口縁Ⅰ-3 b に細分される。

甕口縁Ⅱ 口唇部を平縁に仕上げ、平坦面を作る。

甕口縁Ⅲ ヘラ状工具による口唇部の削ぎ取りや指頭による口唇部のヨコナデで尖った口縁を作る。削ぎ取り、ヨコナデは全周せず意識的に肥厚する箇所を等間隔に残す。

甕口縁Ⅳ 口縁部に小突起を施し、小さな波状口縁を呈する甕形土器頸部が緩やかに外反するもので、口唇部に平坦面を作る。

第Ⅲ群 条痕文土器 2 (第27図-60・62・第30図173、図版17・21)

第Ⅱ群に含まれない条痕文土器をここで一括する。

I、口縁部に小突起を施し、小さな波状口縁を呈する鉢形土器。内傾すると思われる口縁で外面にタテ方向の条痕を施す。

II 面取りした口唇部に棒状（板状）工具による押圧文を施し、口唇部内面に深い沈線を1条施すもの。

第Ⅳ群 氷I式系土器 (第27図-59、図版17)

平縁の口縁で口縁部外面に3条の沈線を施す鉢形土器の破片が1点出土している。

第V群 繩文系土器 (繩文を施す土器等)

第17図の資料以外は器形の把握ができる資料の出土はみていらない。破片資料のため全体の文様構成が把握できる資料は少ない。繩文の見られるものⅠ、見られないものⅡに細分される。

I 条痕で整形した土器に繩文を施す。文様帶は、磨消繩文を沈線区画する。

II 幾何学的な沈線文で、三角文、菱形文等になるものと思われるもの。

② 文様について

文様は、第14～17図の1部資料を除き全体の器形との相互関係をつかめるものはほとんどないものの、壺、甕の両者に認められる。また、調整方法としての条痕か、文様としての条痕かを識別するのが困難な場合も多く存在する。文様として認められるものは以下の種類である。

1. 条痕文土器

文様Ⅰ1 波状文

文様Ⅰ2 孤文

文様Ⅱ 横線文

横位の条痕により構成される。

文様Ⅲ 縦線文

横線文などによって区画された箇所に縦位の条痕を充填させる場合の縦位の条痕

文様Ⅳ T字文

文様Ⅲの場合で縦位の条痕を充填させず部分的に施す場合

文様Ⅴ 斜線文

文様Ⅴと同様に斜位の条痕を文様として施すもの

文様Ⅵ 烈点文

文様Ⅶ 縦位羽状文

縦位羽状の条痕文

文様Ⅷ 横位羽状文

横位羽状の条痕文

文様Ⅸ 疑似繩文

2. 繩文土器

文様Ⅹ 繩文

文様Ⅺ 沈縄文

文様Ⅻ 1 平行直線文

文様Ⅻ 2 三角文

文様Ⅻ 3 菱形文

文様Ⅹと文様Ⅺは変型工字文を構成する要素として捉えられるものであるが、小破片のため全体の構成を把握できるものは少ない。そのため、文様の構成要素としての最小単位の文様を上記の表現で表わしておく。

3. その他

文様Ⅼ 棒状浮文

本遺跡においては上記の文様が認められるが単独で用いられる場合がみられる文様Ⅶ、Ⅷ以外は2種類以上の組合せで構成される。

③. 器種分類 (第18図)

器種としては、壺、壺、鉢が認められるが、全体の器形が知りうる資料は壺に2点あるのみである。

壺

口縁部と胴部が揃っている資料はなく全体の器形をうかがい知ることができる資料は存在しない。大きく広口壺と長頸壺の2つの器種に分類できそうであるが明確さを欠くため、胴部の形態と文様の相違により分類を行う。壺は条痕文土器と縄文土器(縄文を施すもの)とに分け、さらに条痕文土器は球胴のものと長胴のものに大別される。

壺A

胴部が球胴のもので、径の広い頸部に文様帶をもつ。成形、形状によって壺A₁と壺A₂に分けることができる。

壺A₁

胴部の最大径がやや胴部上位にあるもので、外面の整形が、縦位羽状の条痕と斜位の条痕によって行われている。

壺A₂

球形の胴部で最大径を胴部の中位にもつもので、外面を横位の条痕と斜位の条痕によって整形している。文様は頸部に認められる。

壺B

壺Aの退化したような形態を示すもので、底部は丸底に近く、胴部の最大径を胴部の中位にもつものである。表面の磨耗が著しく胴部上位から頸部にかけて粗い横位の条痕がみられる。

壺C

長胴の胴部で、胴部最大径を胴部の上位にもつものを壺Cとする。小ぶりのものをC₁、大ぶりのものをC₂とする。

壺C₁

文様が胴中位～上位まで認められ、また胴部下位を粗い横位の条痕で整形している。

壺C₂

胴部の張りが弱くなり長胴形が目立つ器形を呈している。文様は胴中位～上位に見られる。また、胴部下位は横位と斜位の組み合わせによる条痕により縦位羽状風に整形を行う。

壺D

縄文が施文されるものを壺Dとする。小型の長頸壺で球形の胴部を呈する。文様は胴部上位～頸部に見られる。また胴部中位～下位は、斜位の条痕により整形している。

鉢

全体の器形を知りうる資料の検出はみていない。口縁部破片の資料から鉢A、鉢B、鉢Cが確認されている。

鉢A

口縁部が直立する器形を呈すると思われる鉢形土器で、口縁部外面に横位の沈線が3条見られる。

鉢B

口縁部が内傾すると思われる鉢形土器で、口唇部に小突起を設け小さな波状口縁を呈するものである。外面に縱位または斜位方向の条痕を施す。

鉢C

口縁部が直立する器形を呈すると思われる鉢形土器で、面取りした口唇部に棒状（板状）工具による押圧文を施し、口唇部内面に深い沈線を1条施すもの。外面は横位の条痕により整形される。

壺

壺は口縁の形態により、波状口縁を呈する壺A、指頭による押し引きで口唇部を整形する壺B、壺C、口唇部に押圧文を施す壺Dに大別される。以上の4種のうちでは、壺Dが主体を占めて出土している。また、平縁で押圧文を施されないものも見られるが全て破片資料のため、器形が把握できるものは検出されていない。

壺A

小さな波状を呈する口縁部破片が確認されている。全体の器形は不明であるが頸部が緩やかに外反するものである。

壺B

胴部に最大径を有し、緩やかに外反する口縁を持つ。頸部から口縁部にかけて特徴的な縱位羽状文が施される。文様帶以外は、横位の条痕で整形される。

壺C

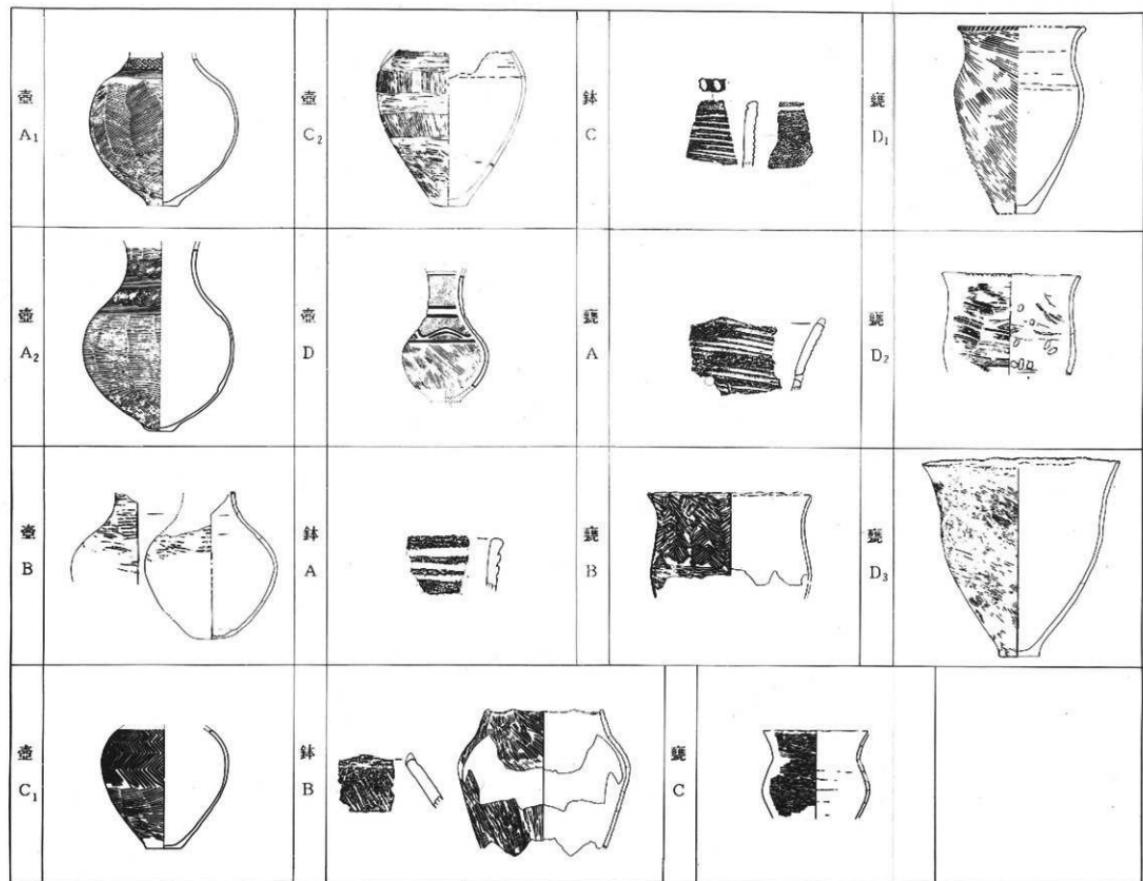
最大径を胴部に持ち、大きく「く」の字状に外反する口縁をつける。やや小ぶりの器形を呈し、外面を横位の条痕で整形する。

壺D

口唇部に押圧文を施すものを壺Dとする。出土点数が多く、形態としては多様な姿相を示すが、全体の器形がほぼ把握できるものは以下の3種である。

壺D1

長胴の壺で、最大径を胴部の上位にもち明確な肩部を形成している。さらに肩部から緩やかに外反しながら口縁部に展開する頸部を作り、最大径よりやや小さい口径を計る口縁部を作る。口唇部は外側にやや肥厚させ押圧文を施す。



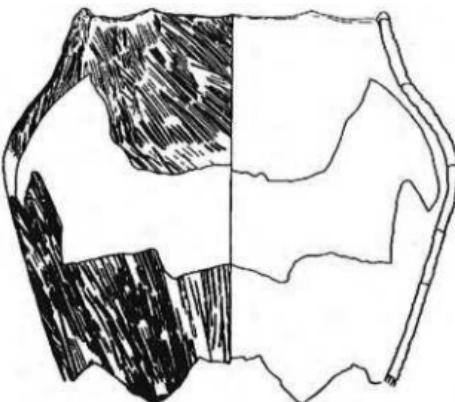
第18図 器種分類図

壺D₂

最大径を口縁に持ち、口縁部が強く外反する。肩部の張りが弱く、すんどう形の形態を示す。口唇部は面取りし押圧文を施す。

壺D₃

最大径を口縁に持ち、口縁部が外反する。底部から口縁部にかけての開きが大きく、ラッパ状を呈する。口唇部に押圧文を施す。



第19図 富士川町山王遺跡出土土器

④ 各器種について

渋沢遺跡の土器は、縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭（丸子式）に比定されるものであるが、前記のように器種に多くのバラエティーが認められる。ここでは、代表的な器種を探り上げその分布と性格について若干まとめてみたい。

鉢A

口縁部外面に数条の横線を巡らす鉢形土器は、中部高地の水I式（大洞A式）の中に普遍的に存在するものである。山王遺跡ではD地点第2類に分類され、平縁で口縁部外面に沈線を施すもの、口縁部内外面に沈線を施すもの、波状口縁を呈し外面に沈線の施されるものが認められている。他に県内では本川根町奥原、清水市天王山、沼津市葱川、伊豆長岡町珍野などの諸遺跡から出土している。

鉢B

山王遺跡に鉢Bの全体の器形を知り得る資料の出土を見ている（第19図、図版22）。それは明確な肩部を作りわずかに外反しながら内傾する口縁部を作るもので、口唇部に小突起を設け小さな波状口縁を作る。外面は継位、斜位の条痕で整形され、内面はナデ整形されるものである。他に県内で出土している遺跡は、見られず非常に類例が少ない。ただ、遠く関東地方の八王子市神谷原遺跡（石川1982）、多摩ニュータウンNo724遺跡で、類似した破片の検出が見られる。

鉢C

口唇部内面に沈線が施される鉢形土器は、山王遺跡にその類似品を見ないが、三ヶ日町殿畠遺跡に類似するものがあり、殿畠遺跡の第VII群土器（櫻王式）の中で捉えられている（佐藤1984）。本遺跡の資料とは口辺部の押圧文の有無による若干の相違がみられる。

鉢Aは中部高地の水I式のもので、鉢B、鉢Cは条痕文土器—櫻王式期のものであろう。特に鉢Bの中心的な分布は東海地方東部に求められる。

壺Aと壺C

条痕文土器の壺形土器として2つのタイプが認められる。壺Aは、頸部に波状文、孤文、横線文、列点文等が施され、文様帯も頸部に限られる。壺Cは、横線文、縦線文、横位羽状文等が見られ、文様帯も胴部から頸部まで占有している。壺Aが曲線系の文様（波状文、孤文）が施されるのに対して壺Cは直線系の文様（横線文、縦線文、横位羽状文）が施されるという大きな相違点が見られる。器形も大きく違いを見せ、壺Aが広口壺になるのに対して壺Cが細口壺になる可能性が強い。

壺Aは、波状文、孤文、縦位羽状文など水神平式の影響が強く見られ、その系譜を東海地方西部に求められる。浜松市半田山I遺跡第1号土器棺に使用された壺形土器は壺Aの類例として捉えられる。

壺Cは、東海地方西部にその系譜を求める難いもので管見の資料には見られない。中部高地では駒ヶ根市大城林遺跡、岡谷市庄の畑遺跡などにその類例がみられる。さらに北関東地方においては群馬県吾妻町岩櫃山遺跡、茨城県下館市女方遺跡などに類例がある。

壺口縁Ⅲ

口縁部を尖らせ、一定の間隔で肥厚させる壺口縁Ⅲは、河津町姫宮遺跡、神奈川県山北町堂山遺跡、長野県諏訪市十二ノ后遺跡、同塩尻市銭宮遺跡、山梨県河口町宝司塚遺跡などに類例がみられる。特に、諏訪市十二ノ后遺跡の例は壺Bの形態を示し壺口縁Ⅲと縦位羽状文の組み合わせをもつものである。壺口縁Ⅲは、中部高地の水I式の中でその祖形が見られ、水I式の鉢形土器の口縁部として普遍的に採用されている。

壺B、壺C

壺口縁Ⅲを採用する壺は、器形として壺B、壺Cが認められる。壺Cは、河津町姫宮遺跡の資料のように外反する割合が弱いもののが存在するが、壺Cの時期差として捉えられよう。各遺跡でみられる壺Cは外面が全て横位の条痕で整形されている点が共通している。壺Bは、諏訪市十二ノ后遺跡の例しか管見の資料では見られないが、文様構成は、水神平式の影響下に成立した丸子式の中に普遍的に存在するものである。

壺C

壺口縁Ⅲを有する壺Cは、頸部が「く」字状を呈し、口縁部の外反が強くなるものである。外面は深い横位の条痕が施されている。神奈川県山北町堂山遺跡の資料が類似する可能性があるが、全体の器形を知り得る資料は知られていない。これは、河津町姫宮遺跡の壺口縁Ⅲを有する資料のように口縁部の外反が弱く、胴部の膨りが弱いものとは時間差の中で捉えられ、姫宮遺跡→洪沢遺跡という変遷が考えられる。同一系統の類似資料の出土は、洪沢遺跡、姫宮遺跡、堂山遺跡といった静岡県東部地方、神奈川県西部地方に限られるようで、その分布範囲は比較的限られているように思われる。

壺D

壺Dは壺D₁～D₃の3種に細分される。

壺D₁のように長胴で肩部を明確に形成する例は、県内にその類例を見ない。網代痕が底部に施され明確な頸部を作る壺形土器は、その系譜が、水神平式土器の中に見られるが、器形には、その類例が北関東地方の岩櫃山式土器の中に散見される。

壺D₂は、水神平式土器から漸移的な型式変遷の中では捉え難く、器形が大洞A式土器、整形、文様等が水神平式土器としてその祖形が考えられるかもしれない。

壺D₃、壺D₄は、本遺跡の主要器種として捉えられるもので、壺の破片のほとんどが壺D₂、壺D₃のものである。壺D₂と壺D₃は、縄文時代晩期末葉から弥生時代中期前葉へ至る時間の中で壺D₂から壺D₃へ相対的な器形的変遷を示すもので、直立する器形からラッパ状に開く器形へと変化する。口縁の形態は壺Bが壺口縁I-2、壺Cが壺口縁I-3を示す。壺Cは、さらに弥生時代中期中葉の一般的な壺形土器の器形として盛行する。

⑤ 波状文の分類（第20図）

壺形土器の頸部を飾る文様の1つである波状文は、水神平式土器にその祖形が認められ、弥生時代の初源期を考える上で重要な文様の1つと考えられている。本遺跡においても壺Aの主要な文様として波状文が取り入れられている。波状文は若干のバラエティーが認められ5種類ほどに分類することができる。

- A種 条痕を施した工具と同一のものか指頭あるいは棒状工具を使用して施文したと思われる波状文。この種類を基準とする。
- B種 波の起伏の小さい波状文で、柳状工具により施文されたもの。
- C種 波の起伏の大きな波状文で半截竹管状の工具で施文されたもの。
- D種（孤文） 文様[2]に属するもので、波線を施す中で明らかに工具の折り返しがみられる。施文工具は条痕を施したものと同一のものと考えられる。
- E種 波状文自体はA種に属するが、波状文の中に横位の条痕が施される特異な様相を表わしている。施文工具は条痕を施したものと同一のものと考えられる。

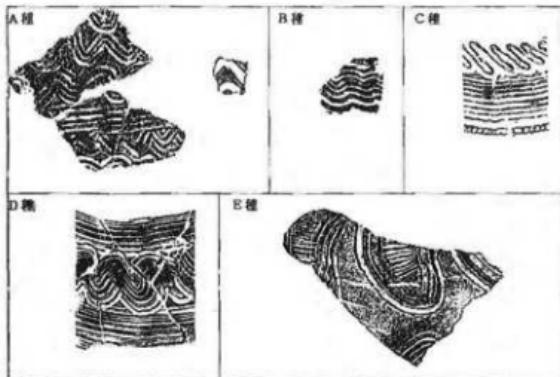
以上が本遺跡に見られる波状文の大きな分類である。

A種は水神平式土器の中に普遍的に見られるもので、三ヶ日町殿畠遺跡、東京都新島本村田原遺跡などの諸遺跡で出土している。A種は文様構成や波状の状態にさらにバラエティーが認められ細分が可能である。

B種は丸子式土器の標式遺跡である静岡市丸子セイゾウ山遺跡、同佐渡遺跡や浜松市半田山遺跡などに認められ丸子式土器の中に散見される。

C種はB種同様丸子式土器の中に散見され、半田山遺跡、丸子セイゾウ山遺跡、清水市天神山下II遺跡、田原遺跡などに認められる。また、北関東地方の茨城県下館市女方遺跡に見られる丸子式土器の壺形土器もC種の波状文を施している。

D種の出土例は非常に少なく、田原遺跡に類似資料が見られるのみである。D種の分布区域



第20図 波状文の分類図

が限られた範囲で本遺跡における特徴的な文様の1つと言える。

E種は大型壺の頸部破片である。本遺跡において1点のみ検出している。A種との相間関係は考えられるが、その類例は知らない。

以上のように波状文の分類が考えられる。A～D種のうちA、D種が古相を程し、B、C種が新相を表わしている。A、D種が水神平式土器に併行し、B、C種が丸子式土器のメルクマーラーク的な文様と言える。また、本遺跡において岩滑式土器の特徴とされる跳上げ文の検出はみていらない。

⑥ 渋沢遺跡の編年的位置づけ

静岡県東部地方の縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭の編年は東海地方西部の櫻王式土器に併行する駿河山王式土器から丸子式土器までをそれに当てられている。駿河山王式土器と丸子式土器の間を埋める型式として猿原式土器、天王山最上層式土器などが考えられているが標式となる資料が包含層出土資料などといった一括性に欠けるものでその内容は貧弱でまだ混沌とした状況である。また、丸子式土器でさえ、その分布範囲や器種構成などの面で検討しなければならないことが多く残されているのが現状と言える。

本遺跡の資料は、包含層出土資料が主体であったが、それぞれの資料が各時期に分層できるような出土状況を示してはおらず、第Ⅲ層～第Ⅳ層にかけて遺物の出土が認められたものの明確な細分は不可能であった。しかし、鉢Aや鉢Bのように明らかに駿河山王式土器に併行する部分が見られるように、駿河山王式期～丸子式期の時間帯の中で捉えることができる。駿河山王式土器に併行する部分を第Ⅰ期、丸子式土器に併行する部分を第Ⅲ期、駿河山王式期と丸子式期の間に第Ⅱ期としてそれぞれの本遺跡における様相を以下に若干考えてみたい。

第Ⅰ期

駿河山王式土器と併行する第Ⅰ期の資料としては、鉢A、鉢Bが上げられる。鉢Aは中部高地の水I式土器のものである。鉢Bは類例が少なく明確な判断はできないが、東海地方西部の馬見塚式土器に器形的な祖形が求められるもので、駿河山王式期に在地化して成立した器種かと思われる。ただ静岡県東部地方においてもその出土例はほとんど見られず分布範囲など不明な点が多い。

鉢Cは、駿河山王式土器の中には見られない。口唇部内面に沈線の施される例は、三ヶ日町殿堀遺跡の樺王式段階の鉢形土器の中にみられ、駿河山王式期と併行関係にある段階として捉えられ、第Ⅰ期の中に含まれるものと考えられる。第Ⅰ期に属する資料は、鉢Aが1点、鉢Bが2点、鉢Cが1点と非常にその量は少ないと、波津遺跡の開始を考える上で重要なものと言える。このように本遺跡の開始時期は駿河山王式段階（樺王式併行）の中で捉えられるが、まだ主体的な時期とは考え難い状況を呈している。

第Ⅱ期

丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡と共に通しない器形の中で古相の様相を呈する壺口縁I b-2、壺口縁I c、壺口縁II b、壺口縁IVを第Ⅱ期の所産と考える。壺口縁I b-2の凸帯の手法は樺王式にその祖形がみられ、丸子式の段階になると見られなくなるらしい。山梨県大泉村金生遺跡A区17号住居の資料のように明らかに水I式土器と共に見られるものもある。また富士川町山王遺跡においてもその類例がみられ、駿河山王式期の中に散見される。さらに水神平式土器にもその技法は繼承され、三ヶ日町殿堀遺跡などの類例が認められる。壺口縁I b-2は第Ⅰ期～第Ⅱ期の中で捉えられる。壺口縁I cは水神平式土器の特徴をそなえているが、口辺部に押引文が施される例はない。それが地域差か時期差であるかは不明であるが、第Ⅲ期に下る可能性は薄い。壺口縁II bは水神平式土器の特徴である押引の烈点文が明確に見られる。壺口縁IVは、波状口縁を呈す壺形土器である。山梨県大泉村寺所遺跡2号土壙からは、壺口縁I cに共伴して壺口縁IVが出土している。壺口縁IVは中部高地の水I式土器の中にその祖形が認められ、中部高地～静岡県東部地方を中心に水神平式期の段階に分布する。また第26図-48の壺形土器の頸部の資料や第29図-138の壺形土器の肩部凸帯の資料は第Ⅱ期の所産であろう。

第Ⅱ期は、資料的にも貧弱で明確にその内容は把握できない。また第Ⅰ期との連続性が強く第Ⅰ期が第Ⅱ期の中に吸収される可能性も考えられる。第Ⅰ期と第Ⅱ期を山王遺跡の新しい部分及び清水市天王山遺跡最上層a類土器の段階といった、ある程度時間帯を持たせた中で捉えておく。

第Ⅲ期

丸子式土器に併行する段階を第Ⅲ期とする。静岡市丸子セイゾウ山遺跡、同佐渡遺跡出土土器を標式とする丸子式土器の内容を検討し、本遺跡との関連を考えてみたい。

凸帯を施す壺口縁Iの内、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡では、壺口縁I a-1、壺口縁I a-2、

壺口縁 I b - 1 が確認される。口唇部に凸帯を施す比率は櫻王式、水神平式の段階で盛行するものの、以後弥生時代中期に入るとその比率が低くなる傾向にある。丸子式の段階では、壺口縁 I a が主体的に残り、壺 I b - 1 がわずかに見られるという状況が看取され、壺口縁 I b - 2、壺口縁 I c は見られなくなる。また、本遺跡において壺口縁 I で口辺部に横位の条痕を施すものは存在しないがセイゾウ山遺跡ではその類例が見られる。

壺口縁 II の内、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡では壺口縁 II a、壺口縁 II c、壺口縁 II d - 1 が認められる。壺口縁 II に関してはほぼ同一の様相を示しているが、セイゾウ山遺跡ではさらに、壺口縁 II c - 1 の口辺部に棒状工具による押圧文が施される例が散見される。

口唇部に押圧文を施す壺口縁 I はセイゾウ山遺跡、佐渡遺跡と共に本遺跡でも主体的に見られる。また、壺口縁 II も出土比率は低いが両遺跡とも共通して見られる。壺口縁 III は、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡にその類例は見られない。神奈川県山北町堂山遺跡に壺口縁 III の類例があることはすでに前記したが、丸子式とそれほど時期差の考えられない堂山遺跡で出土していることは、壺口縁 III が、丸子式の時期巾の中で捉えられるものの地域色の強いものであることを表わしていると考えられる。壺口縁 IV は、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡では見られない。

文様に関しては、波状文（文様 I）の分類の項に表わしたように B 種、C 種がセイゾウ山遺跡、佐渡遺跡に見られ、壺形土器の頸部に施文される A 種、D 種は見られない。また、文様 II、文様 III、文様 IV、文様 V、文様 VI、文様 VII はセイゾウ山遺跡、佐渡遺跡に見られる。特に文様 II と文様 III、文様 IV、文様 II と文様 V は丸子式土器の特徴的な文様であると考えられる。文様 VI、文様 VII はセイゾウ山遺跡、佐渡遺跡には見られない。しかし、文様 VII は本遺跡において文様 I - C 種と文様 II と組み合わされて施文されている例があるため、丸子式土器の中でも使用される文様の一つであると考えられる。

丸子式土器の器種構成を考える場合、セイゾウ山遺跡の縄文が施文される鉢形土器と佐渡遺跡の壺形土器以外全体の器形が知り得る資料の出土が見られず、詳細な内容まで把握できないのが現状である。特に佐渡遺跡の壺形土器は器形的に後出の要素が強く本遺跡ではその類例が見られない。

以上が、丸子式土器の標式遺跡である丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡と本遺跡の比較であるがまとめると、共通する器形は、壺口縁 I a - 1、壺口縁 I a - 2、壺口縁 I b - 1、壺口縁 II a、壺口縁 II c、壺口縁 II d - 1、壺口縁 I、壺口縁 II で、本遺跡に見られる器形は、壺口縁 II d - 2、壺口縁 III、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡だけに見られる器形は、壺口縁 I で口辺部に横位の条痕を施すもの、壺口縁 II c - 1 で口辺部に押圧文が施されるものである。本遺跡の資料で丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡と共通する部分は丸子式遺跡の範囲で捉えることができると考えられる。また、壺口縁 III に関しても丸子式期の中で捉えられると思われる。

器形分類では壺 A に当たる第16図-1、壺 C、壺 C、壺 D₁、壺 D₂ が第Ⅲ期の中で捉えられる。壺 A に当たる第16図-3、壺 A、壺 D₃ が第Ⅱ期に相当する。また壺 A₁ に当たる

第16図-2、壺Bが第Ⅱ～Ⅳ期の中で捉えられる。

壺Cは、群馬県吾妻町岩櫃山遺跡の報文中でA類とされた壺形土器である(杉原1967)。岩櫃山遺跡の報文中で杉原氏は「A類は丸子式土器あるいは庄ノ畑式土器の文様ときわめて類似していることは事実であるとしても、すでにそれらの土器自体ではなくなっている。まず、A類の諸土器には長刷のものが多い。底部には網代あるいは木葉の圧痕を呈しているものが多い。一中略一 A類土器が丸子式土器や庄ノ畑式土器と類似しているとしても、一方では充分にこの地方の土器として風土化しているわけである。」と述べられA類土器の地域性を強調されている。しかし本遺跡においてA類土器にあたる壺Cおよびその文様になると思われる第29図-137、第30図-168などが出土していることは、壺Cが時期的には丸子式土器の段階で捉えられること、また、その時期に北関東地方と本地域とになんらかの相関関係があったことが伺えるもので興味深い。どちらの地域が壺Cの母体となるかは中部高地の類例を含めて今後検討しなければならないことであるが、条痕文土器である点を強調すれば、本地域(静岡県東部地方～神奈川県西部地方)が壺Cの主体的な地域となる可能性は充分考えられる。

(山上)

第3表 土壌出土土器観察表

地	器形	部 位	出土土	層位	要形・露文の特徴	底	成	施 土	色 調	備 考
1 壺 頸 部	A-1号	復土	複数の小ケ日溝模の後 取扱いのヘラ跡を残す。	背	石英、長石、砂隕	黒褐色	器壁橙色		追賀田系	
2 壺 頂 部	A-1号	覆土	取扱いのヘラ跡	背	石英少	外 黄褐色 内 黄褐色				
3 壺 頂 部	A-1号	覆土	取扱い	背	石英少	外 黑褐色 内 黑褐色				
4 壺 頸 部	A-1号	復土	横位羽状文	やや凹?	石英少、長石、少 砂隕、金雲母斑	外 にふい黄褐色	内 黑褐色			
5 壺 頸 部	A-1号	復土	横縞文+横縞文(三本 を1組とした直縞文)	やや凹?	石英少、長石、少 砂隕、金雲母斑	外 にふい黄褐色	内 にふい黄褐色			
6 - 頸 部	A-1号	復土	外面は横位の条痕	背	石英少、長石、少 砂隕、金雲母斑	外 黄褐色	内 にふい黄褐色			
7 壺 頭 部	A-1号	復土	横縞文+横位の条痕	やや凹?	石英、長石、砂 隕、金雲母斑	外 にふい黄褐色	内 にふい黄褐色			
8 壺 頭 部	A-1号	復土	横縞文+横位の条痕	やや凹?	石英、長石、砂 隕、金雲母斑	外 にふい黄褐色	内 にふい黄褐色		外側ス付番 7と同一個体	
9 壺 頭 部	A-1号	復土	外面は横位の条痕、1部 取扱いの跡がなじらる。	背	石英少、長石	外 黑褐色	内 黄褐色			
10 壺 頭 部	A-1号	復土	外面は横位の条痕	背	石英、長石	外 黑褐色	内 黑褐色		外側ス付番 内側ターナ付番	
11 壺? 頸 部	A-1号	復土	横位羽状文	背	石英、長石、砂 隕、金雲母斑	外 にふい黄褐色	内 黑褐色			
12 壺 口 部	A-2号	復土	剥口縫 b-1	やや凹?	石英少、長石	外 黄褐色	内 黑褐色			
13 壺 頭 部	A-2号	復土	外面は横位の条痕	背	石英、長石、金雲母 少	外 黄褐色	内 黄褐色			
14 壺 頭 部	A-2号	復土	横縞文+横縞文	やや凹?	金雲母少	外 暗灰黑色 内 黄褐色				
15 - 頭 部	A-2号	復土	外面は横位の条痕	背	石英少、長石少、砂 隕少	外 暗灰黑色 内 黄褐色				
16 - 頭 部	A-2号	復土	外面は横位の条痕	背	石英、長石、砂少	外 暗灰黑色				
17 - 頭 部?	A-2号	復土	外面は横位の太目の条痕	背	石英、長石	外 暗灰黑色	内 黄褐色		外側ス付番	
18 壺 頭 部	A-3号	復土	外面波状文	背	石英少、砂少	外 暗灰黑色	内 黄褐色			
19 壺 口 部	A-3号	復土	剥口縫	背	石英、長石	外 暗灰黑色	内 黄褐色			
20 壺 (口縫部)	A-3号	復土	外面は横位の条痕 剥口縫-2と同様の条痕	背	石英、長石、金雲母 少	外 黑褐色	内 黑褐色			
21 壺 口 部	A-3号	復土	剥口縫-1	背	石英、長石、金雲 母少	外 黑褐色	内 にふい黄褐色			
22 壺 頭 部	A-3号	復土	外面は横位の条痕	背	石英少、長石、少 砂隕	外 黑褐色	内 黑褐色		外側ス付番	
23 壺 頭 部	A-3号	復土	外面は斜位の条痕	背	石英少、長石、金 雲母少	外 黑褐色	内 黑褐色		外側ス付番	
24 壺 頭 部	A-5号	復土	外面は横位の条痕	やや凹?	石英、長石	外 暗灰黑色	内 黄褐色			
25 壺 頭 部	C-9号	復土	横縞文+横縞文	背	石英、長石、金雲母 少	外 黑褐色	内 黄褐色		外側ス付番	
26 - 頭 部	C-9号	復土	外面は斜位の条痕	背	石英、砂少	外 黑褐色	内 黄褐色			
27 壺? 頭 部	C-9号	復土	外面は横位の条痕	背	石英少、長石、砂 隕少	外 明暗色	内 オリーブ黒色			
28 壺? 頭 部	C-9号	復土	外面は斜位の条痕	背	石英、長石	外 黑褐色	内 黄褐色			
29 壺 頭 部	C-9号	復土	内側外面 斜位の条痕	背	石英少、長石	外 黑褐色	内 黄褐色		外側ス付番	
30 壺 頭 部?	C-10号	復土	外面 條位の条痕(横 縞文?) 内面光沢剥離	背	石英、長石	暗赤褐色				
31 - 頭 部	C-10号	復土	外面 條位の条痕	やや凹?	石英、長石、砂	外 にふい黄褐色				

第4表 C-12号遺物集中区出土土器觀察表

号	器種	部 位	出土区	層 位	形態・施文の特徴	施 文	船 土	色 調	備 考
1	柵	口縁部 —底部	B—6	III	素口縁 I—3、II—D 外側は横幅の余裕の後 底部は余裕の余裕	普	石英、長石、砂	外 外 外	赤褐色 褐色 に赤い黃褐色
2	柵	脚 部	C—6	IV	外側は横幅の余裕の後 底部は横幅の余裕の後 底部に引抜き文を作り、支承工	普	石英、長石	内 内 内	に赤い黄褐色 クリーブ色 明褐色
3	柵	脚 部	B—5 C—5、6	III	底部は横幅の余裕の後 文且引抜き文は底部の余裕	やや厚 少	石英多、長石少	内	褐色
4	柵	口縁部	C—6	IV	口縁は I—2 外側は横幅の余裕の後横幅 の余裕の内側に凹	普	石英少 金雲母少	に赤い褐色	
5	柵	口縁部	C—5	III	口縁 II—b 外側は横幅の余裕の後横幅 の余裕の後横幅の余裕	やや厚 少	石英、長石	外 外 内	褐色 黒褐色 黑色
6	柵	脚 部	C—6	IV	外側は横幅の余裕の後 底部は横幅の余裕の後	普	石英、長石、金雲母少	に赤い褐色	
7	柵	脚部?	C—5	IV	底部の余裕の後横幅の 余裕を底部に内側に削除	普	石英 金雲母少	外 内	黒褐色 黑色
8	—	脚 部	C—6	IV	縫合跡状文	やや厚	石英、長石、少砂	外 内	に赤い黃褐色 に赤い褐色
9	柵	口縁部	C—6	III	素口縁 I—1 内面コヨ ナテ外面ヨコナタの後 横幅の間のミガキを施す	普	石英、長石、少砂	内	黒褐色
10	柵	脚 部	B—5 C—6	III	横縞文+縱縞文	普	石英、長石、少砂	外 内 内	に赤い黃褐色 に赤い黃褐色 に赤い黃褐色
11	柵	口縁部 —脚部	C—5	III	素口縁 I—1C	やや厚 少	石英、長石、少砂 金雲母少	外 内 内	黒褐色 黑色 黑色
12	—	縫部	C—6	III	縫合跡 I—2 口縁は I—3 右側に縫合跡を残す、外 側は横幅の余裕を残す	普	石英、長石	内	暗褐色
13	柵	口縁部	C—6	III	口縁 II—b 外側は横幅の余裕	普	石英少、長石 金雲母少	外 外 内	黒褐色 黒褐色 内 黑褐色
14	柵	脚 部	C—6	III	外側は横幅の余裕	普	金雲母少	内	暗褐色
15	柵?	脚 部	C—6	IV	外側は縫合跡の余裕	普	石英少、金雲母少	に赤い褐色	
16	—	脚 部	C—6	IV	外側は横幅の余裕の後 底部は横幅の余裕	普	石英少、灰灰少	外 外	暗褐色 暗褐色
17	—	脚 部	C—6	IV	外側は横幅の余裕の後 底部は横幅の余裕	普	石英、長石少	内	暗褐色
18	—	脚 部	B—6	III	外側は横幅の余裕の後 底部は横幅の余裕	普	石英、長石少	内	暗褐色
19	—	脚 部	C—5	III	外側は横幅の余裕の後 底部は横幅の余裕	普	石英少、長石少 金雲母少	外 内	に赤い褐色 に赤い褐色
20	—	脚 部	C—5	III	外側は横幅の余裕の後 底部は横幅の余裕	普	石英少、長石少 金雲母少	内	に赤い褐色 に赤い褐色
21	—	—	C—6	III	外側斜位の余裕 内面縫合跡の余裕	やや厚	石英少、灰石	内	赤褐色
22	—	脚部?	C—5	III	外側は横幅の余裕	普	長石、金雲母少	外 内	オリーブ色 オリーブ色
23	柵	頭部?	C—6	III	外側縫合跡の余裕 内面 縫合跡の余裕が残る	普	石英、長石少	内	黒褐色
24	—	脚部?	C—6	III	外側斜位の余裕	普	石英 金雲母少	外	に赤い褐色
25	—	脚部?	C—6	III	外側は縫合跡の余裕	やや厚 少	五石、灰石、金雲母 石英少、灰灰少	外 外	赤褐色 黒褐色
26	—	脚部?	C—6	III	外側は横幅の余裕	普	石英少、少砂 少砂	内	暗褐色
27	—	脚部?	B—6	III	外側は縫合跡の余裕の後 内側に縫合跡が残る	やや厚	石英、灰石、金雲母少	外	暗褐色
28	柵	脚部?	C—6	III	外側は縫合跡の余裕の後 内側に縫合跡が残る	普	石英、長石少、少砂	外 内	に赤い褐色 に赤い褐色
29	柵	頭部?	C—6	II	外側は横幅の余裕	普	石英 金雲母少	外 内	に赤い褐色 に赤い褐色
30	柵	脚 部	C—5 C—6	III	外側は横幅の余裕	普	石英、長石、少砂 金雲母少	内	暗褐色
31	柵?	脚 部	C—6	III	外側は縫合跡の余裕の後 底部は横幅の余裕	普	長石、少砂	外 内	赤褐色 に赤い褐色
32	—	脚 部	C—5	III	外側は縫合跡の余裕	普	长石少	内	暗褐色
33	柵	脚 部	C—6	IV	外側は縫合跡の余裕の後 底部は横幅の余裕	普	長石、少砂	外 内	に赤い褐色 に赤い褐色
34	脚 部	脚 部	C—5 C—7	III	外側が広くて、外側に縫 合跡の余裕を残す	普	石英少、長石少 少砂少、金雲母少	内	に赤い褐色
35	脚 部	脚 部	B—5	III	外側が広くて、外側に縫 合跡の余裕を残す	普	石英少	暗褐色	
36	—	—	C—5	III	外側は縫合跡の余裕	普	石英、長石	外 内	暗褐色 暗褐色
37	脚 部	脚 部	C—5	III	縫合跡文 (L.B.) + 7 2つの縫合跡 + 縫合跡文	普	石英多、長石少 灰灰少、長石少	外 内	黒褐色 黒褐色
38	脚 部	脚 部	C—5	II	(L.B.)	やや厚	金雲母少	内	クリーブ色
39	脚 部	脚 部	C—6	III	三曲縫合跡?	普	石英、長石、金雲母少	内	暗褐色

第5表 A地区出土器物表

号	種類	部位	出土区	角位	形態・施文の特徴		質	色	調	備考
					前	後				
1	盾	頭部		A-1 A-2	III	頭部のハゲ凹溝調の後 側面のハゲ凹溝調に施文	骨	石英・長石・砂	黒褐色 器壁銀色	波打用系
2	盾	口縁部	A-7		III	頭部のハゲ凹溝調に施文 頭部の後側面の条痕が施 文される	骨	石英・長石・金雲 今中少	内 外 にふい褐色	
3	盾	口縁部			III	頭部のハゲ凹溝調に施文 頭部の後側面の条痕が施 文される	骨	石英・長石・金雲 母少	内 外 にふい褐色	
4	盾	口縁部			III	頭部の後側面に施文 頭部の後側面に施文	骨	砂・長石	にふい銀褐色	
5	盾	口縁部	Z-1 Z-2		IIa	頭部の後側面に施文	骨	石英・長石少・砂	にふい黄褐色	

6	亞	口縫部	A-6	Ⅲ	舌行絆 外縫位の柔直	普	石英・長石 有英少・長石少	にぶい褐色	
7	亞	口縫部	A-6	Ⅲ	舌行絆 外縫位の柔直 外縫位の柔直	普	石英・長石 有英少・長石少	にぶい赤褐色	
8	亞	口縫部	A-5	Ⅳ	外縫位 内縫位	普	石英・長石・少少 有英少・長石少	内 外 内 外	黒褐色 褐色 にぶい褐色 褐色
9	亞	口縫部	A-6	Ⅲ	舌行絆 外縫位の柔直	やや悪い	石英少・長石少 全英母少・少少	内 外	黒褐色 にぶい褐色
10	亞	口縫部	A-6	Ⅲ	舌行絆 外縫位の柔直 外縫位の柔直の後 外縫位の柔直の後 外縫位の柔直の後	普 砂	石英少・長石少 全英母少・少少	内 外	黒褐色 褐色
11	亞	口縫部	A-3	Ⅲ	舌行部は尖る外縫位の柔直の後 外縫位の柔直の後	普	石英少・長石少 全英母微	外 内	黒褐色 黒褐色
12	亞	頸部	A-5	Ⅳ	外縫位の柔直 (柔直)の後 外縫位の柔直 外縫位の柔直 + 中縫位 外縫位の柔直 + 中縫位 + 横縫位 外縫位の柔直 + 中縫位 + 横縫位 外縫位の柔直 + 中縫位 + 横縫位	普	石英・長石・砂少	外 内 外 内	明褐色 明褐色 黒褐色 黒褐色
13	亞	頸部	A-6	Ⅲ	外縫位の柔直 外縫位の柔直 + 中縫位 外縫位の柔直 + 中縫位 + 横縫位	普	石英・長石・砂少	内	明褐色
14	亞	頭部		Ⅲ	外縫位の柔直	普	石英・長石・砂少	外 外 内	明褐色 明褐色 にぶい褐色
15	亞	頭部	A-3	Ⅲ	横縫文 + 橫縫文	普	石英少・長石少	外 外 内	明褐色 明褐色 にぶい黃褐色
16	亞	頭部	A-3	Ⅲ	横縫位の柔直の後 波状文(柔直)を描す	普	石英・長石 全英母少	内 外	明褐色 にぶい赤褐色
17	亞	頭部	A-3	Ⅲ	横縫文	普	石英・長石 全英母少・少少	内 外	明褐色 にぶい赤褐色
18	亞	頭部	A-3	Ⅲ	横縫文 + 橫縫文	普	石英・長石・全英母少 黑英母少	外 外	にぶい橙色 黒褐色
19	亞	頭部	B-7		波状文(柔直) + 橫縫文	やや悪い	石英少・長石少	外 外	黒褐色 灰黄褐色
20	亞	頭部	A-6	Ⅲ	波状文 + 横縫文	普	石英・長石 全英母少	内 外	灰黄褐色 にぶい黃褐色
21	亞	頭部	A-5	Ⅲ	波状文 + 中縫位の横縫位 金直(横縫文)	普	石英・長石少・渺	外	暗灰黃褐色
22	亞	頭部			波状文 + 中縫位の横縫位 直(横縫文)	普	石英・長石少・渺	内 外	にぶい黄色 にぶい橙色
23	亞	頭部	A-5	Ⅲ	中縫の波状文	普	石英・長石	外 内	褐色 褐色
24	亞	頭部	A-2	Ⅲ	細かい波状文 + 橫縫	普	石英少・長石少	内	にぶい黃褐色
25	亞	頭部	A-1	Ⅲ	横縫位の波状文 + 橫縫文?	普	石英・長石 全英母多	外 内	暗赤褐色 暗褐色
26	亞	頭部	A-2	Ⅲ	横縫文 + 橫縫文又?	やや悪い	石英・長石少	外 内	にぶい褐色 褐色
27	亞	頭部	A-2	Ⅲ	下生支	普	石英少・渺少	外 内	黒褐色 黒褐色
28	亞	頭部	A-5	Ⅲ	横縫文・縱縫文	普	石英・長石 全英母微	外 内	浅褐色 浅褐色
29	亞	頭部	A-6	Ⅲ	横縫文 + 橫縫文	普	石英・長石	外	褐色
30	亞	頭部	A-2	Ⅲ	横縫文 + 橫縫文の柔直	普	石英・長石少・渺	外 内	暗灰褐色 にぶい褐色
31	亞	頭部	A-3	Ⅲ	横縫文 + 橫縫文	普	石英・長石・渺	外 内	暗灰褐色 にぶい褐色
32	亞	頭部		Ⅲ	横縫 + 縱縫文	普	石英・長石	外 外 内	にぶい黃褐色 暗褐色 にぶい赤褐色
33	亞	頭部	A-6	Ⅲ	横縫文 + 縱縫文?	普	石英・長石・渺少	外 内	にぶい褐色 にぶい褐色
34	亞	胸部	A-7	Ⅲ	横縫文 + 縱縫文	普	石英少・長石少	外 外 内	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色
35	亞	頭部	A-3	Ⅲ	横縫位の柔直(横縫文?) の後横縫文を施す内縫位の柔直が一部みられる	普	石英・長石・渺少	外 内	黒褐色 黒褐色
36	亞	頭部	A-7	IV	横縫文 + 横縫位の柔直	普	石英・長石多 渺少	外 内	黒褐色 黒褐色
37	亞	胸部	A-4	Ⅲ	横縫文 + 鋼縫文	普	石英・長石 全英母微	外 内	黒褐色 黒褐色
38	亞	頭部	A-4	Ⅲ	横縫文 + 横縫位の柔直 (鉄縫文)	普	石英・長石 金直母少	外	暗褐色
39	亞	胸部	B-7	Ⅲ	横縫文 + 鋼縫文	普	石英・長石 金直母微	外 内	灰褐色 にぶい黃褐色
40	亞	頭部	A-4	Ⅲ	横縫文 + 斜位の柔直	普	石英・長石 金直母少	外 内	暗褐色 暗褐色
41	亞	胸部	B-5	Ⅲ	横縫文 + 斜位羽状の羽 立文(全鉄文)	やや悪い	石英・長石 金直母微	外 内	暗褐色 にぶい赤褐色
42	亞	胸部		Ⅲ	斜位羽状文 + 横縫位の柔直	普	石英・長石 金直母微	外 内	褐色 褐色
43	亞	胸部	A-5	曲	斜位羽状文	普	石英・長石 金直母微	外 内	暗褐色 にぶい黃褐色
44	亞	胸部	A-4	曲	斜位羽状文?	普	石英少・長石少	外 内	にぶい黃褐色 外面部
45	亞	胸部		Ⅲ	斜位羽状文	普	石英・長石 渺少	外 内	赤褐色 暗褐色
46	亞	胸部	A-4	Ⅲ	斜位羽状文	普	石英少・長石 全英母微	外 内	にぶい黄色 黒褐色
47	亞	胸部	A-5	Ⅲ	斜位羽状文 + 橫縫文?	やや悪い	石英・長石 渺少	外 内	にぶい褐色 褐色
48	亞	頭部		Ⅲ	横縫位羽状文 内縫一部 横縫位の柔直がみられる	普	石英・長石	外 内	暗褐色 にぶい黃褐色
49	亞	頭部	A-4	Ⅲ	横縫位羽状文	普	石英・長石	外 内	褐色 にぶい黃褐色
50	亞	胸部	A-6	Ⅲ	横縫位羽状文 + 1系の横 縫で構成する	普	石英・長石 金直母少	外 内	明黃褐色 褐色
51	亞	胸部	A-6	Ⅲ	横縫位羽状文	普	石英・長石 金直母微	外 内	暗黃褐色 黒褐色
52	亞	頭部		I	外縫位柔直の後方陣のハラ ミガタ内縫横縫位の柔直	普	石英・長石 金直母少	外 内	褐色 にぶい黃褐色
53	亞	底部		Ⅲ	外縫位柔直の柔直	やや悪い	石英・長石・渺	外 内	暗褐色 にぶい黃褐色

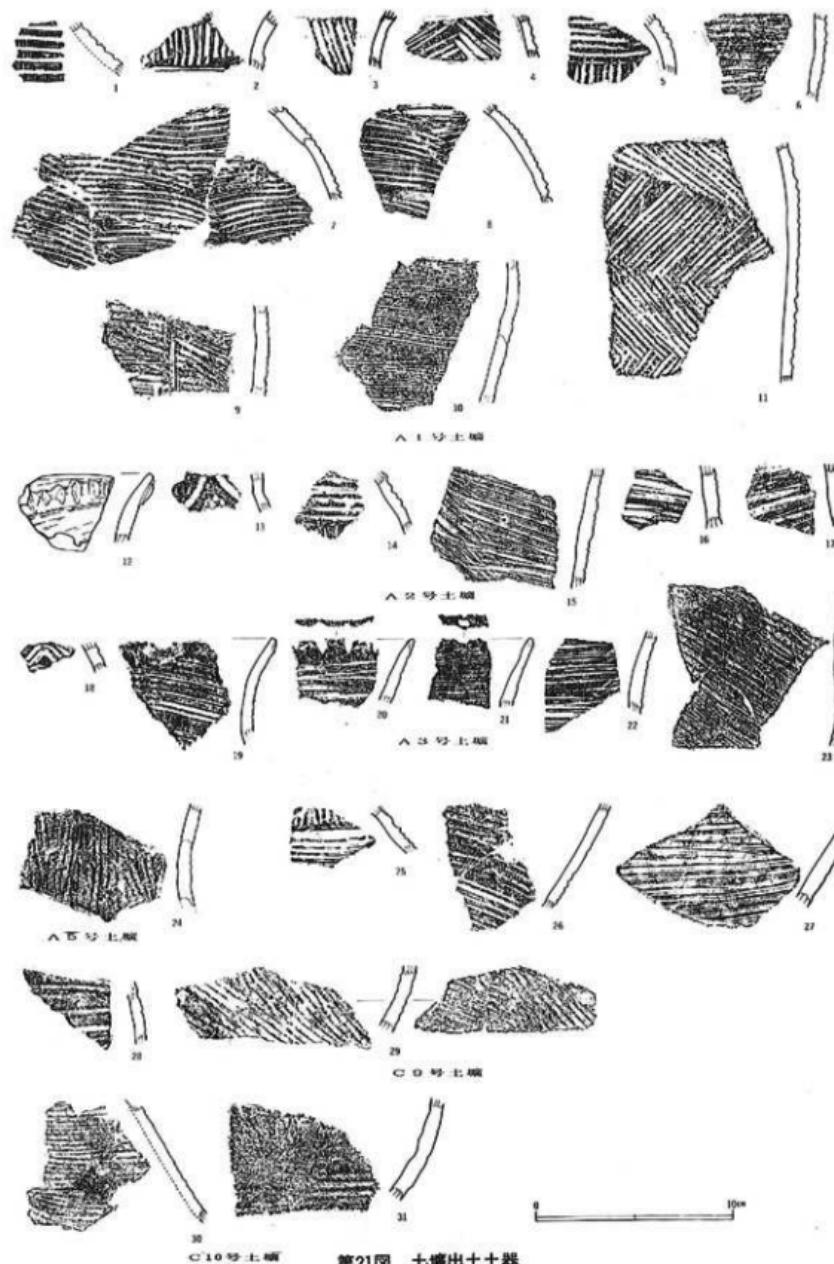
第6表 B地区出土土器觀察表

色	固形部	部名	出土区	位置	固形・施文の特徴	施成	施	色	固形	備考
132	並	口縁部	埋乱	口部1-b 外側は横位の直角	石英・長石・砂 金雲母少	やや黒い 金雲母少	石英・長石・砂 金雲母少	外 内	にぶい褐色 にぶい青褐色	
133	右	口縁部	I	口部1-C 内側は横位羽状文	石英・長石・砂 金雲母少	黒い 金雲母少	石英・長石・砂 金雲母少	外 内	赤褐色 赤褐色	
134	左	口縁部	I	口部1-C-1 内側は横位の直角	石英少・長石少・ 内側は横位の直角	昔	石英少・長石少・ 内側は横位の直角	外 内	赤褐色 オーリーブ黒	
135	並	頭部	I	前面直状文	昔	石英少・長石少 金雲母少	石英・長石少 金雲母少	外 内	にぶい黄褐色 暗褐色	
136	右	頭部		前面直状文・頭部直状文 頭部2-2を直角で区切る	昔	石英・長石少 金雲母少	石英・長石少 金雲母少	外 内	暗褐色 明褐色	
137	左	頭部A	A-6	頭部2-3段の斜位文	昔	石英・長石・砂少 金雲母	石英・長石・砂少 金雲母	外	褐色	
138	並	脇部 脇部	I	脇部2+3段の斜位文 脇部2+3段の斜位文	昔	石英・長石 金雲母少	石英・長石 金雲母少	外 内	暗褐色 赤褐色	
139	並	脇部		脇部2+3段の斜位文	昔	石英・長石 金雲母少	石英・長石 金雲母少	外 内	暗褐色 暗褐色	
140	並	脇部		脇部2+3段の斜位文	昔	石英・長石 金雲母少	石英・長石 金雲母少	外 内	暗褐色 暗褐色	
141	並	脇部	A-2	被線文+複数羽状文?	昔	石英・長石・砂	石英・長石・砂	外 内	暗褐色 にぶい青褐色	
142	冕?	脇部	I	横羽状文?	昔	石英・長石・砂少	石英・長石・砂少	外 内	にぶい青褐色 にぶい黄褐色	
143	右	底部		底面側伐	やや黒い 外側は斜	石英・長石	石英・長石	外 内	にぶい青褐色 にぶい青褐色	
144	左	口縁部	B-7	口部1-I 外側は横位の直角	昔	石英・長石少	石英・長石少	外 内	赤褐色 赤褐色	
145	裏	口縁部	III	口部1-2 外側は横位の直角	昔	石英少・長石・砂 金雲母少	石英少・長石・砂 金雲母少	外 内	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	
146	裏	口縁部	A-4	口部1-2 外側は横位の直角	昔	石英・長石・砂少 金雲母多	石英・長石・砂少 金雲母多	外 内	赤褐色 にぶい黄褐色	
147	裏	口縁部	B-6	口部1-2 外側は横位の直角	昔	石英・長石・砂少 金雲母多	石英・長石・砂少 金雲母多	外 内	赤褐色 赤褐色	

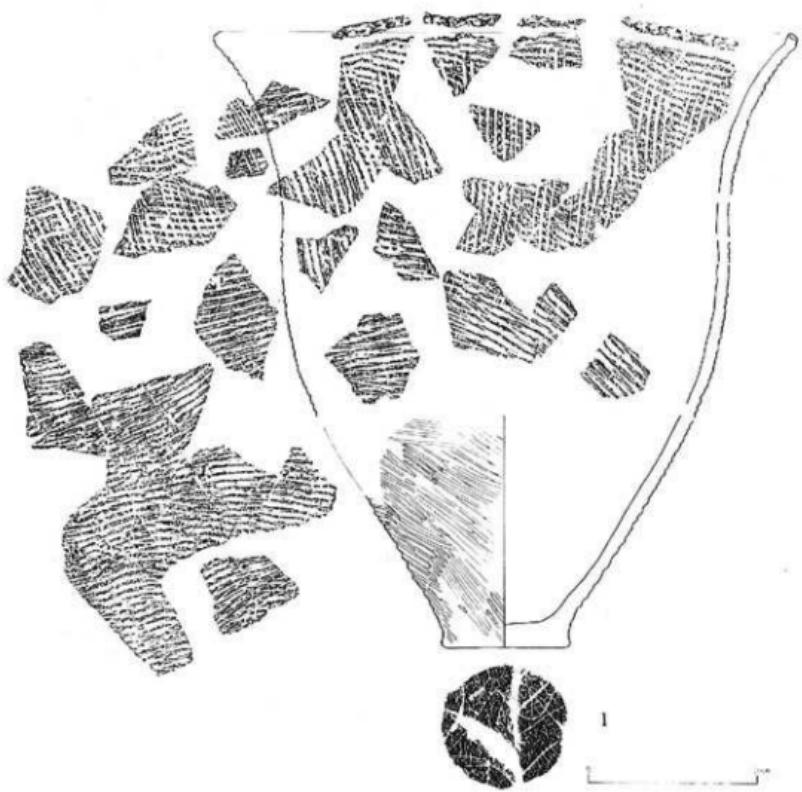
147	要	口緑部	B-6	Ⅲ	表168 外側は被毛の冬態	1-2 表169 外側は被毛の冬態	晉	石英、長石、砂 金雲母、長石、砂 金雲母、長石、砂 金雲母、長石、砂	外 内 外 内 外 内 外 内	單色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色
148	要	口緑部		I	外側は被毛の冬態	表170 外側は被毛の冬態	中性	長石、長石、砂 金雲母、長石、砂 金雲母、長石、砂	外 内 外 内	明褐色 褐色 褐色 褐色
149	要	口緑部 一側薄		表171 外側は被毛の冬態	表172 外側は被毛の冬態	晉	長石、小石	外 内 外 内	暗褐色 褐色 褐色 褐色	
150	要	口緑部		表173 外側は被毛の冬態	表174 外側は被毛の冬態	晉	石英少、長石少 砂少	外 内 外 内	黃灰色 褐色 褐色 褐色	
151	要	口緑部	搅混		表175 外側は被毛の冬態	表176 外側は被毛の冬態	晉	石英、長石少 砂少	外 内	明褐色 褐色
152	要	口緑部	搅混		表177 外側は被毛の冬態	表178 外側は被毛の冬態	中性	石英、長石	外 内 外 内	明褐色 褐色 明褐色 褐色
153	要	口緑部	A-6	Ⅲ	表179 外側は被毛の冬態	表180 外側は被毛の冬態	晉	石英、長石	外 内 外 内	明褐色 褐色 明褐色 褐色
154	要	口緑部		Ⅲ	表181 外側は被毛の冬態	表182 外側は被毛の冬態	晉	石英、長石、砂 金雲母、長石、砂 金雲母、長石、砂	外 内 外 内	明褐色 褐色 明褐色 褐色
155	要	頭部		Ⅲ	横織+羽状織文（L R）		晉	石英、長石 金雲母少	外 内	黃褐色 褐色
156	副	頭部		Ⅲ	3重の横織+2重の羽 状織文	表183 内面無織	晉	石英少、長石	外 内	褐色 褐色

第7表 C地区出土土器觀察表

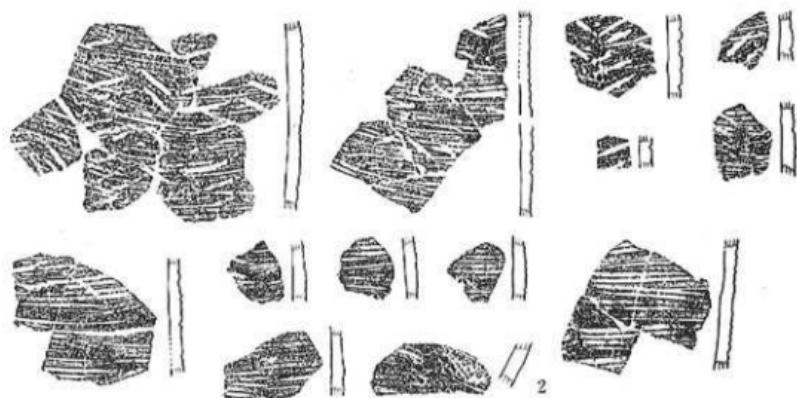
名	類別	部	出土地	層位	形態・文様の特徴	量	成	胎	土	色	調	備考
157	齒	口綫部	C-7	III	旁口縁+内 外曲面に横位の条痕	普	石美・長石 石英	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	1点出土	
158	齒	口綫部	C-7	III	横位+内 外曲面の条痕	普	石英少・長石少 石英・長石・金雲母	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	1点出土	
159	齒	頭部	C-7	III	太日の波状文	普	石美・長石	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
160	齒	頭部	C-8	III	波状文+波状文	普	石美・長石	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
161	齒	頭部	C-7	III	波状文+波状文	普	石美・長石 石英・長石少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
162	齒	頭部		I	横線文+細かい波状文	普	石英少・長石少 石英・長石少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
163	齒	頭部		I	横線文	普	石英少・金雲母微 金雲母	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
164	齒	頭部	C-7	III	報線文+横線文	普	石英少・金雲母微 金雲母	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
165	齒	頭部		I	横線文+報線文	普	石英少・長石少 石英・長石少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
166	齒	刷部	C-8	III	横線文?	やや多	石英少・長石 石英・長石少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
167	齒	刷部		I	報線文+横線文	やや多	石英少・長石 金雲母	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
168	齒	頭部	C-7	III	横線文+横位羽状文	普	石美・長石・少砂	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	1点出土	
169	邊	刷部		I	横線文+縱位羽状文?	普	鈷灰石・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
170	邊	刷部	C-7	III	横線文+複位羽状文	普	石英少・金雲母少 石英・長石・金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
171	邊	刷部	C-8	III	複位羽状文	普	石英少・長石・金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
172	邊	刷部	C-8	III	複位の条痕	普	石美・長石	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
173	鉢	口綫部	C-7	III	直口縁+内 外曲面の複位の条痕	普	石英少・長石・砂少 石英・長石・砂少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
174	鉢	口綫部	C-7	III	直口縁+内 外曲面複位の条痕	普	石英少・長石・砂少 石英・長石・砂少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	1点出土	
175	鉢	口綫部		I	直口縁+内 外曲面複位の条痕	普	石英少・長石・砂少 石英・長石・砂少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
176	鉢	口綫部		I	直口縁+内 外曲面複位の条痕	やや多	石英少・長石 金雲母	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
177	鉢	頭部	C-7	III	外曲面複位の条痕	普	石英少・長石・砂少 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
178	鉢	頭部	C-8	III	外曲面複位の条痕	普	石英少・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
179	鉢	頭部		I	外曲面複位の条痕	普	石英・長石・少砂 石英少・長石	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	外面スス付着	
180	刷	頭部	C-7	III	外曲面複位の条痕	やや多	石英少・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
181	刷	頭部	C-7	III	外曲面複位の条痕	普	鈷灰石・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
182	刷	頭部	C-7	III	外曲面複位の条痕	普	鈷灰石・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	外面スス付着	
183	刷	頭部	C-8	III	外曲面複位の条痕	普	石英少・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
184	刷	頭部	C-7	III	外曲面複位の条痕	普	長石少・左舌耳繋 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	外面スス付着	
185	便	刷部	C-7	III	外曲面複位の条痕の複数	普	長石・砂 石英少・長石・砂少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	外面スス付着	
186	便	刷部	C-7	III	外曲面複位の条痕の複数	やや多	石英少・長石・砂少 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
187	便	刷部	C-7	III	外曲面複位の条痕	普	鈷灰石・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
188				III	外曲面複位の条痕	普	鈷灰石少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
189			C-7	III	外曲面複位の条痕+内 外曲面複位による 複合状	普	石英少・長石少 石英少・長石少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内	1点出土	
190			C-7	III	外曲面複位による 複合状	普	石英少・長石少 石英少・長石少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
191				I	外曲面+三分割	普	石英少・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
192			C-7	III	横線文+三角文?	普	石英少・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		
193			C-7	III	横線文+半周消褪文 〔L・R・L〕・王字の波状文	普	石英少・長石 金雲母少	外 内	黑色 内 内	黑色 内 内		



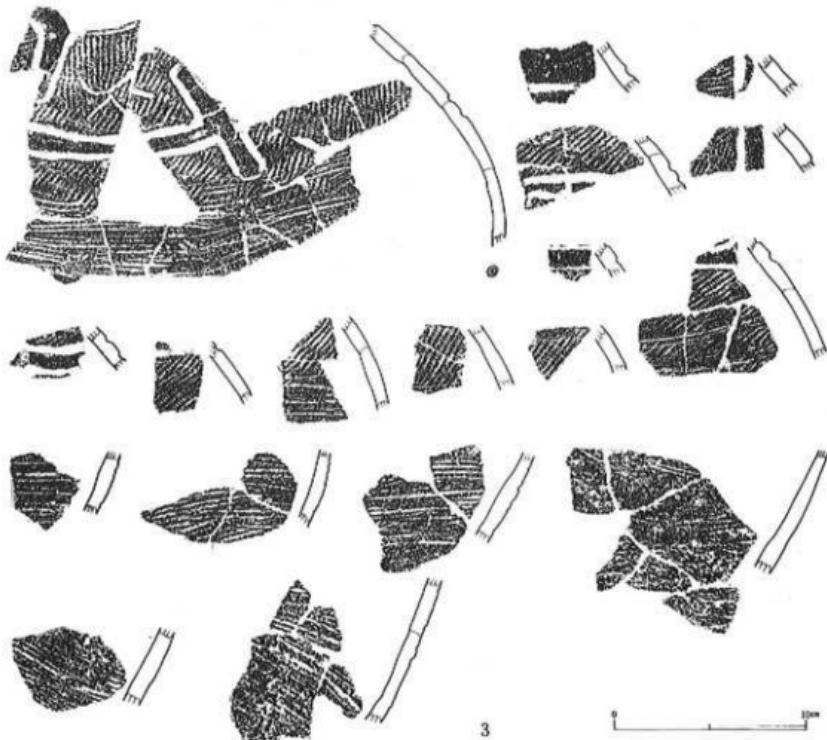
第21図 土壤出土土器



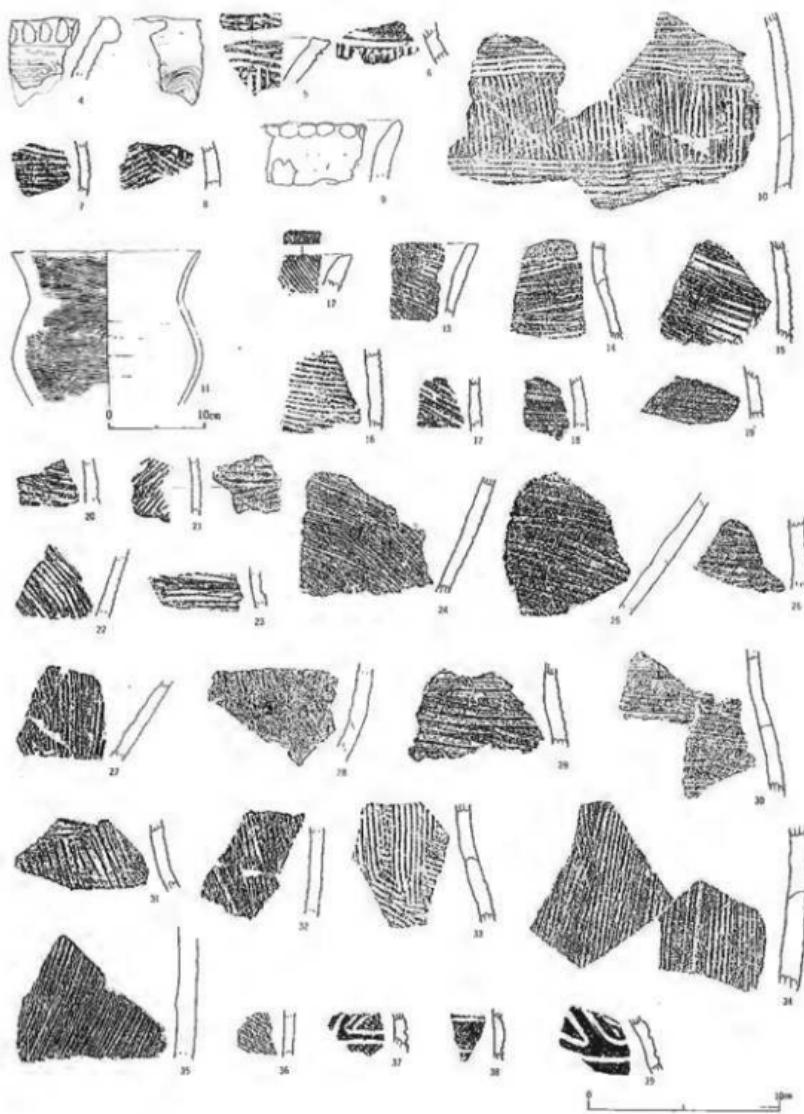
第22図 C-12号遺物集中区 ①



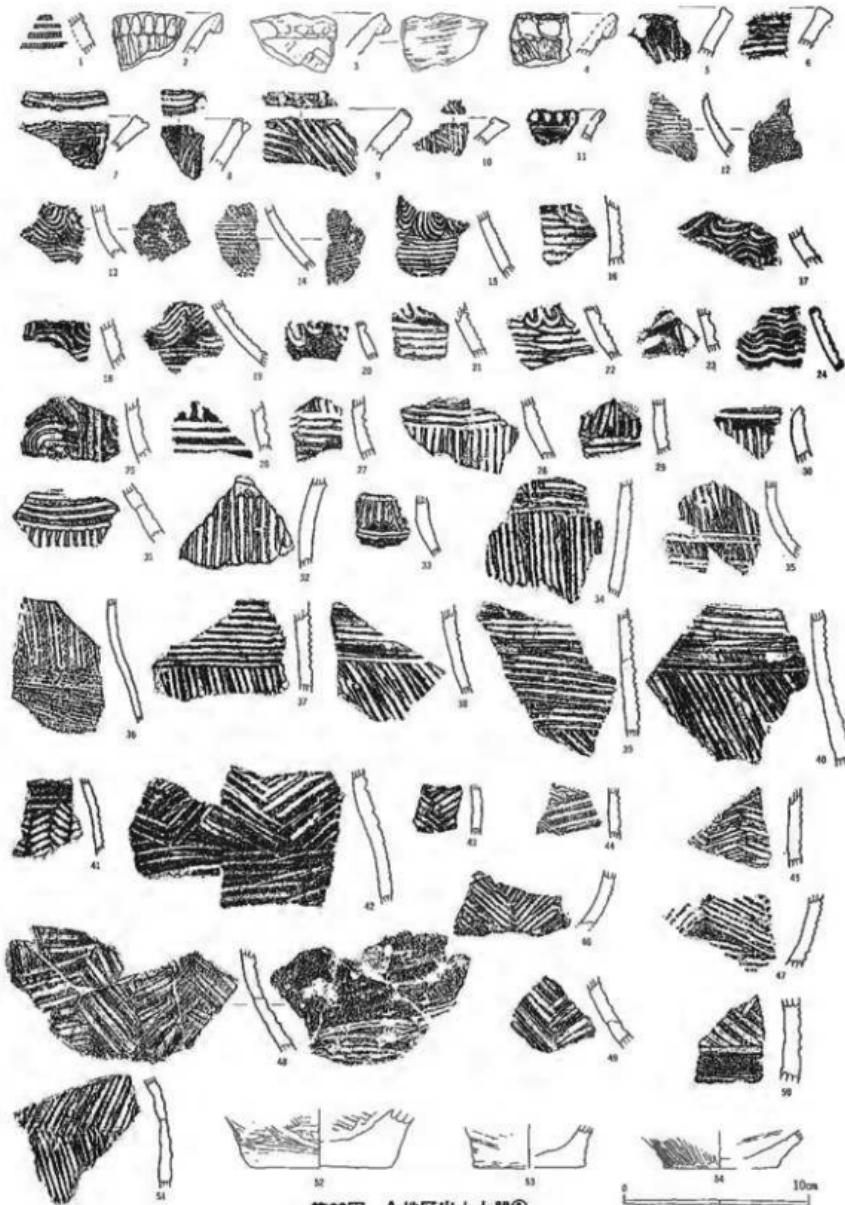
第23図C-12号遺物集中区出土土器②



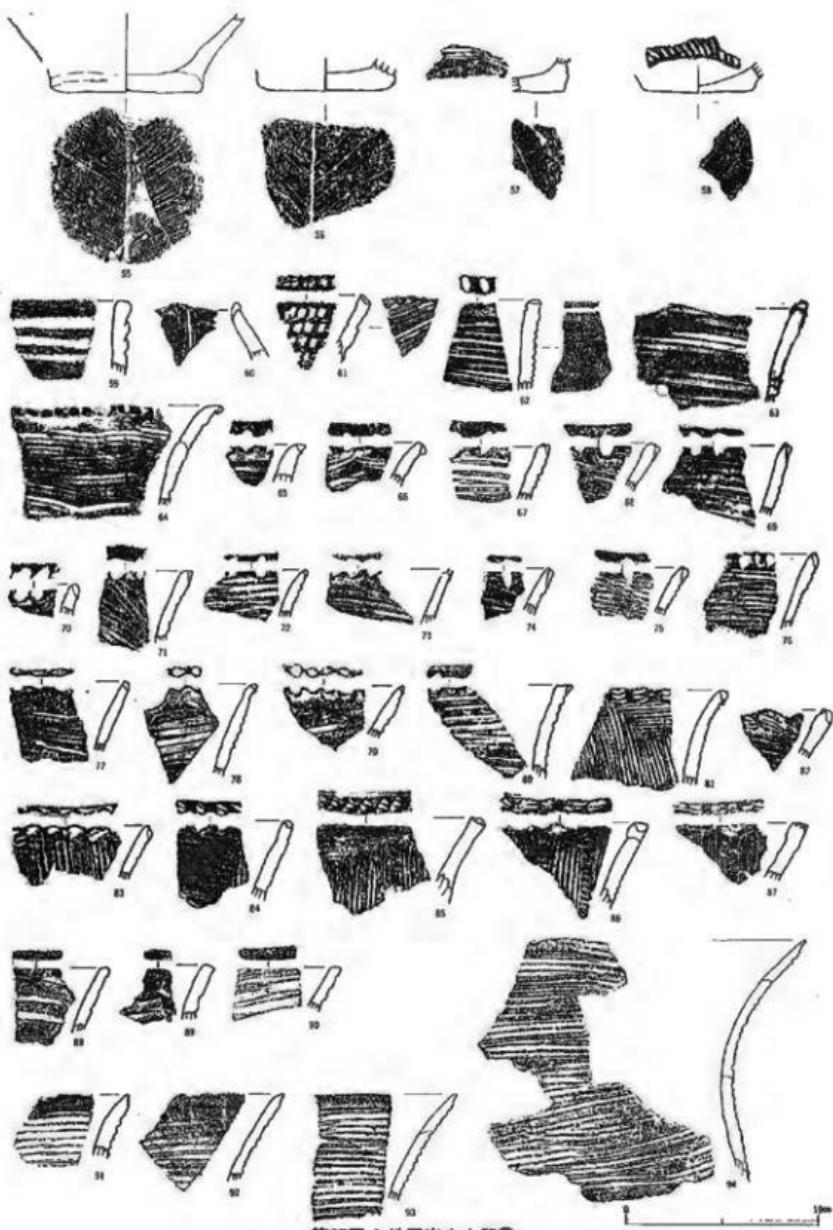
第24図C-12号遺物集中区出土土器③



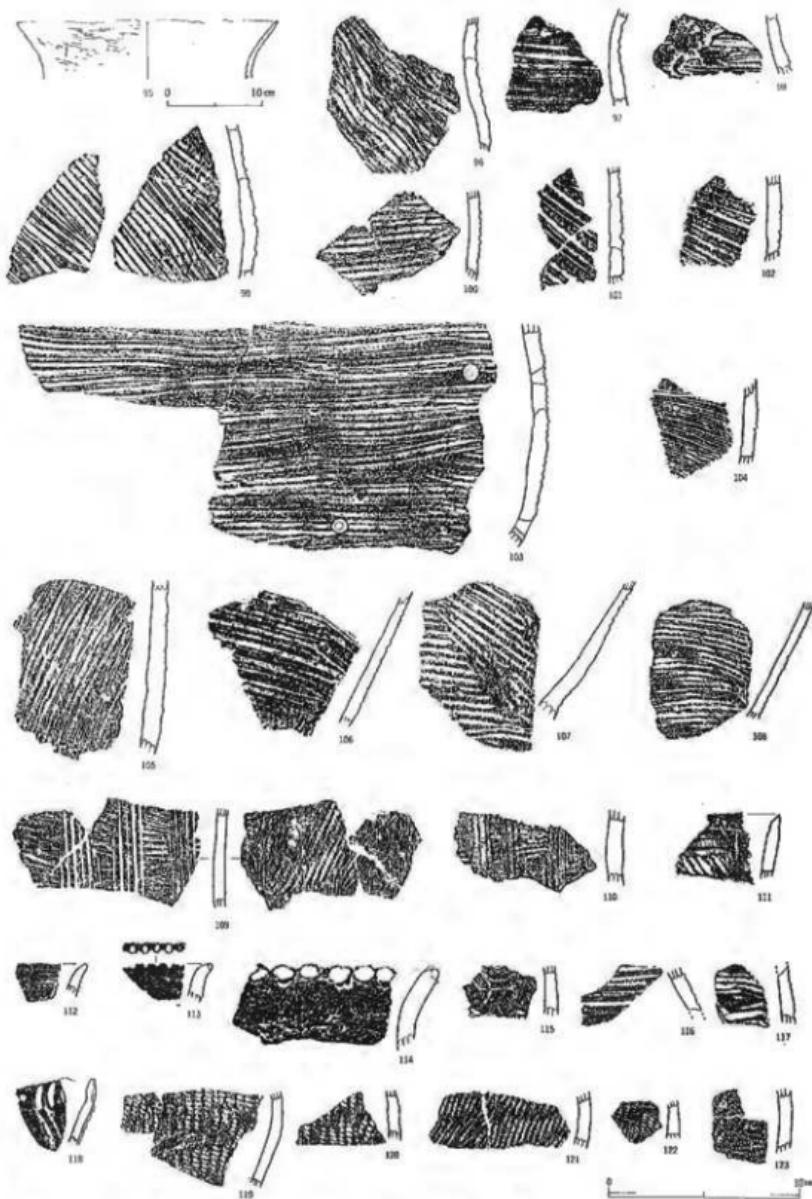
第25図 C-12号遺物集中区出土土器④



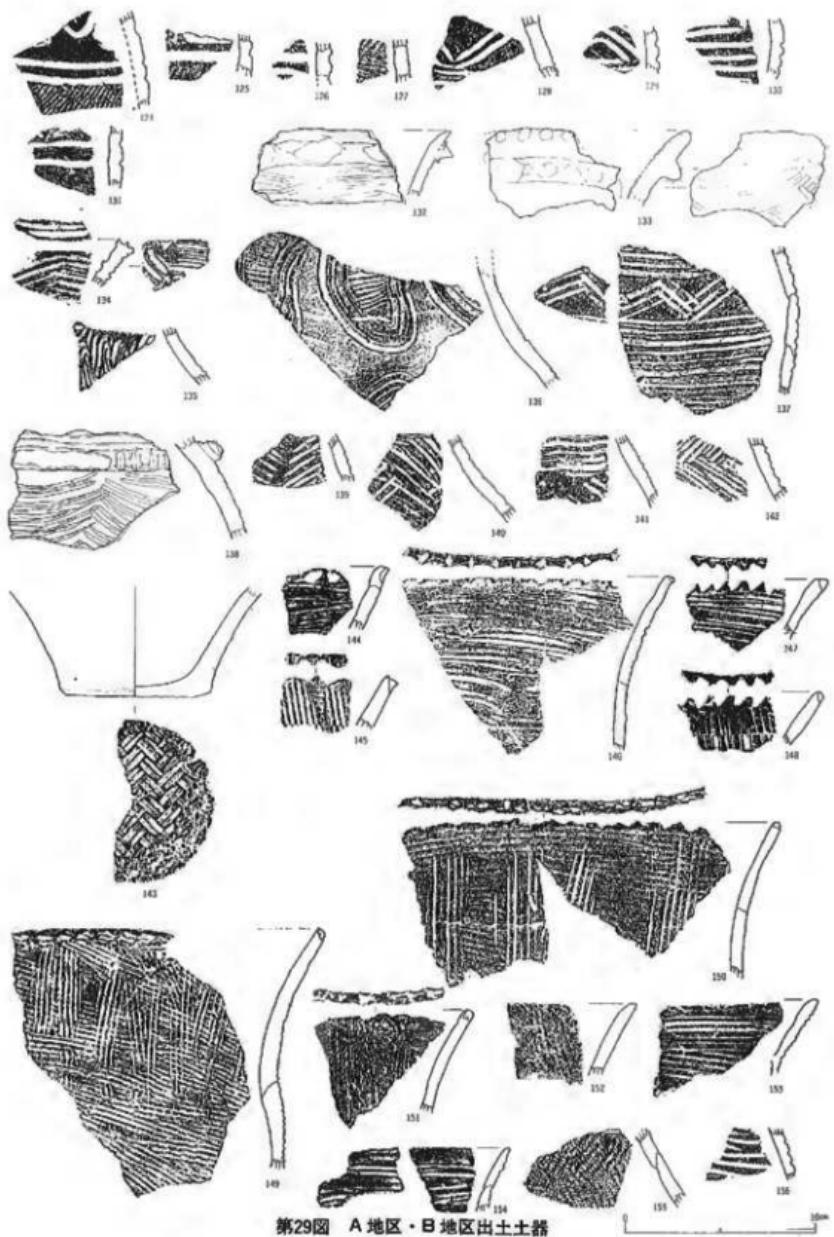
第26図 A地区出土土器①



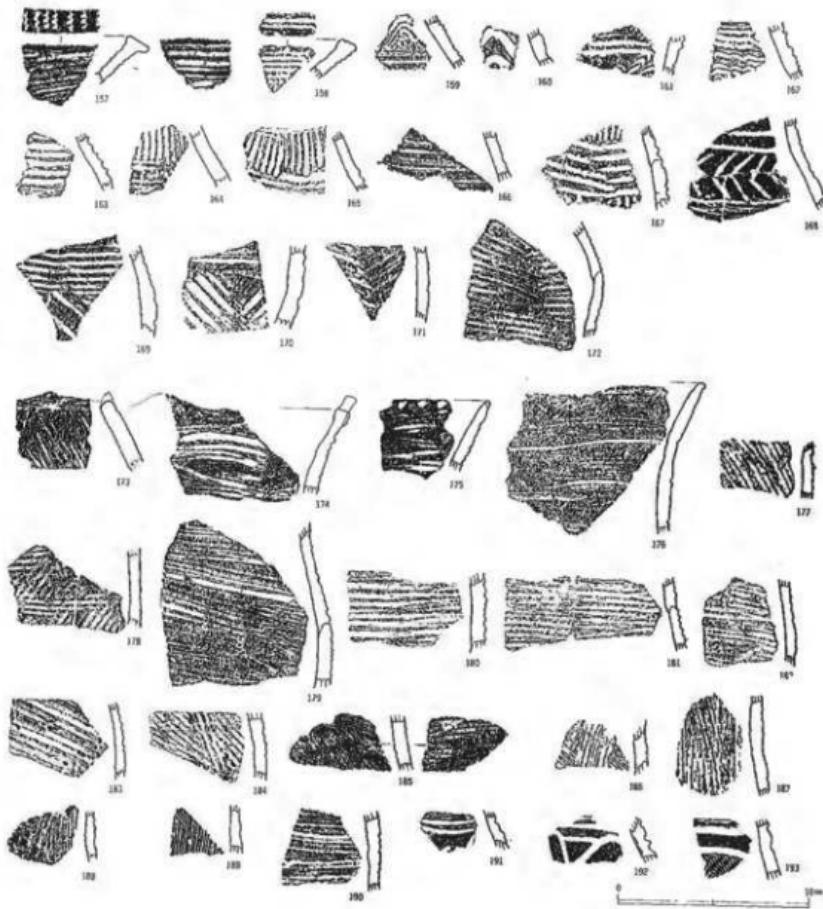
第27圖 A 地區出土土器②



第28図 A地区出土土器③



第29図 A地区・B地区出土土器



第30圖 C 地區出土土器

2 石 器 (第31~34図、図版23~24)

本調査で得られた石器は、磨製石斧、打製石斧、横刃不定形石器、砥石、磨石、石錐等、製品と認められるもの20点、黒曜石剝片58点、頁岩類剝片112点であった(第8表)。この他、A~C地区の所属不明の遺物及び、荻精吾氏表探資料を合わせた数は、磨製石斧と環状石斧が加わり製品と認められるもの86点、黒曜石剝片105点、頁岩類剝片212点、その他14点で、总数417点であった。荻氏の資料については、駿豆考古第6号(小野他1962)や、富士宮市史上卷(植松1971)でその一部が紹介されているが、大部分が未発表資料であり、表探地点が本調査区内のA地区にあたる部分とその周辺の畠に限られることを考えあわせ、本稿ではあえて区別せずに同一図版に組んだ。発掘資料と表探資料の区別は石器計測表(第9、10表)を参照されたい。

磨製石斧 (1~2)

磨製石斧は2点検出された。1・2とも敲打と粗い研磨が施され、断面は梢円形を呈する。乳棒状石斧の基部破片である。

打製石斧 (3~35)

打製石斧は33点を認めた。このうち、完形品は16点であった。3~5は大型の石錐ともいべきもので、いずれも扁平な断面を呈し、長径25cm前後を測る。6~8は長径16~18cm程度の中型のものである。9は基部欠損品ながら両側に着柄用と考えられる抉りこみがあり素材をあまり変形させていない。10、11は破片であるが、大型の石斧に匹敵する刃部を作り出している。12~17、24、25は基部欠損のもの、18~21は刃部欠損資料である。16~31は6~10cm程度の小型のものである。32~35は形状が特異のもので、35は南信濃や南九州にみられる靴形石器と呼ばれるもの(神村1985)に類似する。

環状石斧 (36)

1/4程度の破片であるが本来円形を呈し、周間に刃部を作り出し中央に着柄用の穴を開いたものである。外側面において砥石としての再利用がうかがえる。

磨製石庖丁 (37)

富士宮史上巻(1971植松)に掲載された資料である。半折しているが、現長10.6cm程度を測る。直線刃半月形態のものが、使用と研磨を重ね、刃部を内擣させた可能性が強い。研磨は孔のすぐには及んでいない。

横刃不定形石器 (38~66)

不定形で横型に刃部を作り出している打製石器で、全部で29点を数える。38~54については石庖丁的な形態を示すもので、その形態を多量の磨製石庖丁出土で知れる池上遺跡(1979大阪文化財センター)に求めれば、38は外輪刃半月形態、39~46は長方形態47~50、54は梢円形態、51は杏仁形態、52、53は直線刃半月形態ということになる。39、41、42、44~46は破片資料である。55は三角形の横刃形石器で石匙としてもいいかもしれない。56~66は、剥片の横刃形石

第8表 石器組成表

出土地点	磨製石斧	打製石斧	帶状石斧	磨製石凿	横刃不定形 石	砾 石	磨 石	石 鐵	有茎圓錐片	圓錐石錐片	その他の 石器	合 計
A 1号							1	3	1		5	
A 2号	1							9			10	
A 3号							2	2			4	
A 5号	1						1				2	
B 4号								2			3	
C 7号				1			3				4	
C 8号				1			1				2	
C 10号				1			1				1	
C 12号							8	18			27	
小 計	2			3		1	3	28	21		58	
A-1.2	1						6	2			9	
A-2						1	6	4			11	
A-2.3				1			10	4			15	
A-3						1	5	3			9	
A-4							14	1			15	
A-5							9				3	
A-6	1					2	6	6			15	
A-6.7							1				1	
A-7						1	1	7	3		12	
B-5							1				1	
B-6							1	1			2	
B-7							2	1			3	
C-5								2			2	
C-6							1				1	
C-6.7				1			1				1	
C-7.8							6	1			8	
C-8							2	1			3	
D-11							1				1	
Z-4								1			1	
Z-7								11	7		18	
小 計	2			2		1	6	84	37		132	
高 A地区	1					2	22	8			33	
高 B地区	1			1	1			1			4	
高 C地区	1	1					1	7	3		14	
目 殻 扇	1	27	1	1	22	3	1	70	36	14	176	
小 計	2	30	1	1	24	4	4	100	47	14	227	
合 計	2	34	1	1	29	4	2	13	212	105	14	417

器で、いずれも5~10cm程度の小型のものである。

砾石 (67~70)

砾石は4点検出された。67は30cm弱の大型のものである。扁平で片面だけを砥面として使用している。砾石を固定しての使用が考えられる。68~70は小型のものである。68は扁平な菱形状のもので、全側面を砥石としている。69、70は棒状のもので一側面を砥石としている。70は敲石として利用も考えられる。対象物を固定しての使用が考えられる。なお、富士宮史上巻において写真掲載された大型の資料については、その後散逸してしまったのか荻氏表採資料の中に見えなかった。

磨石 (71、72)

磨石は2点が検出された。71は長楕円形でふくらみをもち、緻密に研磨されている。72は破片資料である。

石鐵 (73~85)

石鐵は13点が検出された。73~75は無茎で基部が直線的なもの、77~83は無茎で基部に抉入のあるもの、84は有茎で基部に抉入のあるもの、85は基部が緩やかに尖るものに分類される。76については基部欠損のためその形状を示さない。85については側縁に段をもつものとして捉えられる。83は磨製石鐵の未製品と考えられる。

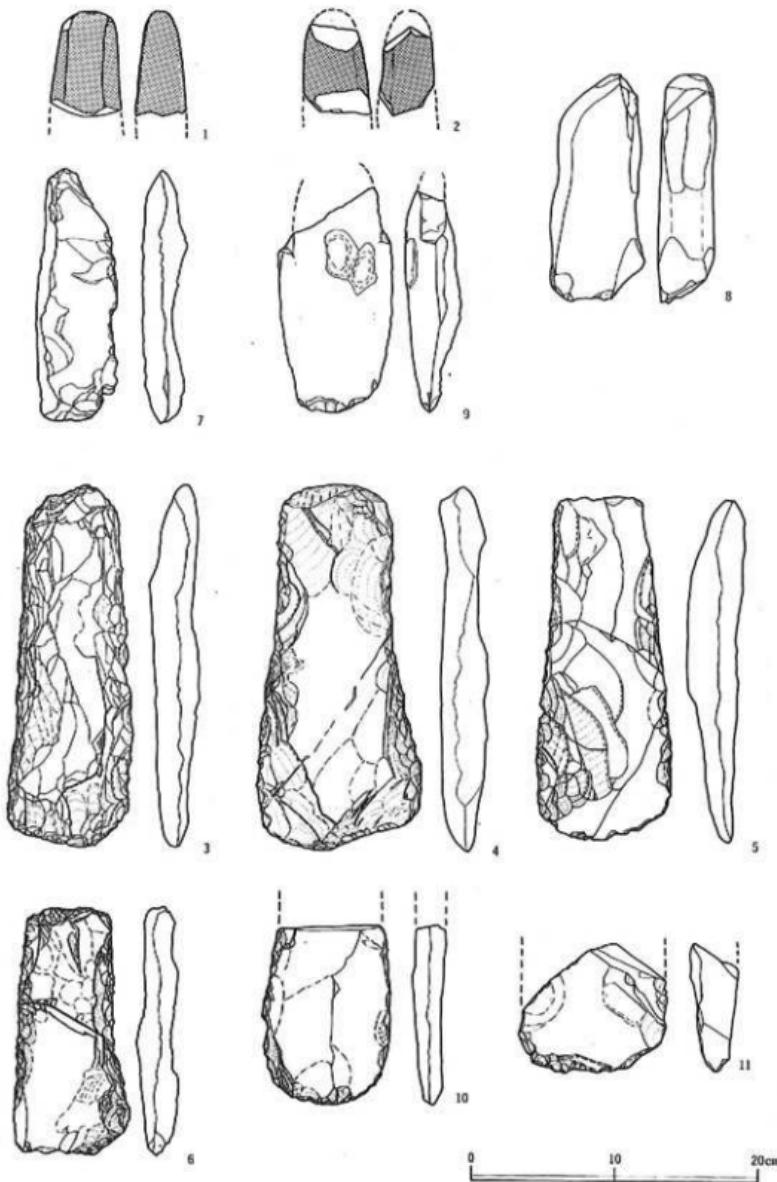
(渡井)

第9表 石器計測表①

番号	石器名	最大長(mm)	最大巾(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	出土地点	遺存状況
1	磨製石斧	(75.7)	(49.6)	(34.1)	(191)	砂質頁岩	荻氏表採	△～△存
2	"	(62.5)	(44.1)	(38.1)	(176)	"	C地区表採	△～△存
3	打製石斧	252.0	84.6	32.3	884	"	A-2列,F	完型
4	"	253.8	112.9	32.0	998	"	A-6列,F	"
5	"	239.0	91.9	34.3	901	"	荻氏表採	"
6	"	173.0	81.4	23.8	456	"	"	"
7	"	178.4	55.6	30.9	304	頁岩	"	"
8	"	159.6	66.1	39.0	686	玄武岩	"	"
9	"	(157.2)	79.6	41.4	(543)	砂岩	"	一部欠
10	"	(124.1)	88.3	21.6	(354)	砂質頁岩	"	△存?
11	"	(88.2)	(108.8)	(33.9)	(343)	"	"	△存?
12	"	(126.8)	(72.7)	(29.7)	(252)	"	"	一部欠
13	"	(101.7)	72.8	(31.8)	(271)	"	"	△～△存
14	"	(83.1)	81.3	(30.5)	(258)	"	"	"
15	"	(86.3)	(63.7)	(10.4)	(82)	粘板岩	"	"
16	"	(76.6)	(64.7)	(21.0)	(130)	安山岩	A-5号土壤	"
17	"	(92.3)	(84.0)	(13.1)	(123)	砂質頁岩	B地区表採	"
18	"	(101.9)	(72.9)	(35.0)	(304)	"	荻氏表採	"
19	"	(64.6)	(80.1)	(41.2)	(200)	"	"	△～△存
20	"	(100.2)	(79.1)	(27.4)	(270)	"	A地区表採	"
21	"	(79.8)	(74.3)	(22.0)	(159)	"	荻氏表採	"
22	"	(72.2)	(76.2)	(26.7)	(215)	"	"	"
23	"	92.1	70.3	29.4	(248)	砂岩	"	"
24	"	(59.4)	(67.5)	(19.0)	(88)	砂質頁岩	"	"
25	"	(63.4)	(63.5)	(14.6)	(76)	"	"	"
26	"	100.8	44.0	13.5	92	"	C地区表採	完型
27	"	62.0	30.9	8.5	24	砂岩	荻氏表採	"
28	"	64.9	42.4	12.0	42	頁岩	"	"
29	"	70.0	32.3	13.6	46	砂岩	"	"
30	"	72.0	61.2	22.0	115	砂質頁岩	"	"
31	"	80.8	47.9	13.4	55	粘板岩	"	"
32	"	96.0	43.4	17.9	92	"	"	"
33	"	97.4	47.1	21.5	136	チャート	"	"
34	"	96.2	54.7	16.1	93	砂質頁岩	"	"
35	"	106.8	81.4	18.6	130	"	"	"
36	環狀石斧	—	—	—	—	粘板岩	"	"
37	磨製石庖丁	(106.3)	(23.8)	6.2	(24)	綠泥片岩	"	△存
38	撲刃石器	85.2	54.5	11.3	67	砂岩	"	完型
39	足形石器	66.8	52.1	11.5	51	砂質頁岩	C地区表採	△存?
40	"	90.1	45.1	9.8	62	"	荻氏表採	完型
41	"	62.6	53.4	9.0	32	頁岩	"	△存?
42	"	58.9	43.9	9.9	27	粘板岩	"	△～△存?
43	"	101.0	35.5	9.9	50	"	"	完型

第10表 石器計測表(2)

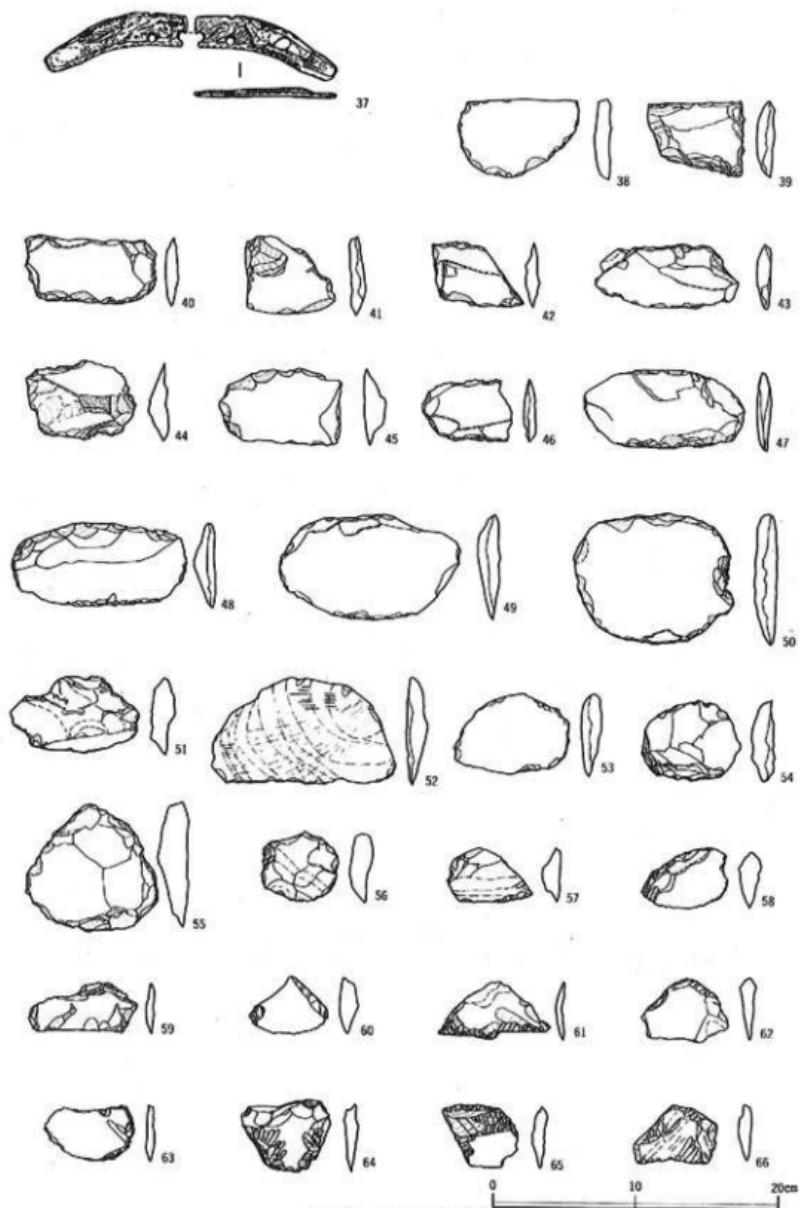
番号	石器名	最大長(mm)	最大巾(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	出土地点	遺存状況
44	横刃不 定形石器	75.3	54.9	12.3	64	頁岩	荻氏表探	完型
45	"	82.7	51.2	12.2	70	砂質頁岩	"	少存?
46	"	61.2	41.9	7.4	25	"	"	少存?
47	"	113.3	53.0	9.0	77	"	"	完型
48	"	121.4	58.1	14.3	126	玄武岩	C10号土壤	"
49	"	128.8	73.1	14.1	132	砂岩	C-7判,f	"
50	"	110.3	89.9	13.3	190	砂質頁岩	A-2判,f	"
51	"	90.1	53.9	14.8	65	"	荻氏表探	"
52	"	129.9	74.0	14.6	148	頁岩	"	"
53	"	78.9	55.8	13.2	72	チャート	"	"
54	"	69.2	55.3	15.2	56	砂質頁岩	"	"
55	"	93.1	88.7	19.6	177	"	"	"
56	"	53.9	49.2	10.5	34	頁岩	"	"
57	"	51.2	41.8	11.2	22	砂質頁岩	C7号土器棺	"
58	"	62.1	38.1	13.6	29	"	C-8判,f	"
59	"	74.9	33.2	6.3	17	"	B地区表探	"
60	"	52.8	39.5	11.2	23	"	荻氏表探	"
61	"	77.6	39.3	5.5	16	"	"	"
62	"	57.3	45.7	9.5	21	"	"	"
63	"	62.3	35.8	5.1	15	"	"	"
64	"	60.5	47.4	10.5	30	"	"	"
65	"	41.0	41.9	11.5	25	"	"	"
66	"	61.3	38.9	9.4	23	"	"	"
67	砥石	278.0	212.0	48.0	4,250	安山岩系	"	"
68	"	69.6	31.0	9.7	29	チャート	"	"
69	"	79.3	26.4	18.8	51	"	B地区表探	"
70	"	76.2	18.8	12.5	25	頁岩	荻氏表探	"
71	磨石	106.8	99.3	70.8	1,295	砂岩	B6号土壤	"
72	"	(49.7)	(46.0)	(46.4)	(176)	"	A-7判,f	X~K存
73	石鐵	27.8	15.1	7.3	2.9	黒曜石	荻氏表探	"
74	"	25.1	14.8	4.0	1.2	チャート	A-2判,f	一部欠
75	"	(16.5)	20.7	2.1	(0.75)	頁岩	A地区表探	K存
76	"	(35.4)	(16.3)	(3.5)	(2.0)	"	A-6判,f	K存
77	"	(33.2)	11.8	3.1	(1.3)	"	D-11判,f	先端部欠
78	"	22.0	(11.6)	2.9	(0.6)	"	A5号土壤	"
79	"	(15.5)	11.9	2.4	(0.5)	頁岩	C地区表探	"
80	"	(10.8)	11.4	2.7	(0.35)	黒曜石	A-7判,f	"
81	"	(15.8)	(12.8)	2.5	(0.5)	頁岩	A1号土壤	基部片欠
82	"	31.0	21.5	3.3	2.3	"	A-6判,f	完型
83	"	(27.8)	30.1	1.7	(1.8)	粘板岩	A地区表探	先端部欠
84	"	(14.9)	14.5	2.9	(0.5)	黒曜石	C12号土壤	"
85	"	24.8	16.7	3.5	1.3	頁岩	A-3判,f	完型



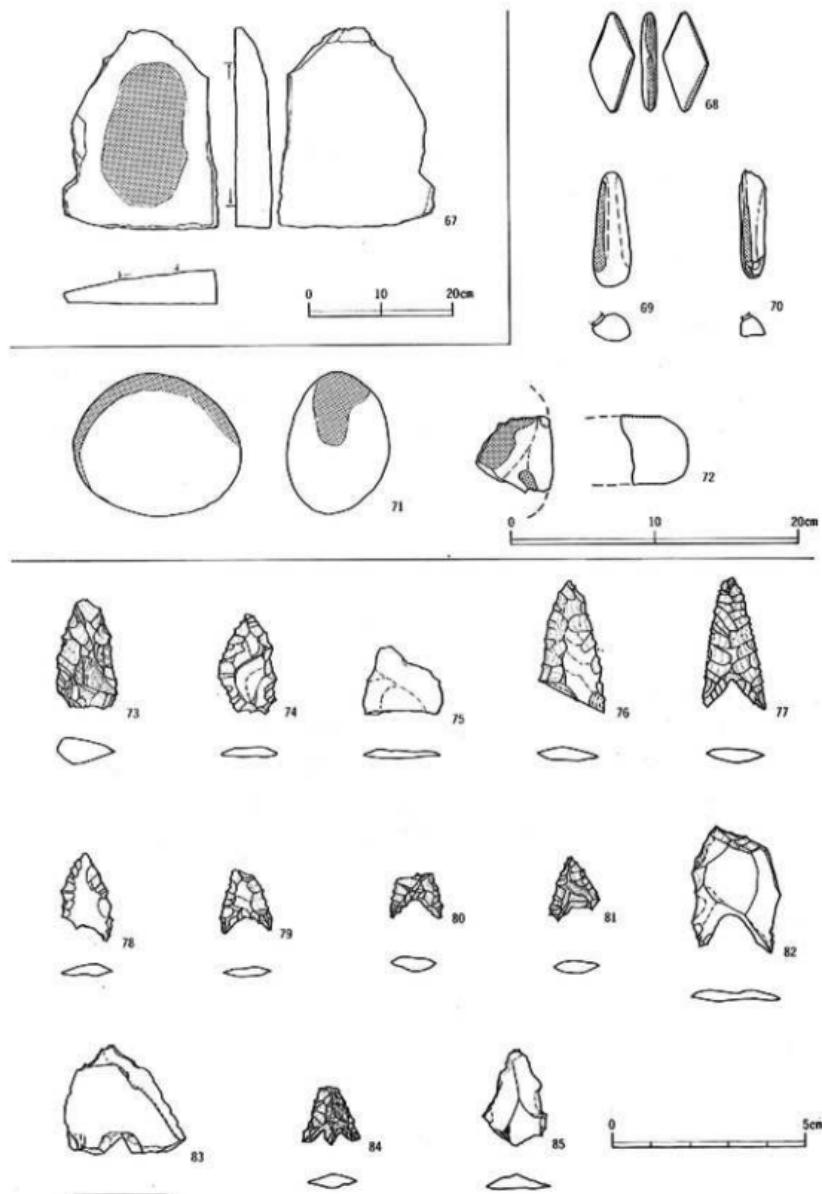
第31図 石器実測図①



第32図 石器実測図②



第33図 石器実測図(3)



第34図 石器実測図④

3. その他（第35図、図版22）

荻氏表採資料の中に中世以降のカワラケが見られるので紹介する。

1は、口径8.6cm、底径4.8cm、器高2.3cmを計るもので、厚手の底部からやや内擣氣味に立ち上がるるものである。底部には回転糸切りの痕が見られる。色調は橙色で、胎土は非常にきめの細かいものである。焼成はやや軟質である。2は、底径7.8cmを計る底部の破片であるが正確な器種等は不明なものである。平底の底部から内擣しながら胴部へ展開する器形を呈する。内面の底部にはロクロ成形痕を顕著に残している。また、底部外面には回転糸切りの痕がみられる。色調は褐色で、胎土は緻密で少量の砂粒を含む。焼成は硬質である。

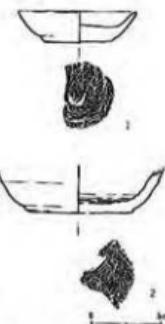
1は、その器形より15世紀前後の所産かと考えられる。今回の調査において当該期の遺構の検出は見ていないが、市内元城町付近に位置していたとされる大宮城との関連を考えると非常に興味深い資料と言える。

上記の資料のほかに近世陶器片が少量確認されている。

・C12号遺物集中区 No. 3 土器にみられる特異な文様について（図版22、第24図、図版11）

図版22でみられる文様（絵画？）は、壺形土器の胴部上半にL Rの縦文が施文された後に棒状工具によって描かれたものである。大きさは横4.0cm縦3.0cmを測り、上方に向かって弯曲する線と下方に向かって伸びる3本の直線によって構成されている。文様は非常に抽象的なもので積極的に絵画とは認め難いが、絵画とすれば簡略化された四足獸になる可能性が考えられる。

この文様の描かれている壺形土器は、関東（北関東）地方にその系譜が求められるものであり、弥生時代中期初頭期に比定されるものである。関東～東海地方において当該期のこのような資料を管見では見い出せなくその様相については不明確である。文様の一部として捉えるか、絵画あるいは記号として捉えるか、今後周辺を中心とした地域の資料の増加を待って検討していきたい。



第35図 その他の遺物

(山上)

V 調査総括

1 洋沢遺跡の土器について

洋沢遺跡は、かって多くの報告書や論文で丸子式土器の標準的な資料であるとして扱われてきたが、今回の調査で、櫻玉式（大洞A式）から丸子式併行期まで続く複合遺跡であることが判明した。また、丸子式土器の標式遺跡である静岡市丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡とは、第Ⅲ期（丸子式併行期）において共通する部分が多く認められるものの相違する部分も多く認められた。それは、丸子式土器と相関関係を持ちながら地域差を表出していることを物語っていることも判明した。

本遺跡で設定した第Ⅲ期は洋沢遺跡の主体を占める時期で遺物の絶対量も多い。静岡県東部地方において当該期の遺跡の発見例はまだ少なく、資料の蓄積が充分なされているわけではない。そのため丸子式土器の内容については不明な点が多く残されている。洋沢遺跡の資料は静岡県東部地方の弥生時代中期初頭の様相がある程度把握できるものであると考えている。静岡市に所在する丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡の資料を基準としている丸子式土器の名を安易に東部地方全ての地域で使うことは地域色の表出を弱めてしまうことになり、また、それらは丸子式土器の名前ばかりが一人歩きし、その内容についての詳細な研究がなされないような状況を生み出す恐れがある。本遺跡における分類でも、多く丸子式土器と共通する要素が見られるが、壺口縁Ⅱd-2、壺口縁Ⅲとそれに関連する壺C、更に壺C、壺D：といった相違点も多く見られる。系統が不明確な壺口縁Ⅱd-2以外の、中部高地の関連が考えられる壺C（壺口縁Ⅲ）、北関東地方との関連が考えられる壺C、壺D：に、水神平式土器の影響下に成立した丸子式土器が融合した状況を洋沢遺跡では捉えることができる。洋沢遺跡での遺物出土状況はけっして良好なものとは言えないが、上記のことから仮称「洋沢式土器」を提唱したい。そしてその時期を丸子式併行期とし、分布範囲は、調査例のない伊豆半島西海岸部を除いた静岡県東部地方、堂山遺跡の所在する神奈川県西部地方の山間部、伊豆諸島の一部（大島、新島）、山梨県の富士五湖周辺及び桂川流域辺りまでをその広がりとして捉えたい。

第Ⅰ期、第Ⅱ期においては、別所遺跡を含めて富士川町山王遺跡との連続性が認められたことが重要な成果と言える。現在、富士市内に当該期の遺跡の発見が見られないという事実を考え合わせ、その連続性は、山王遺跡の人々が富士川を北上し、さらに沼久保谷を通り、安居山の別所遺跡や淀師の洋沢遺跡へ移動したことが想定できるものである。山王遺跡付近には、沖積地が少なく、水田の可耕地は非常に限定されたものであつただろうと考えられる。さらに富士川対岸の現在の富士市松岡付近にそれを求めた場合でも、江戸時代前半に古郡孫太夫重高らによって築かれた雁堤の存在からもわかるように安定した沖積地とは言い難く、また、山王遺跡の段階に高度な灌漑技術をもっていたとも考え難い。まだ山王遺跡の段階では狩猟、採集へ

の依存度が高く、遠賀川系土器の出土に見られるように弥生文化の波及が認められるものの前段階の文化的伝統を強く残しているように思われる。山王遺跡から別所遺跡、渋沢遺跡への移動は、安定した沖積地への移動であり、生業の大きな転換を示すものであろうと考えられる。

再三記述しているように、渋沢遺跡の出土資料は層位的に分層できるものではなく、また第13図-1, 2以外共併関係のわかるものもない。渋沢遺跡の資料を3時期に分けたものの安定した時代区分と言い難いが、櫻王式から丸子式の編年がまだ体系づけられていない現在、渋沢遺跡の資料の重要性を考えその提示に努め、土器の特徴や地域性が少しでも表わせれば充分であると考え試案として時期区分を行ってみた。今後、周辺地域の当該期の資料とその研究の蓄積が行われて弥生文化波及期の土器編年の体系化がなされることを期待したい。

2 土器棺墓について

土器棺墓の分布（第36図）

条痕文土器の分布圏における土器棺墓は、三河地方を主体として浜名湖西岸までの地域で数多く確認されている（斎藤1978、湖西市教育委員会1980）。丸子式土器の分布範囲では浜松市半田山遺跡、掛川市原川遺跡に見られる。半田山遺跡は浜松市半田町大地他に所在する古墳時代後期のA～Hまでの小支群にグルーピングされる群集墳を中心とした遺跡群で、C支群を中心とした地区に弥生時代中期前葉の造構が確認されている。造構に関する報告書が未刊であるため詳細な内容は不明であるが、土器棺墓、土壙等が存在するようである。遺物が公表されている1号土器棺は、完型の壺形土器と小破片の壺形土器により構成されている（浜松市教育委員会1986）。原川遺跡は掛川市領家字原川に所在し、原野谷川、逆川、垂木川などにより形成された沖積平野上に立地している。弥生時代中期前葉の掘立柱建物跡7棟、土器棺墓6基、土壙1基、性格不明の土坑7基、溝状造構などが確認されている。各造構の詳細なデーターは本報告が刊行されていないので不明であるが、土器棺墓は、深鉢（甕）形土器の合せ口のもの、深鉢（甕）形土器を大きく何分割かしてそれを土壙の上からかぶせるもの（単棺）、破片化した深鉢（甕）形土器を身（棺の底部）と蓋にするもの（単棺）、破片化した壺形土器を身（棺の底部）とし同様の深鉢（甕）形土器を蓋にするものなど埋葬の方法にバラエティーが見られ、特異な様相を呈している（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所1984～1987）。

静岡県東部地方においては、富士宮市渋沢遺跡が初例であり、現在のところ他に類例は見られない。

土器棺墓の形態

土器棺墓の形態を静岡県内の諸例を中心として分類する。土器棺墓の分類はその埋葬法の分類として湖西市教育委員会1980の報告文中で試みられており、その成果を引用して考えてみたい。

遺体を埋葬する際の棺（土器棺）の数によって大きく2つに分類される。

I類、单葬

II類、複葬（2個体以上の土器棺によって構成される。）

II類の明確な類例は県内において見い出せない。

I類は、土器棺による器種構成によって更に3つに分けられる。

I-A 壺棺

I-B 壺館

I-C 壺+壺棺

上記のI-A～I-Cは埋葬の形態により更に細分される。

I-A a 壺形土器の單棺。浜松市半田山遺跡1号土器棺、湖西市伊賀谷遺跡第1号土壙の類例がこのタイプになろうか。三河地方には普遍的に見られるものである。また、県内においては弥生時代中期中葉以降盛行するタイプである。

I-A b 身蓋とも壺形土器。身となる壺形土器に別の個体の破片の壺形土器を蓋として被せるものが多い。時期的には新しくなるが、湖西市横枕遺跡第3号土器棺のように、身の壺形土器の口縁部に別の小型壺形土器を、入れ子状にして蓋としているものもある。

I-B a 壺形土器の單棺。縄文時代晩期にその系譜が辿れるタイプで、渋沢遺跡C-8号土器棺墓、掛川市原川遺跡S F 1101、S F 702、S F 1102、などがその類例である。I-B a は渋沢遺跡C-8号土器棺墓のように底部を欠損した完型の壺形土器を使うものや原川遺跡S F 1101のように破片化した同一個体の壺形土器を遺体（遺骨）に対してサンドウイッチ状に包み込むものなどバラエティーが認められ、さらに細分が可能である。

I-B b 身蓋とも壺形土器。基本的には2個体の壺形土器を身と蓋にしているもので、掛川市原川遺跡S F 806のように同大、同形の壺形土器の合せ口のものもこのタイプと考える。縄文時代晩期にその系譜が辿れる。

I-C 身を壺形土器、蓋を壺形土器で構成されるもので、蓋は破片化した壺形土器が使われる。I-Cはこのタイプしか認められないようである。渋沢遺跡C-7号土器棺墓、掛川市原川遺跡S F 1105などがその類例になるが、原川遺跡S F 1105は若干特異な形態を示し、破片化した壺形土器を身にし、破片化した壺形土器を蓋としている。I-Cは後続する時期に盛行するもので浜名湖周辺に散見されるようになる。

渋沢遺跡の類例はC-7号土器棺墓がI-Cタイプ、C-8号土器棺墓がI-B aタイプになる。また、市史掲載資料は、II類、あるいはI-A類、I-C類になる可能性が強い壺形土器が多く含まれるようであるが、II類の類例が当地方において見られない現在、I-A類、I-C類と捉えておいた方が妥当なのかもしれない。

土器棺墓は雄踏町長者平遺跡の合口壺棺のようにその系譜が縄文時代晩期に辿れるものであ

るが、弥生時代中期前葉になると壺形土器から壺形土器への器種の交代が行われる。浜沢遺跡や原川遺跡のように前時代の遺風を残し壺形土器による土器棺墓を採用している類例も見られるが三河地方を中心とした条痕土器の主体的に分布する地域では壺棺への転換がスムーズに行われたようである。つまり縄文時代晩期末葉から弥生時代中期前葉は、土器棺墓が、I-B類からI-A類、I-C類



第36図 浜沢遺跡周辺の土器棺墓

へ転換した時期であると捉えることができる。浜沢遺跡においては、C-8号土器棺墓からC-7号土器棺墓への変化として表出している。このことについて林原利明氏は、壺形土器を穀糧を主とする穀物の貯蔵をその機能と規定し、穀物を再生産する穀糧を貯蔵する機能を有する壺形土器に当時の人々は、再生産願望を込めて遺骨を埋納したのではないかと考え、農耕文化との密接な関係を指摘されて、土器棺の壺形土器への転換を捉えられている（林原1985）。林原氏は関東地方を中心とした再葬墓の性格として上記の論旨を述べられているが、それは、東海地方の墓制にも適応できるものであると考えられる。条痕土器の文化圏においても弥生時代中期前葉では、三河地方～天竜川まではI-A類、I-C類がほとんどであるのに対し天竜川～駿河地方ではI-B類、I-C類が混在する状況を呈している。それは農耕文化の安定度の差に起因しているもので、西日本から伝播した農耕文化の定着の差が墓制に表われた結果と捉えられ、天竜川周辺を境に東側の地域では墓制の上で古い様相が弥生時代中期前葉まで遺存する状況が強く看取される。

当地方の土器棺墓について以上のように大まかではあるがその分類と地域性について若干の考察を行ってみたが、実際は再三指摘しているようにその類例が少なく、まだ考察を加える段階ではないのかもしれないのが現状である。今後、資料の増加を待って土器棺墓の体系的な分類と再葬墓としての墓制を含めた葬送儀礼の問題、さらに、それに伴う社会構造の問題などを検討していく必要がある。

(山上)

3 石器について

浜沢遺跡の遺物は基本層序第Ⅲ・Ⅳ層中より出土するが、両層の分化について、時期差を認め得ないことは遺物の出土状況（第11・12図）により明らかである。よって、石器も出土土器と同様、縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭（丸子式）の一括遺物として把握でき得るもの

のと考え、石器についての二、三の問題点を整理してみたい。

石器組成について

本遺跡出土の石器は総数85点であった。その内訳をみると、磨製石斧2点(2%)、打製石斧35点(41%)、環状石斧1点(1%)、磨製石庖丁1点(1%)、横刃不定形石器29点(34%)、砥石4点(4%)、磨石2点(2%)、石錐13点(15%)である。この数字は、本遺跡がまさしく、縄文時代から弥生時代への移行期にあることを如実に物語っているといえる。磨製石庖丁の出現は弥生時代の到来を確実に捉えつつも、一方では当方の縄文時代晚期の代表的な遺跡である富士川町山王遺跡や、清水市天王山遺跡出土の石器群の構成とよく似て、縄文時代的な様相を強く残すものである。磨製石庖丁を除けば、弥生時代を示す重要な指標の一つである大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧等の所謂大陸系の磨製石器の出土はみられず、大型の打製石斧(石錐)を含む打製石斧や打製石錐の出土量が他に比して多いという傾向は地域のみならず東海地方の縄文時代晚期末葉遺跡の様相に共通するものである。このことは縄文時代晚期末葉の本地方の様相が、弥生時代中期初頭を主体とする本遺跡とは立地条件等においてほとんど差のない状況を想定させるものである。

磨製石庖丁について

本遺跡出土石器中特筆すべきは磨製石庖丁である。昭和40年前後に荻野吾氏により、烟の掘削中に発見されたものである。はじめにその形状をみると、縦泥片岩製の半折資料であるが、二つの孔の中心を石庖丁の中心と考えると、巾18cm前後を測る。現状は内刃刀鎌型形態を示すが、使用と再研磨による相当の形状変化が考えられ、変形以前の原形態は直線刃半月形態のものと推定される。つぎにその分布をみると、縄文時代晚期後半から弥生時代中期前葉にかけての遺跡では、東海地方から西関東にかけてはほとんど類例をみず、中部高地の長野市伊勢宮遺跡や諏訪市荒神山遺跡等に類例を求めることができる(1983北武藏古代文化研究会)。この他に、静岡県下で時期が異なるものとして、磐田市御殿、二宮遺跡の弥生時代後期の外刃半月形態の磨製石庖丁が出土している(1981磐田市教育委員会)。

横刃不定形石器について

本遺跡出土石器中組成比率34%を占める横刃不定形石器については、打製の石庖丁、穂摘具としての機能を考えている。縄文時代晚期末葉から弥生時代前葉にかけての遺跡についてみれば、打製の石庖丁や、それに類すると考えられる横刃型石器については、東海地方東部地域においてはほとんどみられず、東三河地方や中部高地地方に多数出土している(1985愛知考古学談話会)。その他、小型の横刃型剥片石器については今後の資料の増加を待ちたい。(渡井)

4 おわりに

渋沢遺跡発掘調査報告書の刊行にあたり、諸般の事情からそれが大幅に遅れてしまったことを、まずもってお詫びする次第である。その間に、時代は昭和から平成へと静かに、そして厳かに移り進み、両時代にまたがる記録保存の措置となってしまったが、渋沢遺跡が存在したであろう時代背景を考え合わせると感慨深いものがある。

おわりにあたって、再度、渋沢遺跡発掘調査及び出土遺物の整理作業から得られた成果についてみる、

土器棺墓の発見から墓域と認められたこと

本遺跡が縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭の所産であること

東海地方の影響を受けつつも、中部高地や北関東にその一部様相が許容されること

仮称「渋沢式土器」の提唱についてのこと。

磨製石庖丁と打製石錘の出土からみる生業の複雑性についてのこと

等々多くのものが得られたと考える。それはまた、いくつかの問題点も提起しているようにも思える。今後、多くの方々のご指導、助言をいただき、地道な調査、研究を続けていきたいと考えている。

最後に報告書刊行が遅れたことを再度お詫びするとともに、調査から刊行までに、ご協力をいただいた、現場作業員、整理作業員の方々、遺跡の保護にご尽力下さった荻精吾氏、快く報告書刊行の一翼を担ってくれた山上英善君に対し、厚く感謝の意を表する次第である。(渡井)

付 編

1 萩氏表採資料について (第37~39図、図版26~29)

萩精吾氏により表採、保管されている資料は、富士宮市史掲載資料を含め整理用コンテナ5箱分程になる。本項では紙面の都合上、60点あまりの資料の提示に止める。

器種構成や文様構成の面などは、発掘調査時の資料との類似性が強く認められるがその中で数点特徴的な資料が見られるので紹介する。1は直立する鉢形土器の口縁部の破片であり、外面、口辺部ともに横位の条痕により整形されている。櫛式土器の範中で捉えられるが当該期の鉢形土器は内面まで条痕を施す類例があまりみられない。この鉢形土器は、鉢Cと同時期のものであると考えられ、鉢形土器の頸部が外反する前段階のものであると捉えられる。3、4は壺口縁I c の好例である。13は壺口縁II c - 3で内面に緩かに弧状を呈する横線文が見られる。波状文はA種、B種、D種が認められ、14~17はA種、18はD種、19はB種に相当する。特に17は横線文と波状文によって文様を構成し、内面に横線文を施すものである。22は壺Cの胴部破片で、胎土が粗く石英、長石の混入の目立つものである。24のように横線文と綫線文とを組み合わせた文様帶を沈線で区画するものは発掘調査時の資料に明確な類例が見られないものであるが条痕文土器の範中で捉えられT字文との関係を指摘できるものであろう。30は縦位羽状文と横線文により文様も構成される大型壺の胴部破片である。大型壺の明確な類例が把握できるのは本例のみである。31は壺Cの胴部破片だと思われるもので横位羽状文が施されている。43は口辺部に横位の条痕を施す壺形土器の好例である。47~49は壺Cの類例であるが49は頸部の外反が緩やかで外面を横位の条痕で丁寧に仕上げられており壺Cの中でも特異な様相を呈している。

萩氏の表採資料は、その出土状態が不明確であるため遺物相互の時代的位置づけができるものであるが、1、2のように浜沢第Ⅰ期に比定されるもの、3、4のように浜沢第Ⅱ期に比定されるものなどが見られ、さらに波状文も施文方法にバラエティーが見られるなど、時期差として捉えることができる。このように本表採資料は浜沢第Ⅲ期が主体となるものの、第Ⅰ、Ⅱ期の類例も認めら、れある程度の時間幅の中で捉えることができる。

2 別所遺跡の資料 (図40図、図版30)

第40図は、浜沢遺跡の南方2kmあまりの洞井川右岸に位置する別所遺跡の表採資料である。

1は富士川町山王遺跡に多く見られる水Ⅰ式系の鉢形土器の口縁部破片で、浜沢遺跡の第Ⅳ群一鉢Aに相当する。2は、浮線網状文の施される鉢形土器で水Ⅰ式土器の中に多く見られる。3は、器厚の厚い壺形土器の頸部破片で外面を横位の条痕で整形した後に文様Ⅲを施してい

る。4は文様Ⅱと文様Ⅲが施された壺形土器の破片である。5~11は横位、斜位の条痕により整形されている破片である。5は富士川町山王遺跡出土の水神平式土器と胎土が非常に類似している。12~17綴位は、斜位の条痕が施されている。15は巾の狭い条痕が部分的に見られるもので特異な様相を呈している。

以上が別所遺跡表探の資料の概略であるが、1、2の資料は特に注目される。1は、渋沢遺跡の第Ⅰ期に比定される資料で、1の類例が主体的に出土している富士川山王遺跡との関連が強く認められる。2は、本市で初見の資料であり、山王遺跡においてD地点第Ⅰ類土器として分類されたもので水Ⅰ式土器に比定されているものである。1、2の資料を見るかぎりでは別所遺跡が渋沢遺跡とは同時期の開始が伺える遺跡であることがわかり、弥生時代中期初頭にかけて同じような展開を示した遺跡である可能性も考えられる。更に筆を進めてしまえば、墓域である渋沢遺跡に対して潤井川を挟んで対岸に位置する別所遺跡が大中里湧水群や淀師湧水群を利用した水田耕作を行った集落であった可能性も考えられる。

3 押出遺跡の資料 (第41図、図版30)

国指定の天然記念物である万野風穴の入口部に広がる押出遺跡は、潤井川の支流である風祭川右岸に位置している。

18~31は条痕文土器、31は縄文が施文されるものである。25は壺口縁Ⅰ-aの範疇で捉えられるものと考えられるが渋沢遺跡では見られない形態をしている。26、27は綴位羽状文もしくは斜線文と横線文の組み合せによって構成される文様が施文されているもので丸子式土器の中に普遍的に存在するものである。32はL.Rの縄文を施文しているものであるが第28図-121の渋沢遺跡の資料と類似している。

26、27の文様構成を指標として押出遺跡は渋沢遺跡の主体的な時期である第Ⅲ期に比定できる。同じ河川の流域に3kmあまりの距離を隔てて位置する両遺跡は渋沢遺跡第Ⅲ期に段階において強い関連性が認められる。水田可耕地のはほとんどで認められない山間部に位置する押出遺跡の周辺まで集落を展開させていることは、当時の生業を考える上で非常に興味深いものと言える。

(山上)

第11表 萩氏表探資料 土器観察表

番号	器形	部位	壺形・瓶形の特徴	焼成	胎土	色調	備考
1	鉢	口縁部	内外面・口辺部 横位の条痕	普	石英・長石・小石	橙色	内外面・口辺部条痕・胎土式一水神平式
2	鉢	口縁部	鉢口 外面は綴位の条痕	普	石英・長石多 砂少	外 墓褐色 内 墓灰色	
3	壺	口縁部	壺口縁Ⅰ-c-1 指頭による押正文を施す。外側は綴位羽状文	普	石英・金雲母	外 墓褐色 内 墓褐色	
4	壺	口縁部	壺口縁Ⅰ-c-1 指頭による押正文を施す。外側は綴位羽状文	普	石英・金雲母	褐色	
5	壺	口縁部	壺口縁Ⅰ-b-1 外面は横位の条痕	普	石英・長石少 金雲母	外 墓赤褐色 内 墓褐色	
6	壺	口縁部	壺口縁Ⅰ-b-1 外面は横位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外 墓褐色 内 墓褐色	

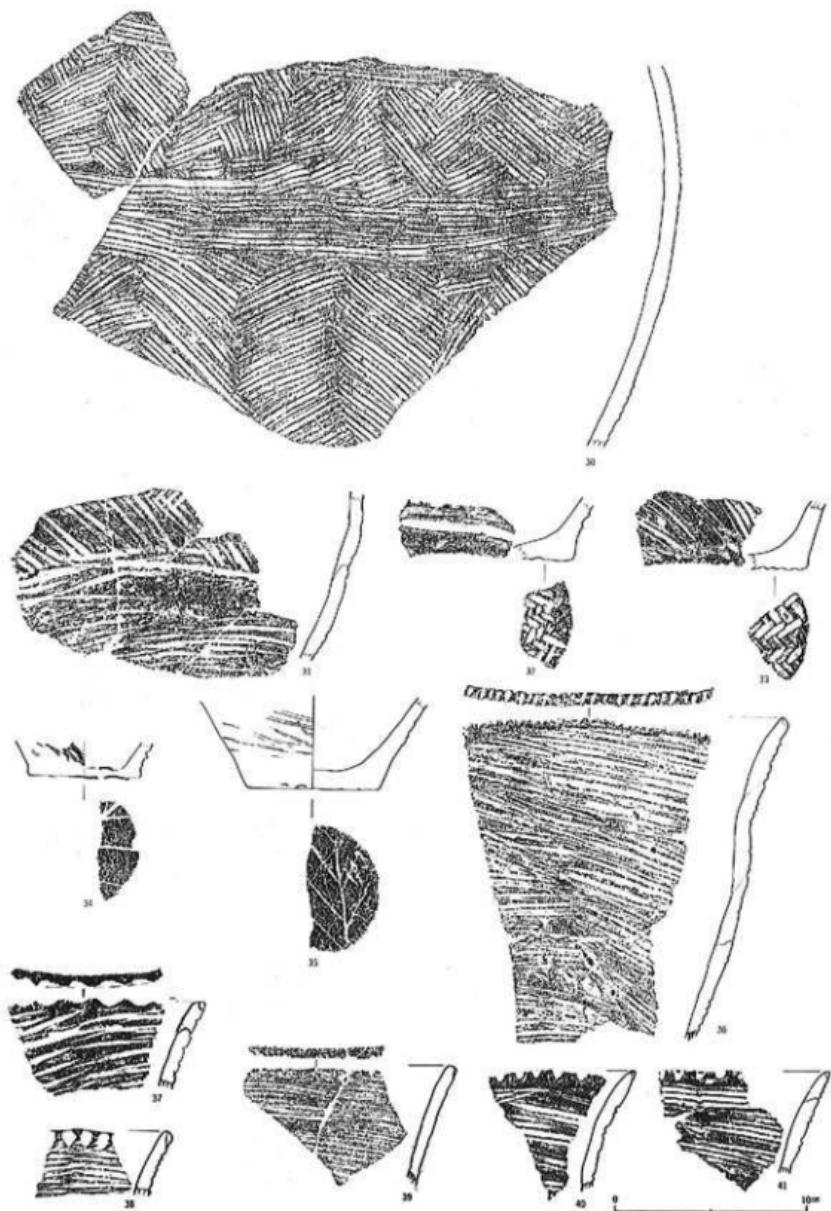
7	壇	口絆部	壇口絆Ⅱc-1 外面は縦縞文+横線 内面は縦文	やや悪い	石英・長石・砂	灰白色	
8	壇	口絆部	壇口絆Ⅱc-1 外面は横位の条痕	普	石英・長石・砂	にぶい黄褐色	
9	壇	口絆部	壇口絆Ⅱc-1 外面は横位の条痕	普	石英少・長石少	にぶい黄褐色	口部～内面赤彩
10	壇	口絆部	壇口絆Ⅱc-1 外面は横位の条痕	普	石英少・長石多	外にぶい黄褐色 内にぶい赤褐色	
11	壇	口絆部	壇口絆Ⅱc-1 外面は横位の条痕	普	石英微・長石少・砂	にぶい黄褐色	
12	壇	口絆部	壇口絆Ⅱc-3 外面は横位の縦縞文 (横位の条痕)	普	石英・砂少	にぶい褐色	
13	壇	口絆部	内面は綴かなな縦文(縦縞文)	普	石英・長石	にぶい黄褐色	
14	壇	頂 部	波状文+横位の条痕	普	石英少・長石・砂	外にぶい褐色 内にぶい褐色	
15	壇	頂 部	波状文+横縞文	普	石英少・長石・砂	にぶい黄褐色	
16	壇	頂 部	波状文 内面に一部横位の条痕が残る	普	石英・長石少	外にぶい褐色 内にぶい褐色	
17	壇	頂 部	波状文+横縞文 内面 波状文+横縞文	普	石英・長石 金雲母微	外にぶい褐色 内にぶい褐色	
18	壇	須彌 一側面	波状文(縦文)横縞文	良	石英・長石	にぶい黄褐色	
19	壇	須彌 一側面	波状文を描設で区画する	やや悪い	石英少・長石微	にぶい黄褐色	
20	壇	須彌 一側面	横縞文	普	石英・長石 金雲母微	外にぶい褐色	
21	壇	胸 部	横縞文+横縞文	普	石英・長石・砂少	外にぶい黄褐色 内にぶい黄褐色	
22	壇	胸 部	横縞文+横縞文	やや悪い	石英少・長石	黒褐色	
23	壇	胸 部	横縞文+横縞文	普	石英・長石・砂	にぶい褐色	
24	壇	頂 部	逆さに区画した文様帶に横縞文と横線を 組み合わせて施文	普	石英・長石・砂少	外にぶい黒褐色 内にぶい黒褐色	
25	壇	頂 部	斜位 縦縞文	悪い	石英少・長石少・砂	灰白色	
26	壇	頂 部	縦位羽状文	普	石英少・長石	外にぶい黄褐色	
27	壇	須彌?	縦位羽状文+横縞文	普	石英少・長石	外にぶい黒褐色	
28	壇	須彌?	外面は横位の条痕	やや悪い	石英・長石・砂少	外にぶい黒褐色	
29	壇	肩 部	横縞+縦位羽状文?	普	石英少・長石・砂	灰白色	
30	壇	胸 部	縦位羽状文+横縞文	普	石英少・長石 金雲母微	外にぶい黄褐色 内にぶい黒褐色	外面ス付着
31	壇	胸 部	縦位羽状文+横位の条痕	普	石英・長石	黄褐色	
32	壇	底 部	外面は横位の条痕、底面は網代灰	普	石英・長石	灰褐色	
33	壇	底 部	外面は斜位の条痕、底面は網代灰	普	石英少・長石 金雲母	外にぶい黄褐色 内にぶい黒褐色	外面ス付着
34	壇	底 部	外面は斜位の条痕、底面は木葉灰	普	石英・長石・砂少	褐色	
35	壇	底 部	外面は横位の条痕、底面は木葉灰	普	石英・長石	外にぶい黑褐色 内にぶい黒褐色	
36	堀	口絆部 一側面	堀口絆Ⅰ-2 b 外面は横位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外にぶい黄褐色 内にぶい黒褐色	外面ス付着
37	堀	口絆部	堀口絆Ⅰ-1 外面は横位の条痕	やや悪い	石英・長石	外にぶい黒褐色 内にぶい黒褐色	
38	堀	口絆部	堀口絆Ⅰ-2 b 外面は横位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外にぶい黒褐色 内にぶい黒褐色	
39	堀	口絆部	堀口絆Ⅰ-2 a 外面は横位の条痕	普	石英・長石少・金雲母少	黄褐色	
40	堀	口絆部	堀口絆Ⅰ-2 b 外面は横位の条痕	普	長石・金雲母微	外にぶい黒褐色 内にぶい黒褐色	
41	堀	口絆部	堀口絆Ⅰ-2 b 横文は手執骨状工具による外面は横位の条痕	普	長石少・金雲母少	外にぶい黒褐色 内にオーリーブ黒色	
42	堀	口絆部	堀口絆Ⅰ-3 外面は横位の条痕の後に 縦位の条痕を施す	普	長石・砂	外に明黄褐色 内に赤褐色	
43	堀	口絆部	堀口絆Ⅰ-3 外面は横位の条痕の後に縦位の条痕を施す	良	石英少・長石	内に黒褐色	
44	堀	口絆部	外面は横位の条痕	普	石英少・長石	外に黒褐色 内に黒褐色	
45	堀	口絆部	堀口絆Ⅰ 外面は横位の条痕	普	石英少・長石少	外に黒褐色 内に明黄褐色	
46	堀	口絆部	堀口絆Ⅱ 外面は斜位の条痕	普	長石・砂少	外に黒褐色 内に褐色	
47	堀	口絆部	堀口絆Ⅲ 外面は横位の条痕	普	石英・長石少 金雲母少	外に黒褐色 内に褐色	
48	堀	口絆部	堀口絆Ⅲ 外面は横位の条痕	普	石英少・長石 砂少	外に黒褐色+褐色 内に褐色	
49	堀	口絆部	堀口絆Ⅲ 一部平線にしている堀口絆Ⅲ の特異形 外面は横位の条痕	やや悪い	石英・長石少・砂	外に黒褐色 内に褐色	
50	堀	頭 部	頭部 一側面 内面に横縞文を施す 内面下部に横位の条痕を残す	普	石英・長石	内にぶい黄褐色	内外面ス付着
51	堀	頭 部	外面は横位の条痕、上部に斜位の条痕を 施す頭部を残す	普	長石・砂	外に明黄褐色 内に黒褐色	内面赤彩
52	崩 部	外面	2条の斜位の沈度+四角文の一部?	やや悪い	石英・長石	外に黒褐色 内に褐色	
53	崩 部	外面	山形支(銀歯文)の一部?	普	石英・砂・金雲母	外に海色 内に褐色	
54	崩 部	外面	菱形文の一部?	普	石英・長石・砂	外に黒褐色 内に明黄褐色	

第12表 安居山別所遺跡 外神押出遺跡表採土器観察表

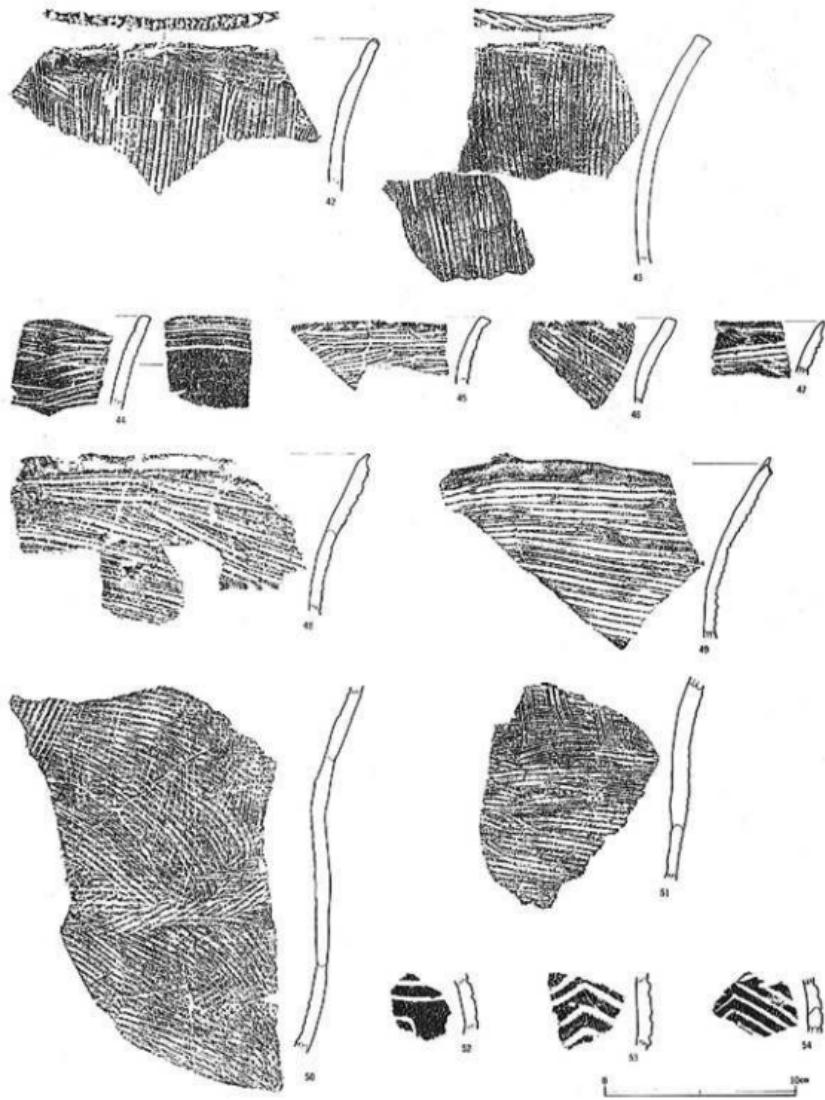
遺跡	番号	地形	部 位	縁形・裏文の特徴	焼 成	胎 土	色 調	備 考
別所	1	井	口縁部	第V群、口縁部外側に2条、内側 に1条の双縁	普 通	石英少・長石・砂 少	外 壤黄色 内 にぶい黃褐色	
	2	井	口縁部	直縁斜切状	普	鐵石英少・長石少	にぶい黃褐色	外曲手筋
	3	竪?	頭 部	外曲傾斜の条痕+縁文の条痕、内面上位に 横位の条痕、下位に複合状がみられる	普	石英少・長石 砂少・金芸母少	黒褐色	
	4	竪?			普	石英・長石・砂	外 にぶい黃褐色 内 暗灰黃色	
	5		頭 部	外面 橫位の条痕	普	粗石英・粗長石	外 にぶい黃褐色 内 にぶい黃褐色	
	6		頭 部	外面 橫位の条痕	普	石英・長石	外 にぶい褐色 内 にぶい褐色	外曲ス付着
	7		頭部?	外面 斜位の条痕	普	石英少・砂少 金芸母少	外 にぶい褐色 内 黑褐色	
	8		胸 部	外面 斜位、横位の条痕	普	石英少・長石	外 にぶい黃褐色 内 にぶい黃褐色	
	9		胸 部	外面 橫位の条痕	普	石英・長石	外 にぶい黃褐色 内 にぶい黃褐色	
	10		胸 部	外面 橫位の条痕の後、斜位の条 痕を施す	普	石英・長石 金芸母少	外 にぶい黃褐色 内 にぶい黃褐色	
	11		胸 部	背面 斜位の条痕	普	石英・長石・砂 少	外 にぶい黃褐色	
	12		胸 部	背面 斜位の条痕 内面 斜位、縁位の条痕	普	石英少・長石 砂少	外 にぶい黃褐色 内 にぶい黃褐色	
	13		胸 部	外面 斜位の細かい条痕	普	細長石・金芸母	外 黑褐色 内 にぶい黃褐色	
	14		胸 部	外面 斜位の条痕	普	長石・砂 少	外 にぶい黃褐色 内 黑褐色	
	15		胸 部	外面 斜位の条痕	普	石英・長石・砂	外 黑褐色 内 明赤褐色	
	16		胸 部	外面 縱位の条痕	やや薄	長石・金芸母少	外 明赤褐色 内 にぶい黃褐色	
	17		胸 部 下位?	外面 斜位の細い条痕、表面の凹 凸が目立つ	普	石英・長石 砂少	外 黑褐色	
押出	18	毫	頭 部	外面 橫位の条痕	普	石英・細長石 金芸母少	外 黑褐色 内 にぶい黃褐色	
	19			外面 橫位の条痕?	普	石英・細長石 金芸母少	外 黑褐色 内 にぶい黃褐色	
	20		胸 部	外面 斜位の後横位の条痕を 施す 内外面亂れ	普	石英少・長石 砂少	外 黑褐色	
	21		胸 部	外面 橫位の条痕	患 い	石英少・長石 砂少	外 明褐色 内 黑褐色	
	22		胸 部	外面 橫位の条痕 (縁文?)	普	石英少・長石 砂少・金芸母	外 黑褐色 内 黑褐色	
	23		外面	外面 橫位の条痕 (縁文?)	普	石英・長石 金芸母	外 黑褐色 内 黑褐色	
	24			外面 斜位の条痕	普	長石・砂	外 黑褐色 内 にぶい褐色	
	25	毫	口縁部	直口縁上・外面は縁位の条痕	普	石英・長石・金芸母	外 黑褐色 内 にぶい黃褐色	
	26	毫	胸 部	縁文+縱位羽状文?	普	細長石・長石・砂	外 にぶい黃褐色 内 黑褐色	
	27	毫	胸 部	縱文+縱位羽状文?	やや薄	石英・長石	外 黑褐色 内 黑褐色	
	28		胸 部	外面 斜位の条痕、表面の楕丸れ	普	石英少・長石・砂	外 黑褐色 内 黑褐色	外曲ス付着
	29		頭 部	外面 斜位、横位の条痕	普	長石少・砂少	外 黑褐色 内 にぶい黃褐色	
	30		胸 部	外面 斜位、横位の条痕	普	長石少・砂少	外 黑褐色 内 黑褐色	29に類似
	31		頭部?	外面 縱位の条痕	やや薄	長石・砂少	外 内 明赤褐色 露現 開放色	外曲ス付着
	32		胸 部	外面 縱文 (L.R.)	患 い	石英・長石	外 内 明赤褐色 露現 開放色	



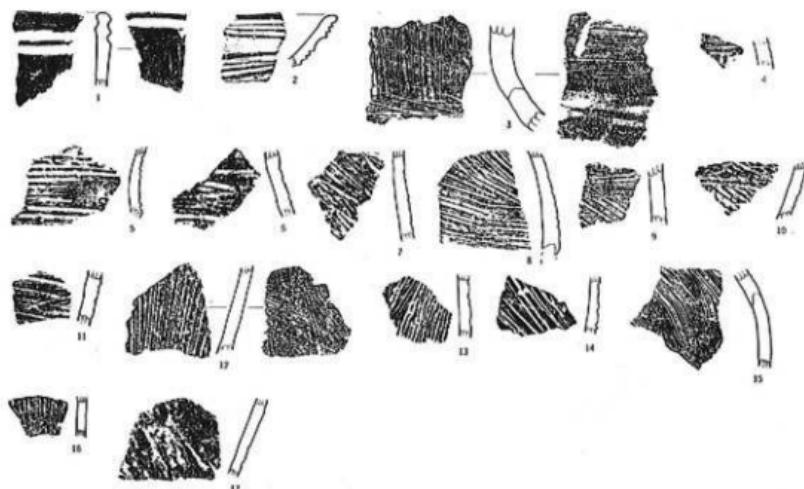
第37圖 裝氏表探土器①



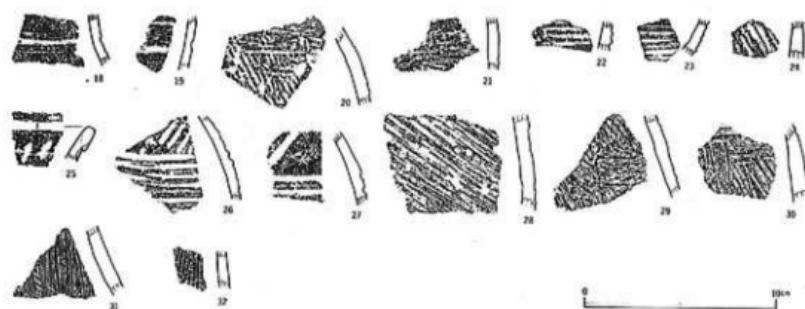
第38図 荻氏表採土器②



第39図 萩氏表探土器③



第40図 別所遺跡表採土器



第41図 押出遺跡表採土器

引用参考文献

- | | | | |
|-------------|------|---|------------------|
| 愛知考古学講話会 | 1985 | 「 <u>条痕文系土器</u> 」文化をめぐる諸問題
—縄文から弥生—資料編Ⅰ | |
| 石川日出志 | 1988 | 「 <u>条痕文系土器</u> 」
—縄文から弥生—資料編Ⅱ、研究編 | |
| 石黒立人 | 1981 | 三河・尾張における弥生文化の成立
—水神平式土器の成立過程について— | 駿台史学52 |
| 磐田市教育委員会 | 1981 | 東海地方西部の櫛王・水神平式期をめぐる問題 | 考古学研究28-1 |
| 磐田市教育委員会 | 1985 | 「 <u>条痕文系土器</u> 」研究をめぐる若干の問題 | マージナルNo 5 |
| 植松章八 | 1974 | 遠江見性寺貝塚の研究 | |
| 植松章八 | 1981 | 御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ | |
| 植松章八 | 1966 | 静岡県向市場遺跡出土の土器 | 金鉢19 |
| 大阪文化財センター | 1971 | 富士宮市史上巻第1章 | |
| 小野真一 | 1979 | 池上遺跡 第3分冊の2 石器編 | |
| 小野真一他 | 1957 | 静岡県東部古代文化総覧 | |
| 神村透 | 1962 | 富士宮市沢沢遺跡出土の弥生土器 | 駿豆考古第6号 |
| 河津町教育委員会 | 1985 | —丸子式土器の新資料—
弥生文化の研究 第5巻 道具と技術Ⅰ 6-2 | |
| 神沢勇一 | 1986 | 姫宮遺跡発掘調査概報Ⅳ
(第IX次調査) | |
| 北武藏古代文化研究所他 | 1987 | 足柄上郡山北町堂山出土の弥生式土器 | 神奈川県文化財調査報告第27集 |
| 北武藏古代文化研究所他 | 1963 | 神奈川県三ヶ木遺跡出土の弥生式土器 | 考古学集刊2-1 |
| 霧ヶ丘遺跡調査団 | 1985 | 第4回三県シンポジューム
東日本における黎明期の弥生土器 | |
| 紅村弘 | 1988 | 第9回三県シンポジューム
東日本の弥生墓制—再葬墓と方形周墓— | |
| 小林行雄・杉原莊介 | 1973 | 霧ヶ丘 | |
| 湖西市教育委員会 | 1967 | 水神平式土器とその周辺 | 信濃19-4 |
| 斎藤嘉彦 | 1968 | 弥生土器集成本編2 | |
| 佐藤由紀男 | 1978 | 湖西運動公園内遺跡群
第3次、第4次発掘調査概報 | |
| 佐藤由紀男 | 1980 | 湖西市埋蔵文化財発掘調査概報 | |
| 佐藤由紀男 | 1978 | 三河地方における縄文時代後、
晩期と弥生時代の葬制 | 歴史手帖6-7 |
| 佐藤由紀男 | 1984 | 静岡県三ヶ日町殿畠遺跡出土の土器に(上)古代文化36-9
ついて—条痕紋土器の研究— | |
| 佐藤由紀男 | 1985 | 静岡市丸子セイブウ山遺跡・佐波遺跡
出土土器の再検討 | (下)古代文化37-1 |
| 塙尻市教育委員会 | 1987 | 塙尻東地区県営圃場整備事業発掘調査
報告書 | 静岡県博物館協会研究紀要第10号 |
| 静岡県 | 1930 | 静岡県史第1巻 | |
| 静岡県教育委員会 | 1961 | 静岡県遺跡地名表 | |
| 静岡県考古学会 | 1978 | 静岡県考古学会シンポジューム1
静岡県における4-5世紀の墳墓について | |

静岡県埋蔵文化財 調査研究所	1984	原川遺跡	
タ	1985	昭和58年度発掘調査概報 原川遺跡	
タ	1985	昭和59年度発掘調査概報 年報I (4、原川遺跡)	
静岡市教育委員会	1985	駿河西山遺跡	
設 楽 博 己	1982	中部地方における弥生土器の成立過程	信濃34-4
島田市教育委員会	1982	静岡県島田市埋蔵文化財報告 山王前遺跡発掘調査概報	
清水市教育委員会	1975	清水天王山遺跡	
清水市郷土研究会	1960	第4次発掘調査略報 清水天王山遺跡	
杉 山 博 久	1981	第1~第3次発掘報告 秦野市平沢同明遺跡の調査	第5回神奈川県遺跡 調査、研究発表会 発表要旨
杉 原 荘 介	1967	群馬県岩櫃山遺跡における弥生時代 の墓址	考古学集刊3-4
杉 原 荘 介	1967	東京都(新島)田原における縄文、弥 生時代の遺跡	考古学集刊3-3
大 塚 初 重			
小 林 三 郎			
杉 原 荘 介	1987	駿河丸子及び佐渡出土の弥生式土器に 就いて	考古学集刊1-4
駿豆考古学会	1979	駿豆地方の弥生式土器集成	
谷 口 雄	1987	東日本における所謂「初期弥生」 文化研究の現状と課題	潮流第4号
多摩ニュータウン遺跡調 査会	1979	多摩ニュータウン遺跡調査報告書	
東京都大島町教育委員会	1987	大島町野増遺跡・下高洞遺跡D地区 和泉浜C地点遺跡	
中 野 国 雄	1954	吉原周辺の原始時代(第2報)	吉原市史研究資料第2号
永 峯 光 一	1969	水遺跡の調査とその研究	石器時代第9号
中 山 誠 二	1985	甲斐における弥生文化の成立	山梨県立考古博物 館研究紀要2
沼津市教育委員会	1976	沼津市文化財調査報告第5集 山崎、大平丸山、高田第六天	
八王子市門田遺跡調査会	1977	門田遺跡群-1976年度調査概報-	
タ	1979	タ-1978年度調査概報-	
タ	1982	神谷原Ⅲ	
浜松市教育委員会	1986	浜松市半田山遺跡(IV)発掘調査報告書	
林 原 利 明	1985	東日本における初期弥生時代の墓制	白山史学第21号
富士川町教育委員会	1975	-再葬墓について-	
富士市教育委員会	1984	駿河山王	
富士宮市	1988	富士市の文化財	
		富士宮市の自然	
星 田 享 二	1967	第一次富士宮市域自然調査研究報告書 東日本弥生時代初頭の土器と墓制	史館7
町田市根山神社北遺跡 調査会	1981	-再葬墓の研究-	
松 井 和 幸	1980	町田市根山神社北遺跡	
三ヶ日町教育委員会	1985	中部地方における農耕社会の成立について	考古学研究27-3
向 坂 銅 二	1966	引佐郡三ヶ日町殿廻遺跡	
		遠江地方を中心とした櫛描文と縄文の 系譜	信濃19-1
雲山根古屋遺跡調査団	1986	雲山根古屋遺跡の研究	

図 版

図版1 航空写真



図版第2 調査概要①



D地区試掘調査



D地区試掘調査



A地区全景（攪乱状況）



A地区全景（完掘状況）



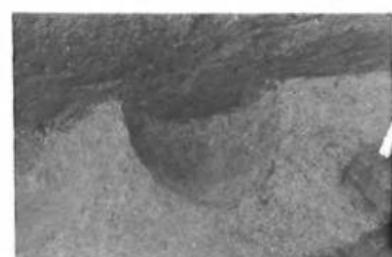
A1～A5号土壤



A1～A5号土壤（遺物出土状況）

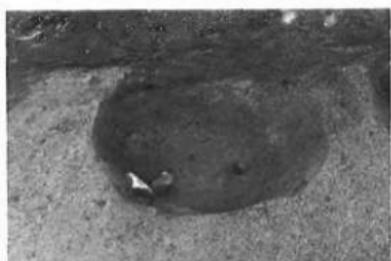


A1号土壤（遺物出土状況）



A1号土壤

図版3 調査概要②



A 2 号墳



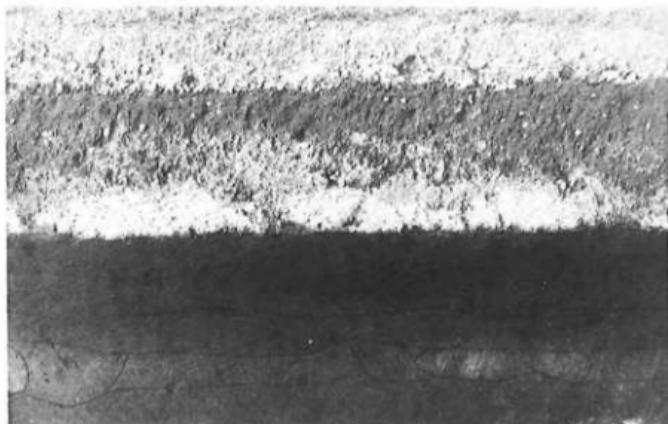
A 5号土壤



大型石斧（No.3）出土状況



大型石斧（No.4）出土状況



土層堆積状況（C地区東端南壁）

図版4

調査概要③



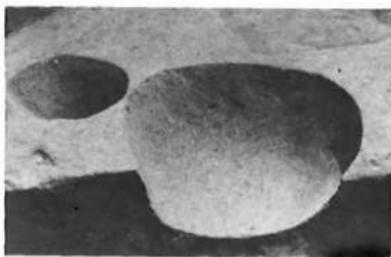
B地区全景



上新堀（南から）



上新堀（北から）



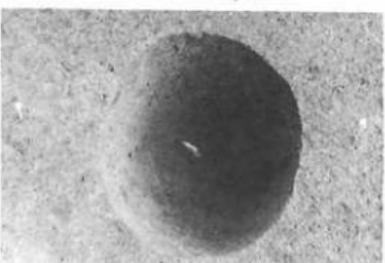
B 6号土壙



C 7号土器棺墓



C 7号土器棺墓



C 7号土器棺墓



C 8号土器棺墓



C 8号土器棺墓

図版5

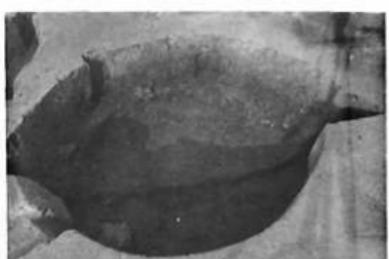
調査概要④



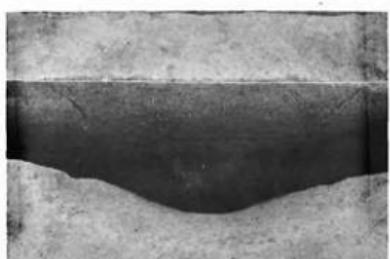
C 9号土壤



C 9号土壤



C 9号土壤



C 10号土壤



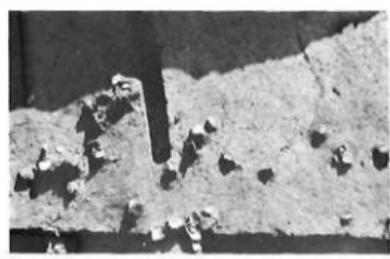
C 10号土壤



C 11号土壤



C 12号遺物集中区



C 12号遺物集中区

図版6 出土土器・富士宮市史掲載資料①



C 7号土器棺墓



Z-7グリット調査区域外出土土器



C 7号土器棺墓



3



C 8号土器棺墓出土土器



C 8号土器棺墓出土土器（部分）



1

富士宮市史掲載資料

図版 7 富士宮市史掲載資料(2)



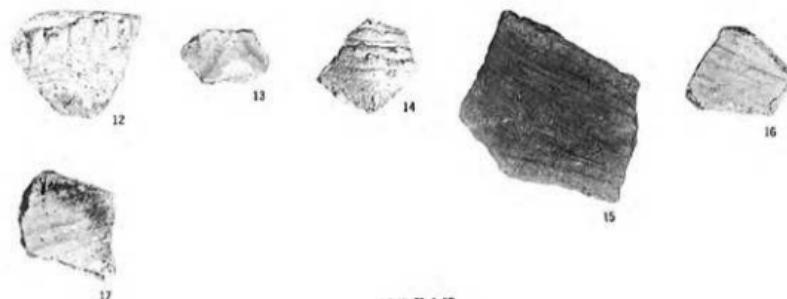
5

7

図版 8 土壤出土土器①



A 1号土器



A 2号土器

図版 9 土壌出土土器②



18



19



20



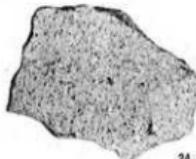
21



22



23



24

A 3号土壤 (No.18~No.23)

A 5号土壤



25



26



27



28

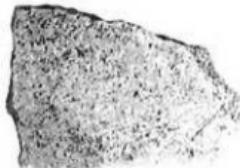


29

C 9号土壤



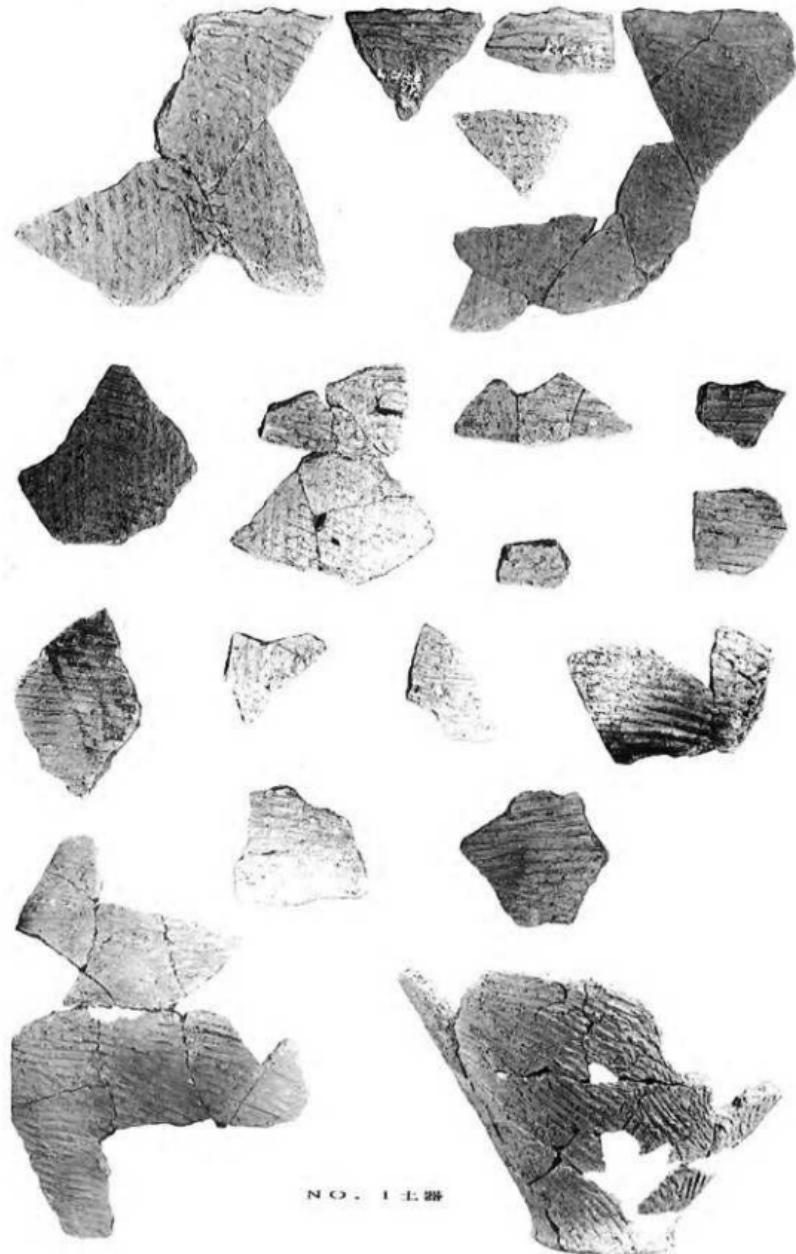
30



31

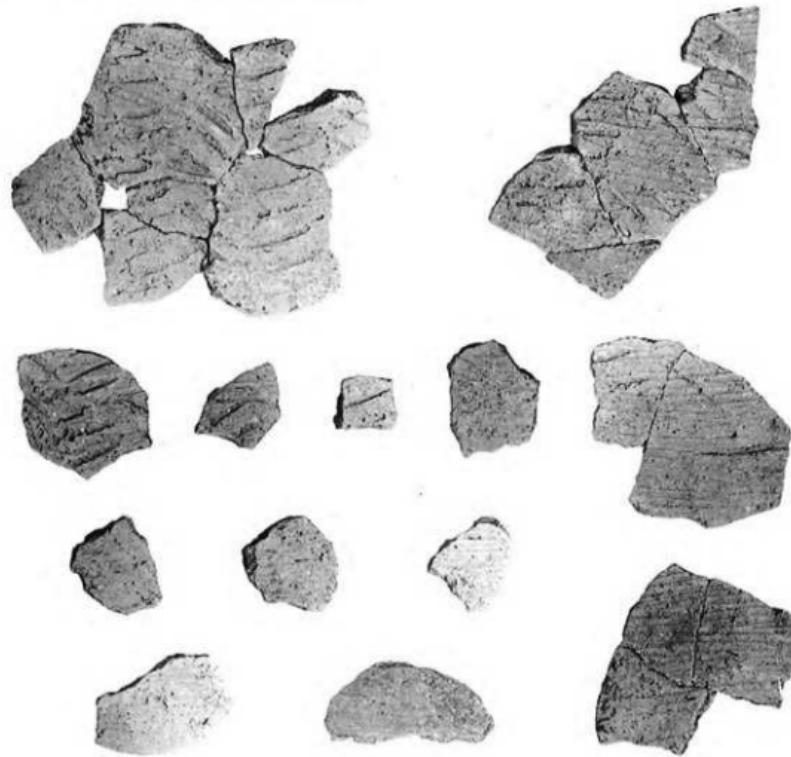
C 10号土壤

図版10 C12号遺物集中区出土土器①

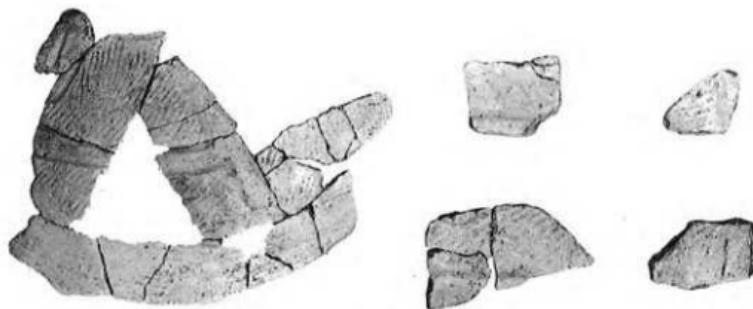


NO. 1 土器

图版 11 C12号遗物集中区出土土器②



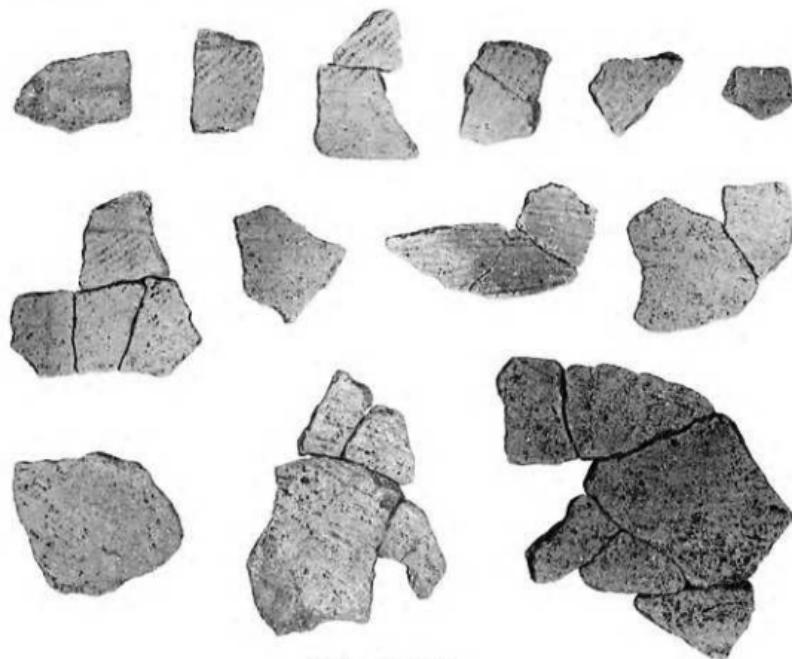
NO. 278



NO. 3188

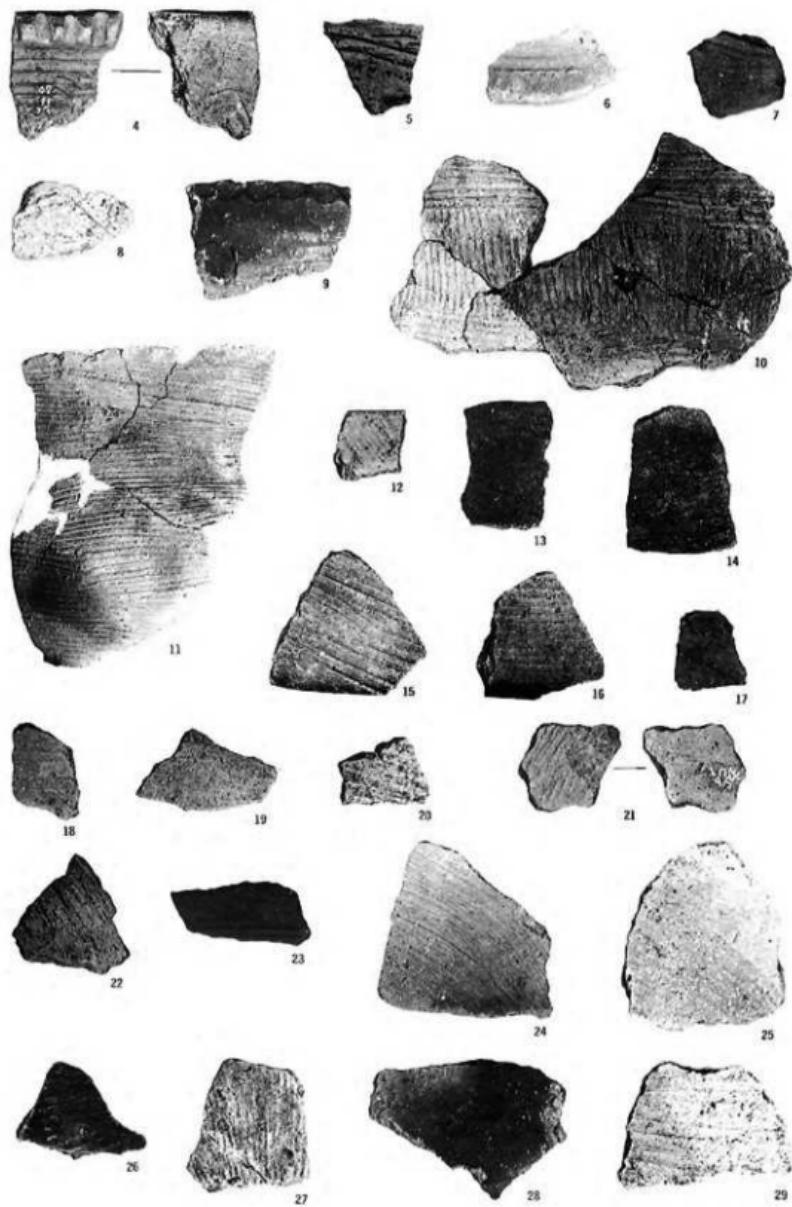
图版12

C12号遗物集中区出土土器③

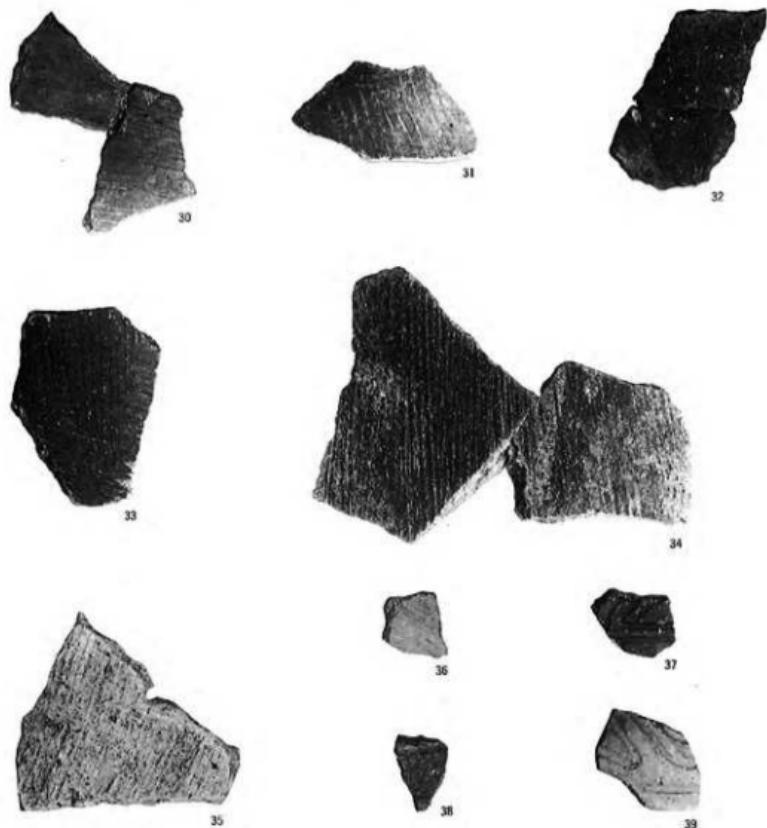


N.O. 土器 3

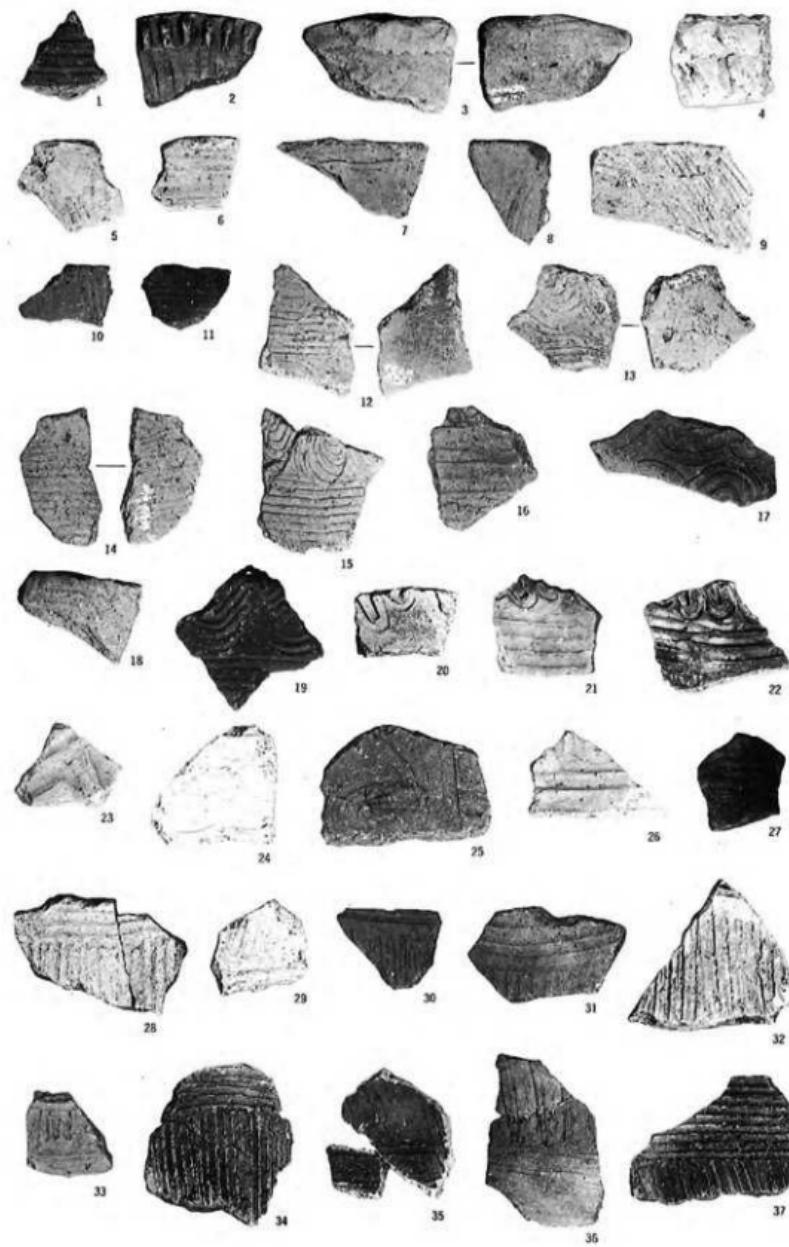
图版13 C12号遗物集中区出土土器④



図版14 C12号遺物集中区出土土器⑤

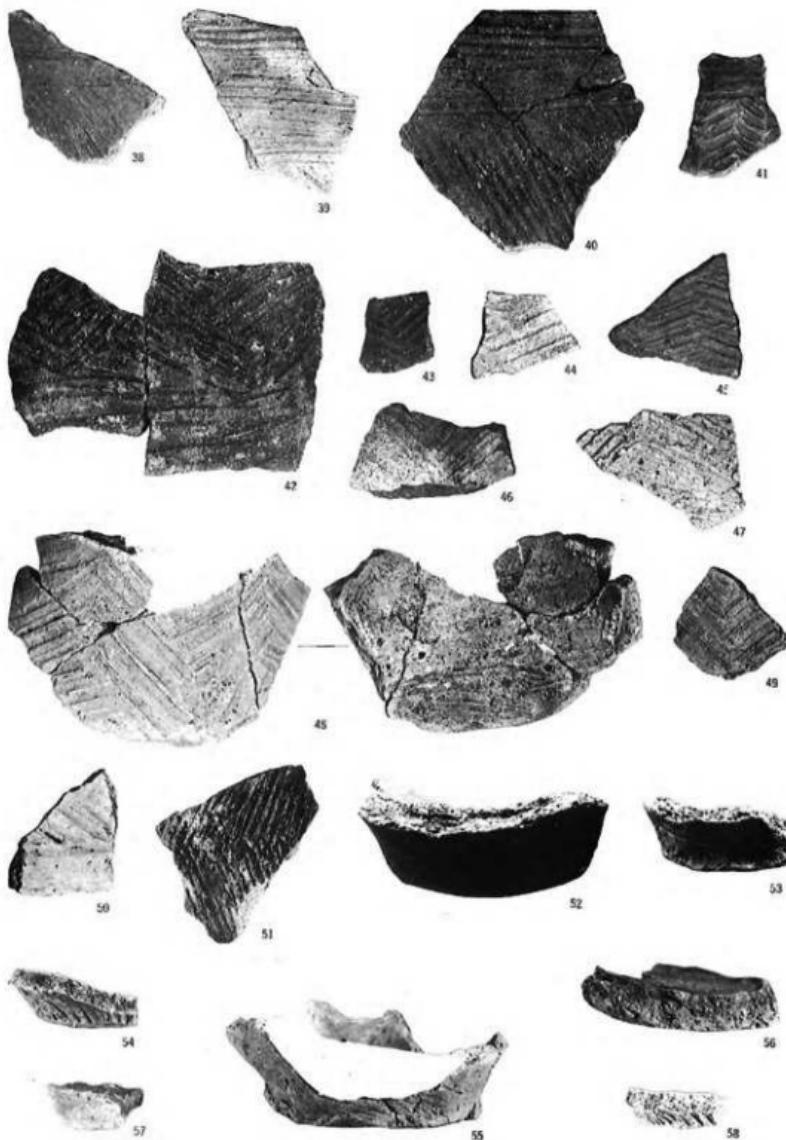


図版15 A地区出土土器①

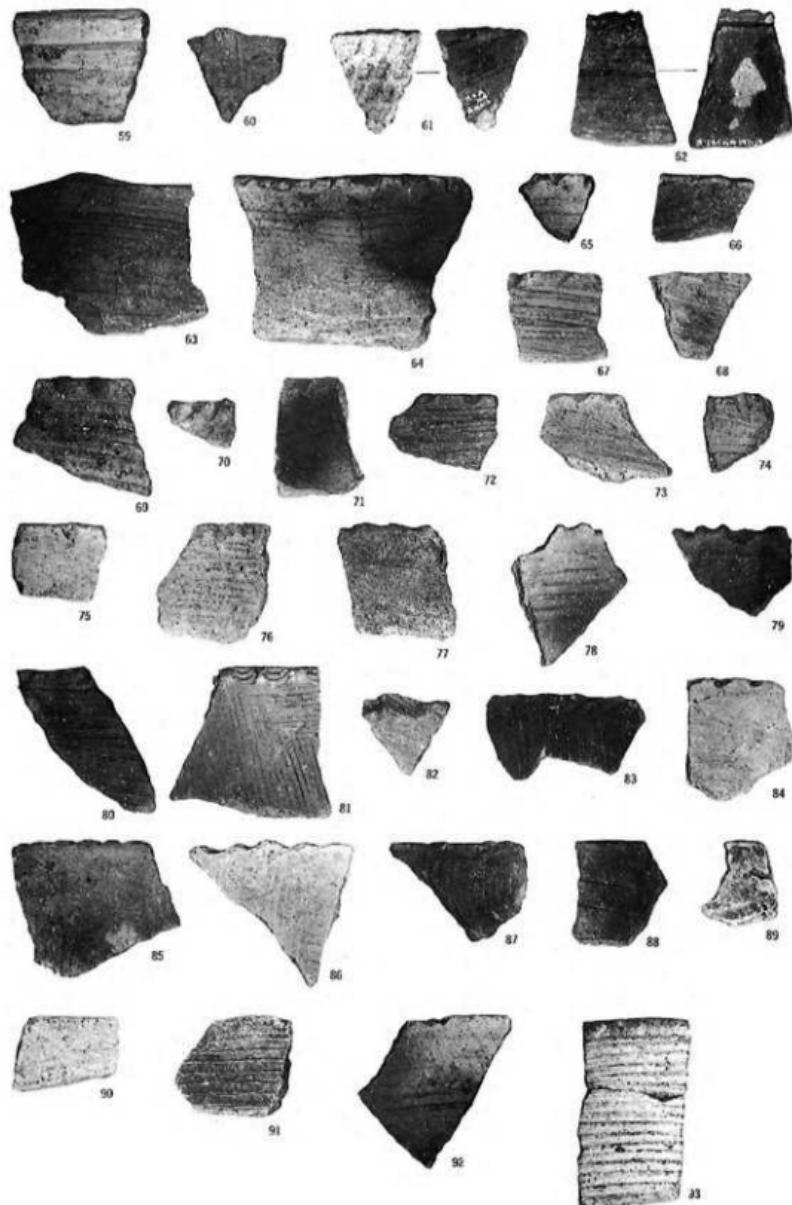


图版16

A地区出土土器②



图版 17 A 地区出土土器③



図版18 A地区出土土器④



94



95



96



97



98



99



100



103



101



102



104



105

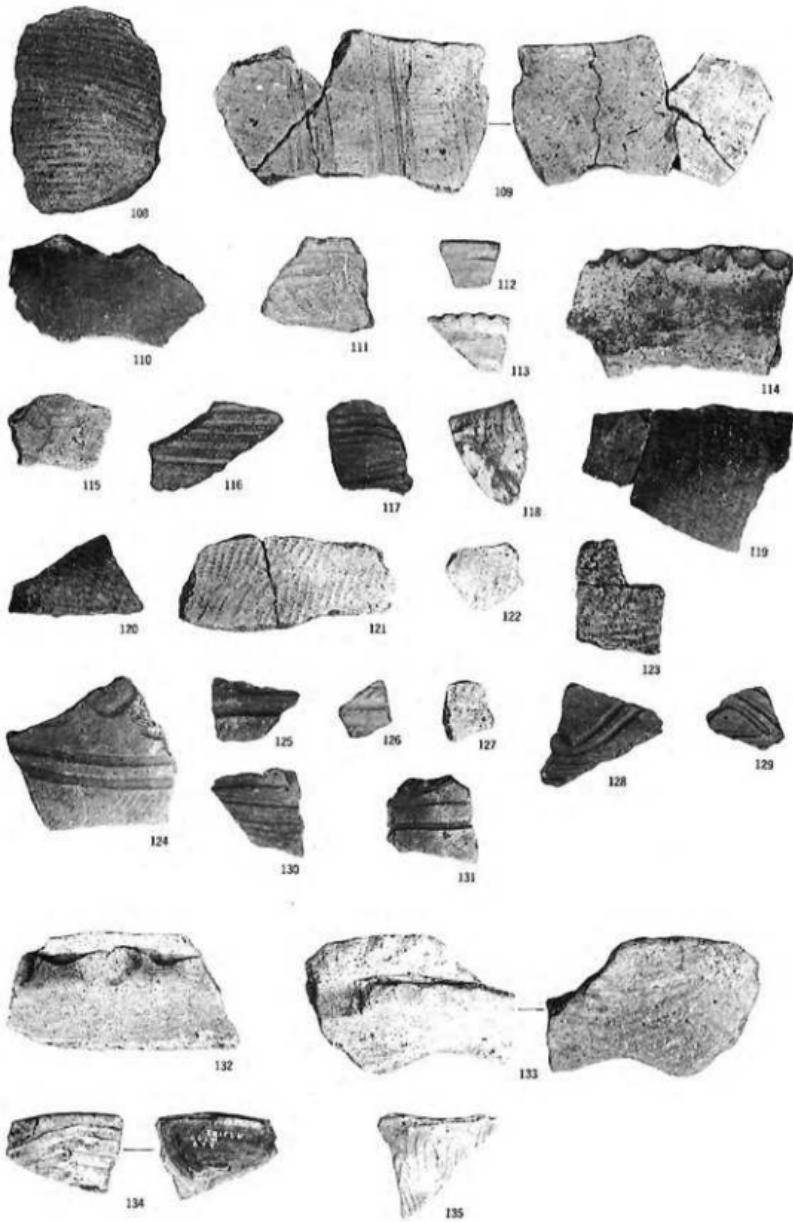


106

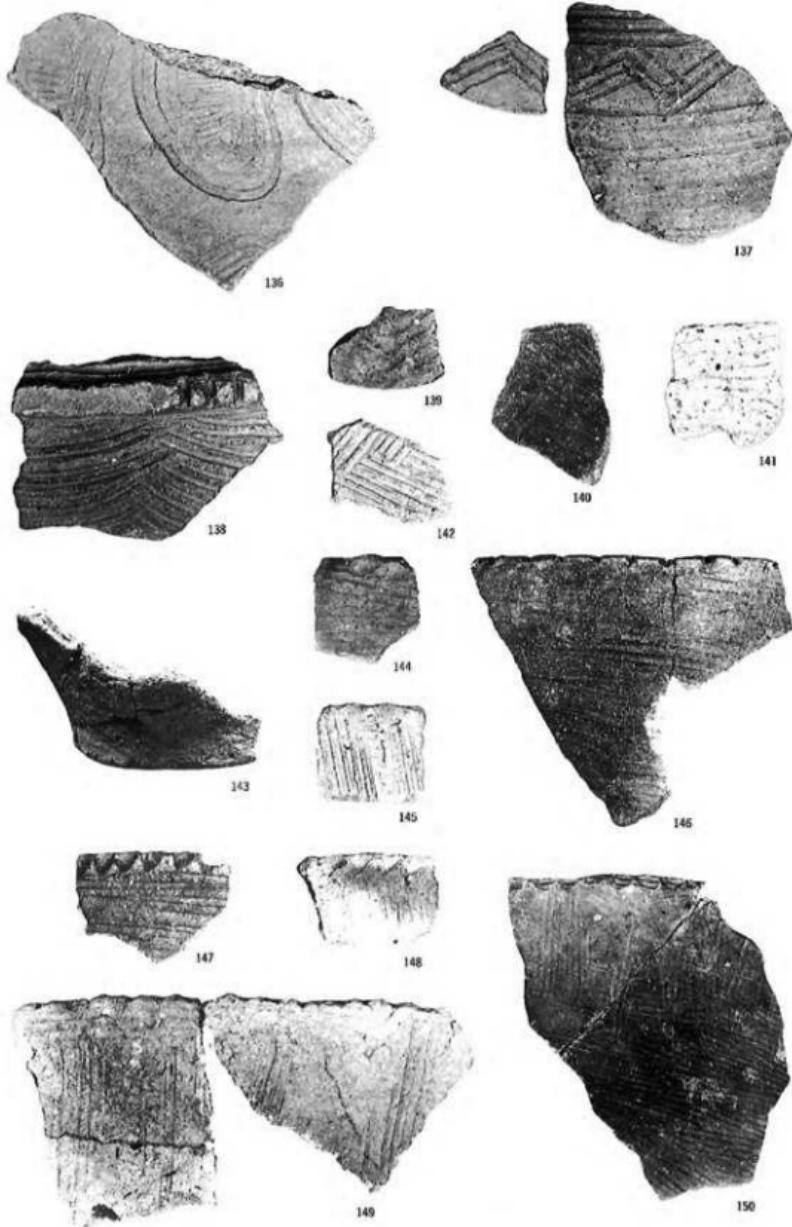


107

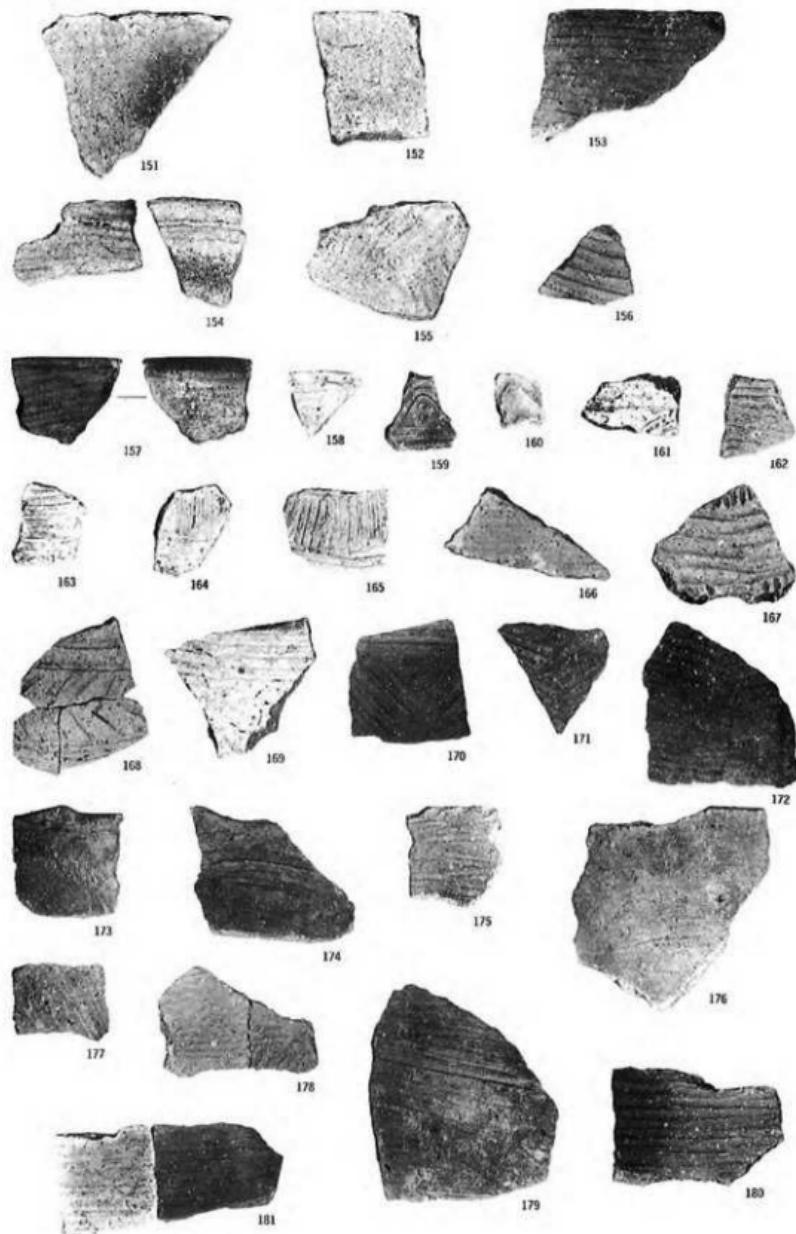
図版19 A地区、B地区出土土器



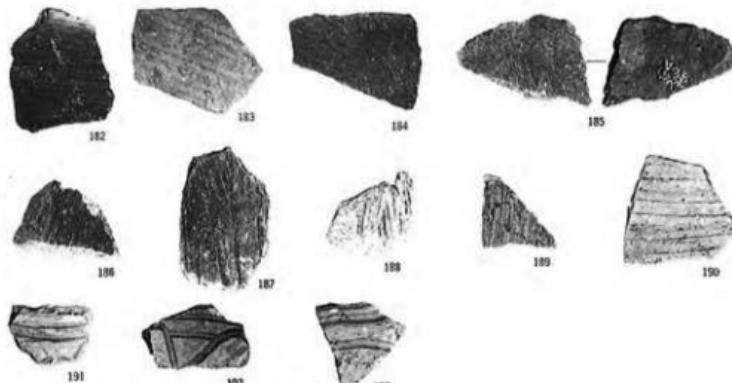
図版20 B地区出土土器



图版21 B地区、C地区出土土器



图版22 出土遗物



C地区出土状况



富士川町山王遺跡 E地点出土土器



C 1 2号遺物集中区 No.3 土器(部分)



出土土器(カワラケ)

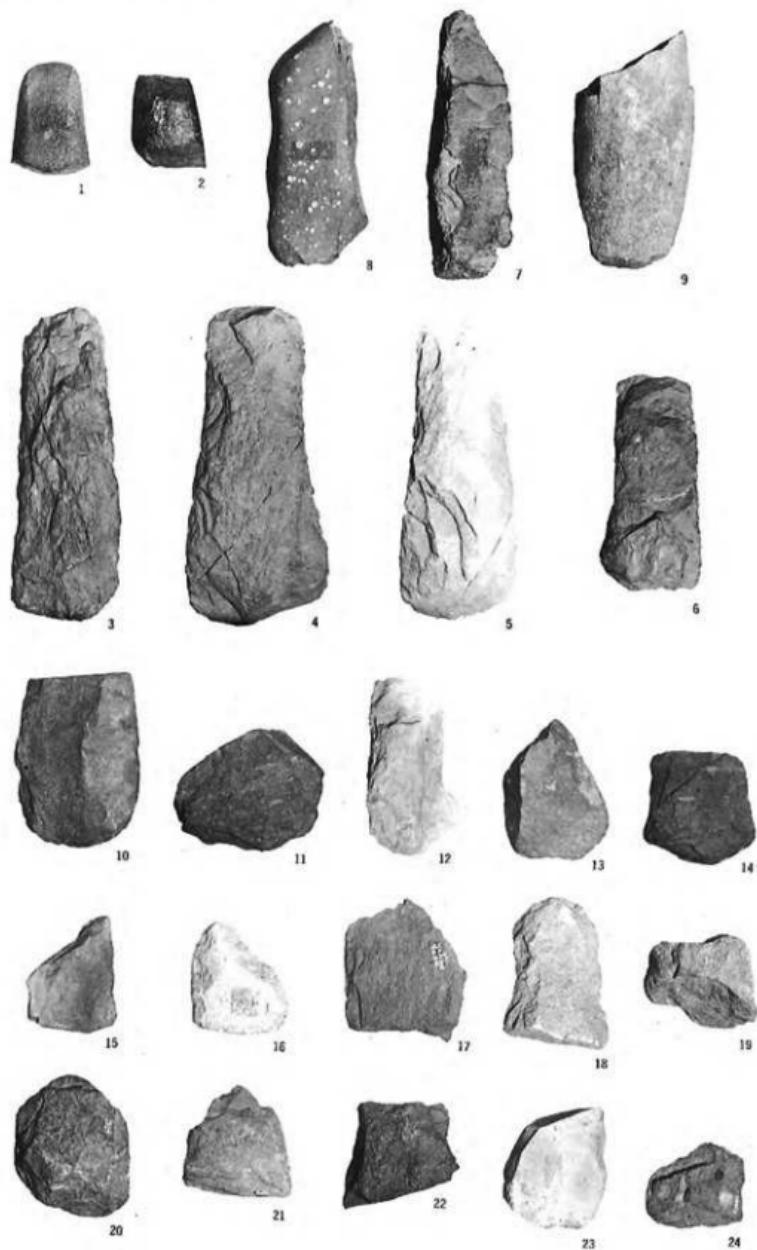


環状石斧(No.36)



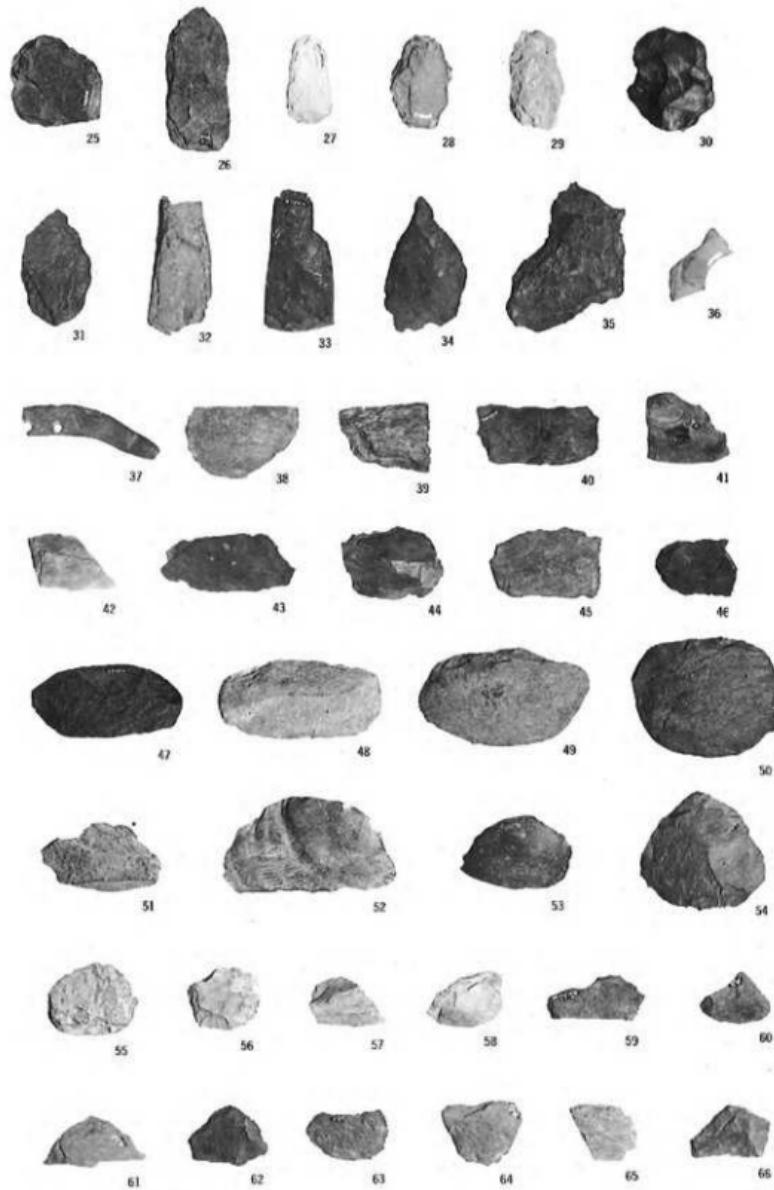
石包丁(No.37)

図版23 出土石器①



図版24

出土石器②



図版25 出土石器③



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



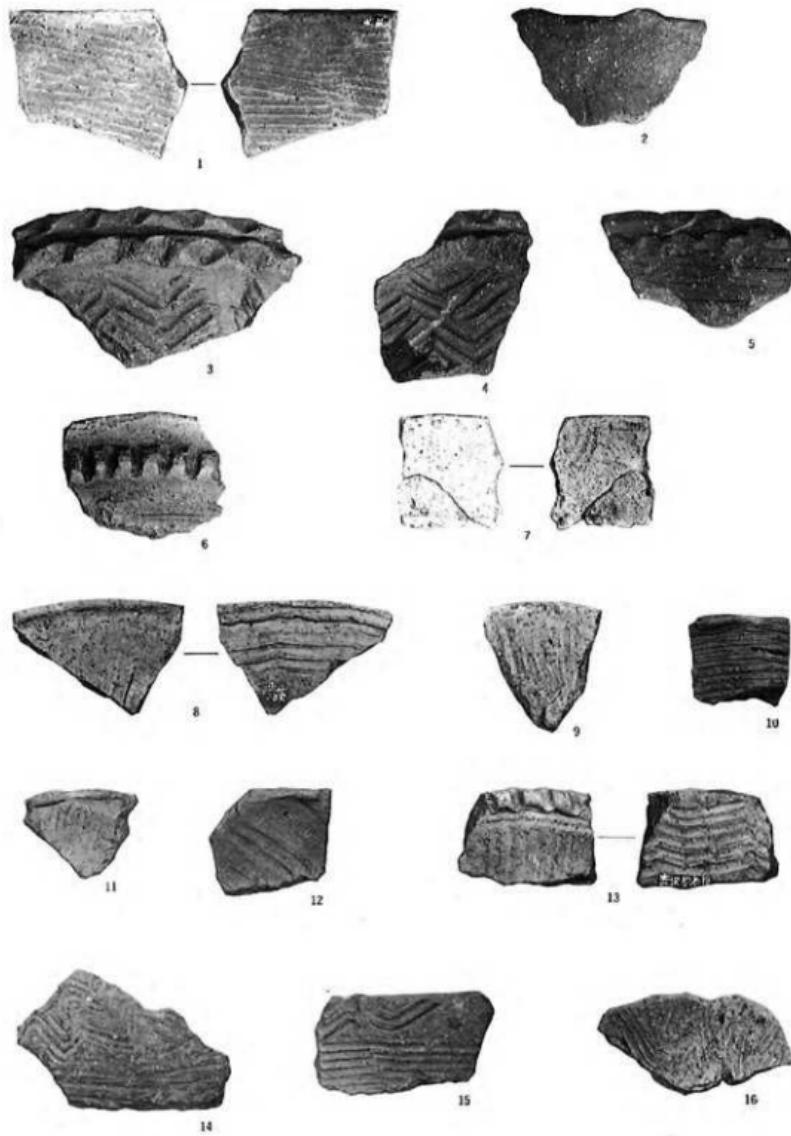
84



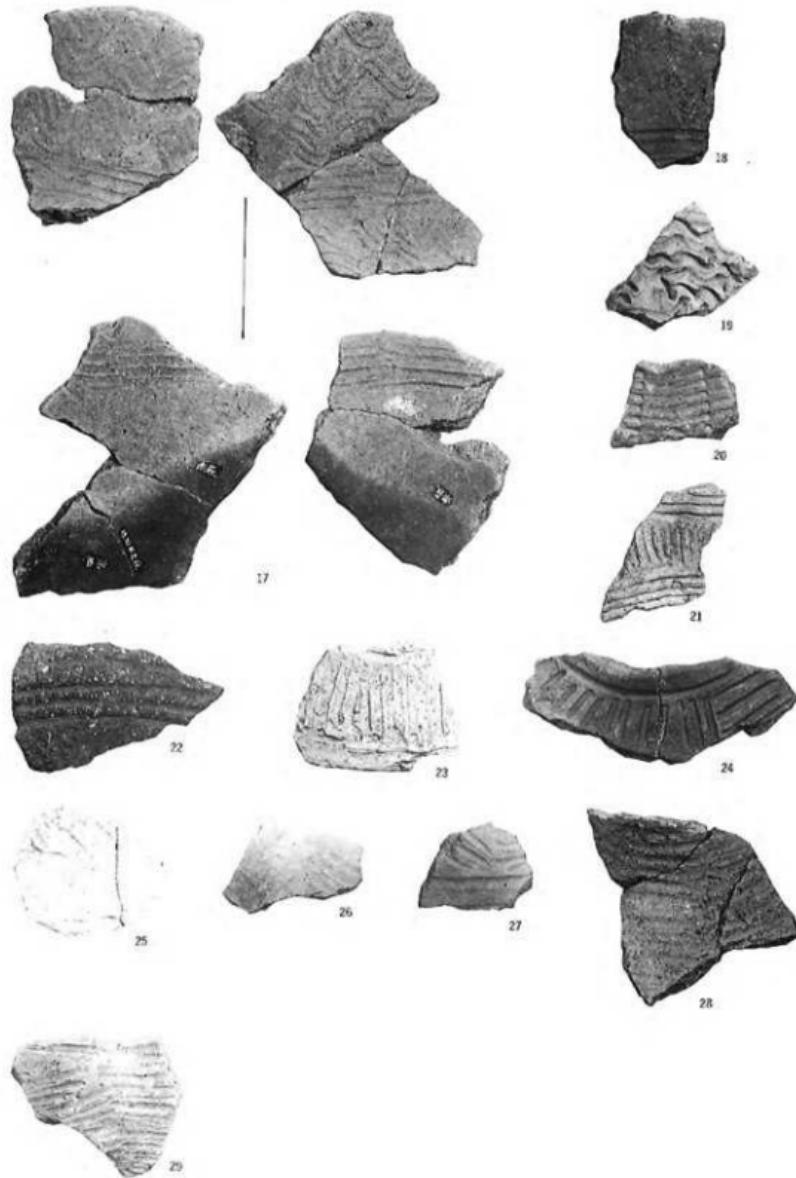
85



图版26 赫氏表探土器①



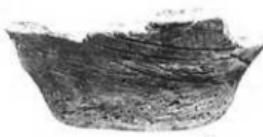
図版27 荻氏表採土器②



図版28 荻氏表採土器③



34



35



31



36



37



38



39

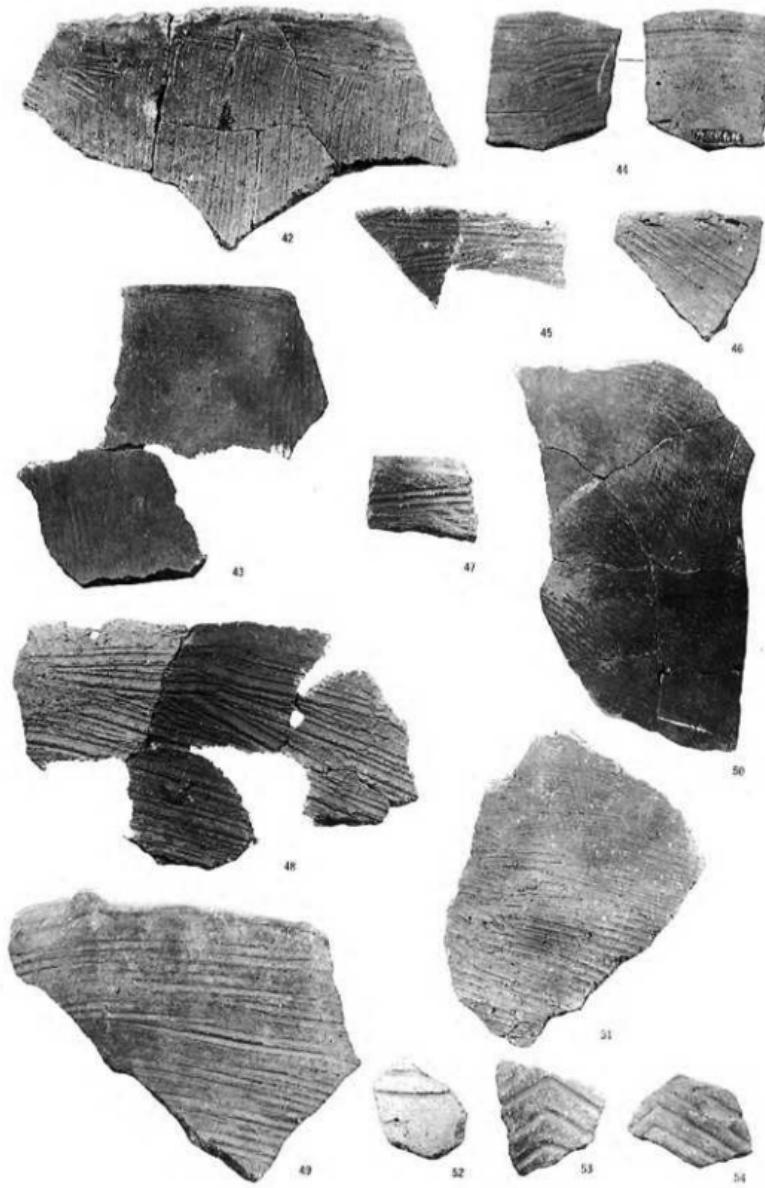


40

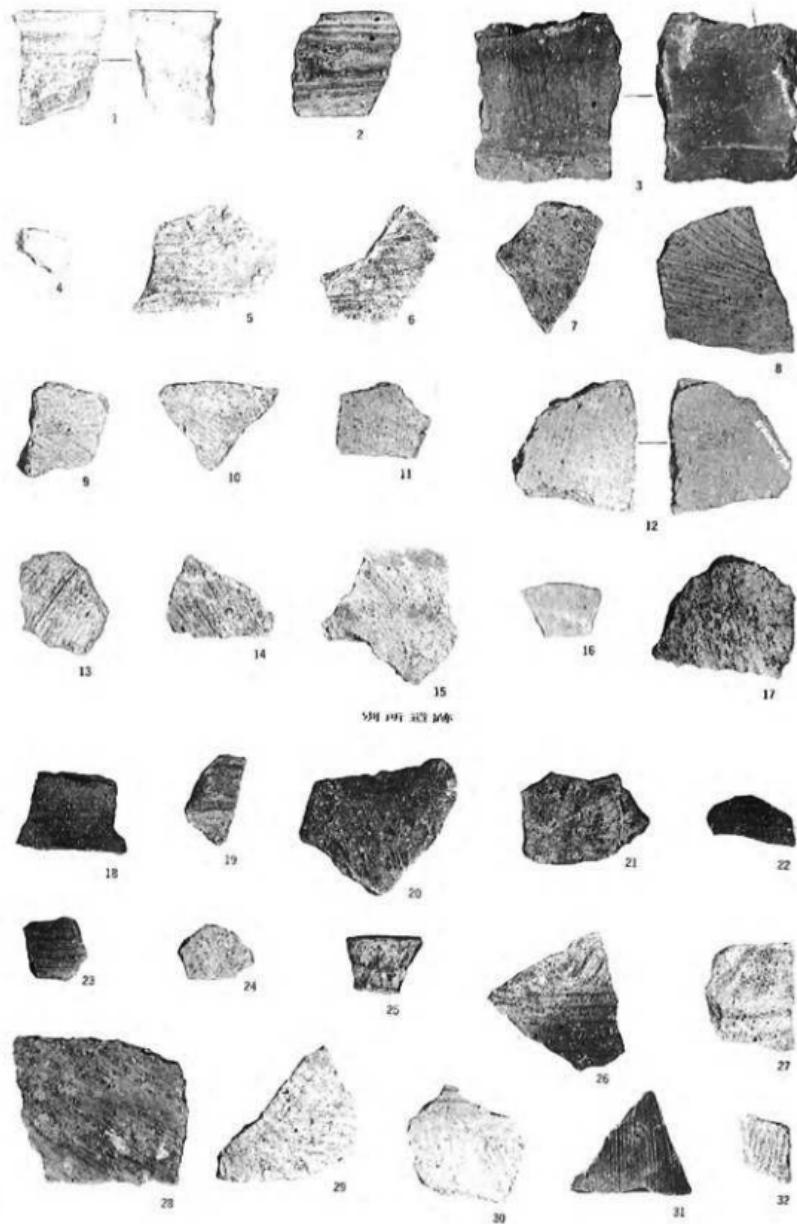


41

図版29 荻氏表探土器(4)



図版30 表採土器



富士宮市文化財調査報告書第13集

渋沢遺跡

平成元年3月13日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418 富士宮市元城町1番1号

(0544) 27-3111㈹

印刷 緑星社